

赤ちゃんから  
おとなまで

# 聖書教育

2023年

1  
2  
3

月号

ルカによる福音書

総主題

時代を生きる教会

テーマ

イエスの時、  
イエスのまなざし



## 2023年度プログラム表

## 年主題:「今」

課	月日			週題	聖書箇所
1	4月2日	受難週	ローマ	今日わたしと一緒に楽園に	ルカ23:26～43
2	4月9日	イースター		エマオの途上で	ルカ24:13～35
3	4月16日			福音を恥としない	ローマ1:8～17
4	4月23日			正しい者は一人もない	ローマ3:9～20
5	4月30日			神の恵みによる義	ローマ3:21～31
6	5月7日		ローマ	信仰によって生きる	ローマ5:1～11
7	5月14日			キリストにあやかる	ローマ6:1～14
8	5月21日			望まない悪を行うわたし	ローマ7:7～25
9	5月28日	ペンテコステ		霊の執り成し	ローマ8:18～30
10	6月4日		ローマ	主の名を呼び求める者は	ローマ10:5～13
11	6月11日			神の秘められた計画	ローマ11:25～36
12	6月18日	沖縄命どう宝の日		喜び人と共に喜び 泣く人と共に泣く	ローマ12:1～21
13	6月25日	神学校週間	創世記	キリストの福音をあまねく宣べ伝える	ローマ15:14～21
14	7月2日			天地の初め	創世記1:1～25
15	7月9日			創造の完成と安息	創世記1:26～2:4前半
16	7月16日			命の息を吹き込まれ	創世記2:4後半～17
17	7月23日			応え合う者として	創世記2:18～25
18	7月30日		エデンの園、追放	創世記3:1～24	
19	8月6日		創世記	カインの罪	創世記4:1～16
20	8月13日	平和		神の憐れみを受けて	創世記4:17～26(参照4:13～16)
21	8月20日			洪水の予告	創世記6:5～22
22	8月27日		箱舟生活	創世記7:1～24	
23	9月3日		創世記	洪水の終わり	創世記8:1～22
24	9月10日	教会学校月間		約束の虹	創世記9:1～17
25	9月17日			ノアと息子たち	創世記9:18～28
26	9月24日			バベルと呼ばれた町	創世記11:1～9
27	10月1日		イザヤ	行いの実	イザヤ3:12～15
28	10月8日			神の悲しみ	イザヤ5:1～6
29	10月15日			間違った正義	イザヤ5:7～9
30	10月22日			わたしと和解するがよい	イザヤ27:2～6
31	10月29日			呼びかける声	イザヤ40:1～11
32	11月5日		イザヤ	神の選んだ僕	イザヤ42:1～9
33	11月12日			国々の光	イザヤ49:1～6
34	11月19日			神に聞き従うもの	イザヤ50:4～11
35	11月26日	世界祈禱週間		インマヌエルの神	イザヤ53:1～8
36	12月3日		イザヤ	大いなる光	イザヤ9:1～6
37	12月10日			その名はインマヌエル	イザヤ7:10～14
38	12月17日			主によって確かなものに	イザヤ25:1～9
39	12月24日	クリスマス		光は闇の中に	ヨハネ3:16～21
40	12月31日			希望が語り継がれて	イザヤ61:1～3
41	1月7日		ヨハネ	あなたこそ神の子です	ヨハネ1:43～50
42	1月14日			水がめに水をいっぱい入れなさい	ヨハネ2:1～11
43	1月21日			その水をください	ヨハネ4:1～42
44	1月28日	協力伝道週間	ヨハネ	少しも無駄にならないように	ヨハネ6:1～15
45	2月4日			わたしは良い羊飼いである	ヨハネ10:7～18
46	2月11日	信教の自由	ヨハネ	主よ、信じます	ヨハネ9:1～40
47	2月18日			ラザロ、出て来なさい	ヨハネ11:1～44
48	2月25日			光を信じなさい	ヨハネ12:27～43
49	3月3日		ヨハネ	わたしはまことのぶどうの木	ヨハネ15:1～17
50	3月10日			しかし、勇気を出しなさい	ヨハネ16:25～33
51	3月17日			真理とは何か	ヨハネ18:28～38
52	3月24日	受難週		成し遂げられた	ヨハネ19:17～37
53	3月31日	イースター		わたしは主を見ました	ヨハネ20:11～23



## テーマ イエスの時、イエスのまなざし

## 教会学校の目的

教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、教会を形づくり、生全領域において主に聞き、主を証しする生活を確立していくことにある。

日本バプテスト連盟 1971年制定、1999年改訂

聖書教育ホームページ <https://www.bapren.com/>

1	目次	
2	プログラム表	
3	準備のための聖書日課	吉高 叶
特集・連載		
4~	<b>特集</b> レント・イースターメッセージ	野中宏樹
6~	<b>特集</b> 信教の自由を守る	細井留美
8~	<b>連載</b> 協力伝道週間をおぼえて	金丸 真
10~	<b>連載</b> 新『聖書教育』紹介	磯野泰子
12	執筆者紹介	
13	<b>概論</b> この時代に「ルカによる福音書」を読む	吉高 叶
今号の展開例 ● 第40課～第52課		
14~	聖書の学び・成人科	吉高 叶
16~	みんなで聴く聖書のおはなし	宮西千晴
17~	青少年科	エイカーズ 愛
18~	幼小科	永松 博
92~	暗唱聖句手話	塩山幸子
94~	暗唱聖句カード 新共同訳・口語訳	
99	『聖書教育』奉仕者紹介…英語版『聖書教育』翻訳者と校閲者編	
100	次号予告	

# 2022年度

聖書教育

2020～2022年度プログラム

総主題

時代を生きる教会

課	月 日		週題	聖書箇所
1	4月3日		ユダヤ人の王	マルコ15:6～20(参照15:1～5、21～32)
2	4月10日	受難週	あらわになった神	マルコ15:21～41
3	4月17日	イースター	約束のことは	マルコ16:1～8
4	4月24日		アテネでのパウロ	使徒17:16～34
5	5月1日		恐れるな、語り続けよ	使徒18:1～11
6	5月8日		それでもエルサレムへ	使徒20:17～38
7	5月15日		神の前で、人々の間で	使徒22:30～23:11
8	5月22日		鎖につながれながら	使徒26:19～32
9	5月29日		ともに元気に	使徒27:13～38
10	6月5日	ペンテコステ	聖霊は語り続ける	使徒28:17～31
11	6月12日		今や、明らかにされた!	コロサイ1:24～2:5
12	6月19日	沖縄命どう宝の日	新しい人を着て	コロサイ3:5～17
13	6月26日	神学校週間	祈りの輪の中で	コロサイ4:2～6
14	7月3日		ほめたたえられますように	エフェソ1:3～14
15	7月10日		かなめ石はキリスト	エフェソ2:14～22
16	7月17日		でっかい愛がうれしくて	エフェソ3:14～21
17	7月24日		心の底から新たにされて	エフェソ4:17～24
18	7月31日		愛されている子ども	エフェソ5:1～20
19	8月7日		神の武具を身に着けなさい	エフェソ6:10～20
20	8月14日	平和	平和を実現する人々	マタイ5:9
21	8月21日		それでも神さまに	ダニエル1:1～21
22	8月28日		ダニエルは思慮と知恵とをもって	ダニエル2:1～24(参照2:25～45)
23	9月4日		燃え盛る炉の中で	ダニエル3:13～30
24	9月11日	教会学校月間	獅子の洞窟の中で	ダニエル6:10～29
25	9月18日		ダニエルの祈り	ダニエル9:1～19
26	9月25日		その時まで、その時には	ダニエル12:1～13
27	10月2日		バビロンからの帰還	エズラ1:1～11
28	10月9日		神殿建設のはじまり	エズラ3:1～13
29	10月16日		神殿の完成	エズラ6:13～22
30	10月23日		礼拝を整える人たち	エズラ8:15～23(参照8:24～30)
31	10月30日		エルサレムへの想い	ネヘミヤ2:1～10
32	11月6日		良い企てへの備え	ネヘミヤ2:11～20
33	11月13日		主を喜び祝う日	ネヘミヤ7:72～8:12
34	11月20日		みんなで賛美	ネヘミヤ12:27～43(参照12:44～47)
35	11月27日	世界祈祷週間	立ち上がるイエスさま	ルカ4:16～21
36	12月4日		ヨハネ誕生の約束	ルカ1:5～25
37	12月11日		イエス誕生の約束	ルカ1:26～38
38	12月18日		マリアとエリサベト	ルカ1:39～56
39	12月25日	クリスマス	イエスの誕生	ルカ2:1～20
40	1月1日		十二歳のイエス	ルカ2:41～52
41	1月8日		荒れ野の試み	ルカ4:1～13
42	1月15日		あなたの罪は赦された	ルカ5:17～26
43	1月22日		安息日の主	ルカ6:1～11
44	1月29日	協力伝道週間	ヨハネの時、イエスの時	ルカ7:18～35
45	2月5日	信教の自由	イエスの涙、イエスの怒り	ルカ19:41～48
46	2月12日		ともし火をともして	ルカ8:16～18
47	2月19日		神の前に豊かに	ルカ12:13～21
48	2月26日		見つけだすまで	ルカ15:1～10
49	3月5日		気を落とさずに	ルカ18:1～8
50	3月12日		主がお入り用なのです	ルカ19:28～40
51	3月19日		ぶどう園はだれのものに	ルカ20:9～19
52	3月26日		最後の晩餐	ルカ22:14～23

2022年4月現在



2023年1月

準備のための聖書日課

1日◎ ルカ2:41～52	十二歳のイエス	17日◎ 出エジプト20:8～11	休み、休ませる日
2日◎ 申命記8:2～6	神の言葉で生きる	18日◎ 申命記5:12～15	解放を思い起こす日
3日◎ エレミヤ15:16	御言葉を食べて	19日◎ サムエル上21:1～7	ダビデの場合
4日◎ アモス書8:11～12	御言葉への飢え	20日◎ ルカ13:10～17	働くべき日は今日
5日◎ ルカ22:24～30	いちばん偉い者は	21日◎ ルカ14:1～6	安息日に病気を癒やす
6日◎ ルカ23:32～38	「自分を救え！」	<b>22日◎ ルカ6:1～11</b>	<b>安息日の主</b>
7日◎ ローマ8:35～39	何ものにも引き離されない	23日◎ マラキ書3:1	道を備える使者
<b>8日◎ ルカ4:1～13</b>	<b>荒野の試み</b>	24日◎ ルカ3:1～14	ヨハネの登場
9日◎ 創世記3:8～9	あなたはどこにいるのか	25日◎ ルカ3:15～20	ヨハネの「メシア像」
10日◎ 創世記4:8～9	きょうだいはどこにいるのか	26日◎ ルカ16:14～18	これまでとこれから
11日◎ ルカ5:27～32	わたしが来たのは	27日◎ 使徒10:34～43	ヨハネの後に
12日◎ ルカ6:6～11	安息日の解放	28日◎ 使徒18:24～19:7	イエスの名によるバプテスマ
13日◎ ルカ6:37～38	罪人だと決めるな	<b>29日◎ ルカ7:18～35</b>	<b>ヨハネの時、イエスの時</b>
14日◎ ルカ7:36～43	「罪深い女」の解放	30日◎ イザヤ書56:6～8	すべての人の祈りの家
<b>15日◎ ルカ5:17～26</b>	<b>あなたの罪は赦された</b>	31日◎ エレミヤ7:1～11	強盗の巢窟
16日◎ 創世記2:1～4a	祝福と聖別の日		

2023年2月

準備のための聖書日課

1日◎ ルカ16:13	神と富とに仕えられない	15日◎ 一コリント16:1～4	エルサレム教会への募金
2日◎ ルカ21:5～6	神殿崩壊の予告	16日◎ フィリピ4:10～20	贈り物への感謝
3日◎ ルカ21:20～24	エルサレム滅亡の予告	17日◎ ルカ12:4～7	一羽の雀さえ
4日◎ ルカ13:31～35	エルサレムのために嘆く	18日◎ ルカ12:22～34	思い悩むな
<b>5日◎ ルカ19:41～48</b>	<b>イエスの涙、イエスの怒り</b>	<b>19日◎ ルカ12:13～21</b>	<b>神の前に豊かに</b>
6日◎ ルカ8:4～15	種を蒔く人のたとえ	20日◎ ルカ4:16～21	イザヤの言葉とイエス
7日◎ ルカ8:19～21	聞いて行商人こそが	21日◎ ルカ5:27～32	わたしが来たのは
8日◎ ルカ10:21～24	あなたが、今聞いていることこそ	22日◎ ルカ8:42b～48	イエスの服に触れた女
9日◎ ルカ12:49～53	分裂さえももたらす	23日◎ ルカ19:1～10	見いだされたザアカイ
10日◎ ローマ10:14～21	聞くことによって始まる	24日◎ 使徒言行録13:44～52	異邦人たちへ
11日◎ マルコ4:21～25	何を聞いているかに注意を	25日◎ ルカ15:18～24	待ち続ける父
<b>12日◎ ルカ8:16～18</b>	<b>ともし火をともして</b>	<b>26日◎ ルカ15:1～10</b>	<b>見つけたすまで</b>
13日◎ 使徒3:1～10	私には金銀はないが	27日◎ ルカ6:12～16	夜通し祈るイエス
14日◎ 使徒4:32～37	わかちあって生きる	28日◎ ルカ9:43b～45	自分の死を予告する

2023年3月

準備のための聖書日課

1日◎ ルカ11:1～13	祈るときには	17日◎ 使徒言行録2:22～42	ペトロの説教
2日◎ ルカ12:22～34	神の国を求めなさい	18日◎ 一ペトロ2:1～10	生きた石の上に
3日◎ ルカ17:20～37	神の国が来る	<b>19日◎ ルカ20:9～19</b>	<b>ぶどう園はだれのものに</b>
4日◎ ルカ22:39～46	オリブ山で祈るイエス	20日◎ 出エジプト12:21～28	主の過越
<b>5日◎ ルカ18:1～8</b>	<b>気を落とさずに</b>	21日◎ ルカ9:21～27	十字架を負うて
6日◎ ルカ9:21～27	苦難の予告	22日◎ ルカ22:24～27	仕える者となりなさい
7日◎ ルカ9:51～55	エルサレムに向かう決意	23日◎ ルカ23:44～49	イエスの死
8日◎ ルカ21:5～6	神殿の崩壊	24日◎ 一コリント11:23～26	主の死を告げ知らせる
9日◎ ルカ21:20～24	エルサレムの滅亡	25日◎ 一コリント11:27～34	主のからだをわきまえて
10日◎ ゼカリヤ書9:9～10	ゼカリヤの預言	<b>26日◎ ルカ22:14～23</b>	<b>最後の晩餐</b>
11日◎ マルコ11:1～11	マルコが記す入城	27日◎ ルカ22:39～46	オリブ山の祈り
<b>12日◎ ルカ19:28～40</b>	<b>主がお入り用なのです</b>	28日◎ ルカ22:54～62	イエスのまなざし
13日◎ 創世記1:27～31	被造世界の祝福	29日◎ エレミヤ31:31～34	赦しの契約
14日◎ イザヤ5:1～7	ぶどう畑の歌	30日◎ ルカ23:13～21	十字架につける
15日◎ 詩編118:22～25	家造りらが退けた石が	31日◎ 詩編22:17～19	くじを引く
16日◎ イザヤ書28:16～18	堅く据えられた礎	<b>4月 1日◎ 黙示録2:7</b>	命の木の実

準備のための聖書日課

（聖書は、日本聖書協会新共同訳を使用）



# レント・イースター メッセージ

「それでも、  
イースターおめでとう  
と言いたい…」

マルコによる福音書14章28節



鳥栖キリスト教会 牧師  
野中宏樹

「しかし、私は蘇った後、あなた方を先立ち導いてガリラヤへと行くであろう」

マルコによる福音書 14 章 28 節 田川建三訳

旧約聖書の預言者たちは、神なき民への「亡国」を告げました。そして、今、私たちの周りで起きている事は、「神なき世界」の「滅亡」を思わされます。この世界に、子どもたちの未来に、希望はあるのかと暗澹<sup>あんたん</sup>たる思いです。このどうにもならない世界の中で、私たちは、“それでも” イエス・キリストの復活を喜ぶイースターを迎えます。

イエスさまの弟子たちも、イエスさまが十字架に架けられ、死んで墓に葬られてしまった時、絶望的な気持ちになったと思います。しかもイスカリオテのユダのみならず、全員がイエスさまを裏切って逃げってしまったという後ろめたさを思いっきり抱きながら…。けれども、復活のイエスさまの出来事が彼らに知らされた時、彼らは、イエスさまのあの約束の言葉を思い起こしました。「しかし、私は蘇った後、あなた方を先立ち導いてガリラヤへと行くであろう」(田川建三訳)。あのガリラヤへ共に行こうと言われるのです。

ガリラヤとはどのような場所だったのでしょうか。ガリラヤは夢の楽天地などではなく、人々は、情け容赦のないローマ帝国やヘロデの支配、エルサレムの宗教的支配者たちによって幾重にも苦しみ続けていました。平和のかけらはどこにもなく、混沌として、いつも殺意と敵意が充満していました。分けても小さく弱く貧しい人々は貪られ、見捨てられ、涙を流し、悲しみと絶望に暮れていました。そして、今、私たちの周りでも当時のガリラヤのような理不尽が起きているように思えるのです。

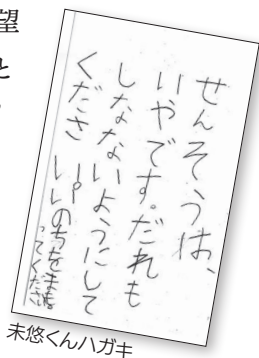
先頃凶弾に倒れた元総理大臣は在任中、様々な

“悪法”を次々に成立させました。第一次政権時代の2006年には「教育基本法改正（改悪）」が成立し、防衛庁の防衛省への“格上げ”がなされました。また第二次政権時代の2013年には「国家安全保障会議の創設関連法」や「特定秘密保護法案」、2014年には「改正通信傍受法」が成立しました。同2014年に、それまでの歴代内閣が堅持してきた憲法第九条の解釈を廃棄し、集団的自衛権行使容認の閣議決定を強行し、2015年には「平和安全法制」（いわゆる「戦争法案」）が最後は非民主的な強引な方法で強行採決され成立しました。これ以降も2017年には「共謀罪」の構成要件を改める「改正組織犯罪処罰法」成立など、この国の主権者である多くの人々が反対の声をあげたにも関わらず、私たちの基本的人権を侵害し、戦争ができる法整備がなされた国へと“変貌”してしまいました。またその間も、日々米軍の存在によって痛みを背負わされ続けてきた（私たちヤマトの人間が背負わせてきた）、沖縄の人々の懸命な叫びを圧殺して辺野古の米軍新基地建設は進められました。さらに現在は、沖縄本島だけでなく、宮古島や奄美大島への軍事施設の建設、そして私の暮らす佐賀空港の軍事化の準備、佐世保の水陸機動団の創設など自衛隊の増強が推し進められ、沖縄から北部九州に至る一大軍事拠点が作られつつあります。また、世界を見渡せば、富める者とそうではない人々との格差は拡大する一方です。民同士の憎しみと暴力の連鎖、強い者による弱い者への圧迫と貪りや暴力、少数者への差別や偏見が至る所に見られます。国連のデータに依れば世界中で8億1100万人の人が飢餓線上にあると言います。さらに、私たち人間の野放図な経済活動による環境汚染は深刻化するばかりです。そし

て地球温暖化によって気象が激変し、被造世界に襲いかかるといふ事態を招いています。愚かにも私たち人間はそのような危機的な世界の中にあってもなお、「今だけ・自分だけ・お金だけ」という大きな潮流に押し流される一方です。

どうにも悲しい救いようのない出来事に満ちたガリラヤでイエスさまは「神さまは、今ここに、あなた方と共におられる。神の国はもう始まっている。さあ立ち上がって共にあゆもう」と語り始めました。そして、病や、障がいや、出自、職業などの故に差別され、痛み、悲しみの底にあり、絶望の淵にある人々と共に歩み出したのです。復活のイエスさまはあのガリラヤへ共に歩み出そうと私たちを招いています。このイエスさまの言葉こそ、“それでも”イースターの朝を迎えている私たちへの招き、希望と喜びの言葉です。

2015年に「戦争法案」が審議されていたときに、鳥栖教会の小学校2年生（当時）の未悠くんが、総理大臣にハガキを書きました（コピー参照）。彼の勇気ある行動は教会のすべての人々の心を動かし、彼と共に総理大臣宛のハガキが沢山送られ、そのコピーが掲示されましたが、壁に貼られたハガキたちの群れは、からしだね一粒から広がる「神の国」のように思えました。主イエスさまと共に、あのガリラヤで見る希望とは、このような所にあるのだと思います。だから、「それでも」イースターおめでとうございませう」という言葉を聞き合いたいです。



未悠くんハガキ



# 信教の自由を守る ～人間らしく生きる権利を 守るために～

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」  
(エジプト記 20 : 2 ~ 3)

2月11日「建国記念の日」を、日本のキリスト教諸教会では「信教の自由を守る日」としています。それは、「建国記念の日」制定への反対表明です。

「信教の自由」は、日本国憲法第二十条で保障された国民の権利の一つです。それは、①信仰の自由（特定の宗教を信じる自由と信じない自由）、②宗教行為の自由（礼拝や祈祷など宗教上の儀式や式典を行い、それに参加する自由と参加しない自由）、③宗教的結社の自由（宗教行為を行う団体を結社する自由）です。同時に政治と宗教が干渉しあうことを禁止する政教分離が定められています。「信教の自由」と「政教分離」は、歴史的にバプテストの先達が主張し獲得した権利です。

ところが、1966年に定められた「建国記念の日」は、大日本帝国政府が2月11日と定め、戦後廃止されていた祝日、紀元節の復活なのです。紀元節は、古事記や日本書紀で最初の天皇と伝えられている「神武天皇即位の日」という神道神話に由来する祝日で、宮中祭祀（天皇が中心となって行う神道儀式）と結びついたものでした。大日本帝国政府は、近代国家を形成するために国民を統一し、天皇を中心とした絶対的な思想を確立しようと国家神道を創設しました。紀元節は、その流

れの中で制定された祝日です。国家神道において、天皇は現人神あらひとがみとして信仰の対象であると同時に、祭儀を行う最高祭司に位置付けられました。しかし、政府は「神道は宗教にあらず」（日本人の習俗や道徳である）という論理で、すべての国民に国家神道の儀礼への参加を強制しました。そして、天皇はその家系、血統、特殊な起源ゆえに他国の元首よりも優れており、天皇の国である日本および日本国民も他国や他国民よりも優れているとの国家神道観は日本人の精神を支配し、軍国主義を支え、日本のアジア侵略を後押ししたのです。そして教会も「神道は宗教にあらず」という論理に与し、天皇や神社への礼拝を自ら受け入れ、積極的に戦争に協力していったのです。それは、真の神の礼拝ではない、神ならざるものを神とする行為でした。

国家が宗教と結びつき、神ならざるものが神とされた時、「天皇のために、天皇の国のために」という大義名分の下、人間の命は軽んじられ、国家に利用されて使い捨てられました。このことを歴史から学んだからこそ、紀元節である2月11日を「信教の自由を守る日」としたのです。

聖書は、神ならざるものを神とした時、幸

細井留美

東京北キリスト教会 牧師  
教会教育専門委員



せになれないことを私たちに伝えていきます。出エジプト記には、絶大な権力を持ち、神に等しい存在であったエジプト王ファラオの下で、寄留者であったイスラエルの人々が、過酷な労働や人口抑圧に苦しめられた様子が記されています。ファラオが絶大な権力を手にした背景には、食糧危機の時にエジプトの大臣となったヤコブの息子ヨセフの中央集権的な政策がありました（創世記47章）。ファラオに権力が集まった結果、被支配民が苦しむ構造ができあがったのです。時代が変わりイスラエルの人々の苦しむ声を聞いた神は、モーセを遣わし、人々をエジプトから救い出します。そして、彼ら彼女らを自分の民とし、その神となることを約束します。人間の支配によって苦しめられていた人々に神は言われます。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」と。神ならざるものが神となる時、すなわち、人間が人間を支配する時、人は幸せには生きられないと神は警告しています。真の神を神とする時、人は苦しみから解放され、人間らしく生きることができる」と聖書は教えているのです。私たちが

真の神を礼拝し、人間らしく生きるためには、信教の自由とそれを保障する政教分離の原則が侵害されないように、政治を見張る必要があるのです。

この原稿を執筆している今現在、元首相銃撃事件に端を発した旧統一協会と政治家の癒着が問題となっています。政治家たちは旧統一協会の強引な勧誘や集金が社会問題となったにも関わらず、その被害に目をつぶり、選挙協力という自分たちの利益を優先させてきました。教祖や幹部が信者を支配し、脅迫によって人々に「信仰」を強要する旧統一協会は、宗教ではなくカルトです。そこには個人の自由な信仰はありません。

また、現首相が元首相の「国葬」を、議論なく閣議決定したことも大きな問題です。故人を弔うことは個人的なことであるにも関わらず、元首相の家族葬の段階ですでに、学校に半旗掲揚を要請した教育委員会がいくつも存在します。「国葬」の実施は、私たちに弔意を強要します。これは、日本国憲法が保障する思想・良心の自由の侵害、であり「信教の自由」に反すること、すなわち基本的人権の侵害の危機なのです。



# 時代を生きる教会として・協力伝道

## 協力伝道としての『聖書教育』

### 今、共にキリストを証しするために

2023年1月29日(日)～2月5日(日)まで、私たち日本バプテスト連盟では協力伝道週間として過ごします。現在、機構改革の中にあり、改革主題を「今、共にキリストを証しするために～新たな『自立と協力』」と定め、なお一層、各個教会と地域が主体となる協力伝道を目指しています。その協力伝道とは何でしょうか。一つは、「宣教の内実を深め合うこと」だと私は思います。自分の教会の現場において聖書を読み、祈り、言葉を紡ぎ出すことは大切な営みです。それだけではなく、全国の教会・伝道所、あるいは国外の現場における聖書の読み、祈り、言葉の分かち合いで新たな気付きが与えられ、お互いに宣教の内実を深め合うことができる、それが連盟の協力伝道の恵みではないでしょうか。諸教会・伝道所の現場を大切にし、聴き合い、学び合い、つないでいくのです。それは、教会・伝道所と教会・伝道所をつなぐだけでなく、教会・伝道所と新しい出来事をつないでいくことでもあります。主イエスは、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と問われました(ルカ10:26)。私たちが「どう読んでいるのか」を主イエスは問うておられます。今、この時代において聖書を「どう読んでいるのか」を諸教会・伝道所同士で深め合うことが、「今、

共にキリストを証しする」協力伝道そのものだと思います。

### 協力伝道としての『聖書教育』

まさにその働きを担っているものの一つが『聖書教育』です。『聖書教育』は協力伝道そのものです。様々な現場にある方々が執筆し、執筆者会議で互いに「どう読むか」を真剣に聴き合い、共同学習をした原稿が掲載されます。その『聖書教育』を手にとった私たちも、「こう読みなさい」ではなく「あなたはどう読むか」という真剣な問いをいただきつつ、自身の教会の現場において共同学習へと導かれるのです。「聖書の学び」はしっかりとした聖書研究になっていますが、ただの聖書解説書ではなく、協力伝道を共に担っている者同士が「どう読むか」を聴き合い学び合う大切な働きを担っているのです。

この『聖書教育』は、今機構改革の検討の結果、重要な働きとして継続することになりました。しかし財政課題により、これまでの形ではあと数年で発行できなくなると分析され、大きな変化を迫られました。内容をスリム化し、さらに購買数も増やさなければ継続も難しい状況です。誌面に何を残すか、これを機に新しいチャレンジができないかなど検討を重ね、「みんなで『これ連』」や諸教会・





伝道所の教会教育担当者との協議、拡大会議などを経て、理事会のもとに新『聖書教育』準備委員会が立てられ、2023年度から月刊『聖書教育』が新しく発行されることになりました。

## 毎日開く『聖書教育』、 対話が生まれる『聖書教育』

コンセプトは、「毎日開く『聖書教育』、対話が生まれる『聖書教育』」です。新しい『聖書教育』では、聖書日課にショートメッセージをつけることで、毎日開いて用いられるようにと期待しています。毎日一人ひとりが『聖書教育』によって養われ、その養いを持ち寄り、「先週はこんなことを考えさせられた、こんなことを祈らされた」など対話が生まれ、それが共同学習の素地になることを願っています。

## 新しいチャレンジ

要望が多かった「聖書の学び」と子どもの活動のための「ワークシート」はこれからも掲載していきます。「成人科」「青少年科」「幼小科」という名称ではなく、「聖書の学び」を受けての共同学習のために「大人クラス」「子どもクラス」を新設しました。各教会の状況に合わせて用いてください。また、今機構改革の三本柱の一つ「多様な

声が響き合う連盟機構へ」という方向性を受けて、5週ある月には「多様な私たちが共に〜キリストを証しするために」という、多様な私たちを知り合う新企画も計画されています。

何より大きなチャレンジが月刊化です。月刊化によって毎月届くフレッシュさに加え、軽量化で、持ち歩きにも便利になり気軽に読めるという利点があります。さらに1カ月ごとに執筆者が立てられることによって、より多くの出会いが与えられることが期待できます。

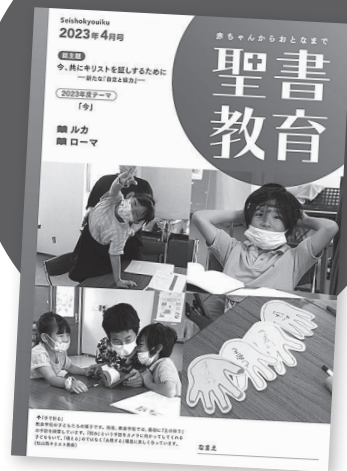
## 共につくっていく『聖書教育』

最後に、新しい『聖書教育』は諸教会・伝道所と共につくっていくことを目指しています。諸教会・伝道所の声を受信して柔軟に改善し深化していくということです。もう一つは、『聖書教育』に要望を詰め込んでいくのではなく、諸教会・伝道所が『聖書教育』を「どうアレンジし、どう使っているか」を分かち合うことも含めて、共につくっていきたいのです。

『聖書教育』が教会学校を支えるだけではなく、礼拝や祈祷会、家庭集会や日々の学びなどのために、幅広く用いられることを願っています。ぜひ一人ひとり手に取っていただき、大切な協力伝道の働きを担う『聖書教育』運動に、主体的に参加してください！

## 2023～2025年度総主題

# 今、共にキリストを 証しするために ～新たな『自立と協力』



『聖書教育』を教会学校や教会の諸活動で用いていただき感謝いたします。これまで3か月毎に発行していた季刊誌『聖書教育』が、2023年4月号からは毎月発行する月刊誌『聖書教育』となります。ますます購読者の皆さまに喜んで用いていただけるように、内容もリニューアルしてお届けいたします。

### ⊕プログラムの概要

2023年度からの月刊『聖書教育』は、日本バプテスト連盟の機構改革が進む中、これからの連盟検討委員会と新『聖書教育』準備委員会が協働しながら企画を進めています。この度の機構改革理念に基づき、2023～2025年度の3年は総主題を「今、共にキリストを証しするために～新たな『自立と協力』」としました。そして年毎に「今」「共に」「キリストを証しするために」と、順を追ったプログラムとして学ぶ予定にしています。2023年度の年主題は「今」です。今、この時代に私たちが直面している宣教テーマに向き合いながら、聖書が語りかける福音を分かち合いたいと願っています。

### ⊕コンセプト

ここ数年コロナ感染症拡大の影響を受けて、多くの教会では教会学校や諸集會を休止する経験をしています。「共に聖書を読みあい、神さまからの語りかけを聞きあう『共同学習』が定着してきたばかりだったのに教会

学校が行えないのは残念だ」という声も、聞こえてきておりました。そこで、たとえ対面クラスでなくても、オンラインやハイブリットのクラスで、また毎日読む聖書で、同じみ言葉から聞きあう喜びを『聖書教育』でつなぐお手伝いができないかと考えました。一人ひとりが毎日み言葉からその日生きる糧をいただき、誰かとみ言葉を分かち合う恵みを受け取ることを大切にしたいと願いつつコンセプトを決めました。

### 月刊『聖書教育』のコンセプト：

毎日開く『聖書教育』、  
対話が生まれる『聖書教育』

- \* 共同学習のために
- \* 一人ひとりの学びのために
- \* 子どもたちの活動のために
- \* 多様なわたしたちが共にキリストを証しするために

### ⊕新プログラムの内容と特長

- ・サイズ…これまでのB5サイズより少し大きめのA4サイズで、表紙を含めて16ページ（4週月）または20ページ（5週月）となります。コンパクトに持ち運べて便利になります。
- ・巻頭言メッセージ（1頁）…総主題や年主題も心にとめながらの教会暦・バプテストの暦からのメッセージです。



日本バプテスト連盟 宣教部  
教会教育室  
『聖書教育』編集担当  
磯野泰子

- 4月：イースター、5月：ペンテコステ、6月：  
沖縄命どう宝の日、7月：神学校週間、8月：  
平和、9月：教会学校月間、10月：バプ  
テスト、11月：世界バプテスト祈祷週間、  
12月：クリスマス、1月：協力伝道週間、  
2月：信教の自由、3月：受難週
- ・年間プログラム表と目次（1頁）…1年間の主日の聖書箇所が一覧となっています。
  - ・聖書の学び（1頁）…いくつかの立場の解釈が含まれるような幅広い聖書研究を目指します（約1200字）。
  - ・共同学習（大人クラス）…聖書から聴き、年主題「今」について意識しながら、大人クラスで共同学習を深めていくためのポイントを分かち合います（約250字）。
  - ・共同学習（子どもクラス）…子どもたちとクラスで学びのテーマについて考え、話し合うためのポイントを分かち合います（約250字）。
  - ・毎日のみことば（月～土）…「聖書の学び」を受けての黙想や、次週のため準備となる聖書箇所からのショートメッセージ（約120字）です。聖書から日々養われることを大切にして、個人やまたは仲間と共に、毎日み言葉に触れて言葉を交わし合いたくなるようなメッセージをお届けいたします（共同学習と毎日のみことばで1頁）。
  - ・ワークシート（1頁）…子どもたちの共同学習用ワークシート。イースターやクリスマスプログラムのためのアイデアも含め

●お申し込みは連盟販売管理室まで●

日本バプテスト連盟

〒336-0017

埼玉県さいたま市南区南浦和 1-2-4

TEL：048-883-1091

FAX：048-883-1092

Eメール：hanbai-kanri@bapren.jp

て掲載いたします。

- \* 「聖書の学び」から「ワークシート」までは毎週分掲載されます。
- ・記事「多様なわたしたちが共に」（5週月のみ1頁）…副題は「キリストを証しするために」としています。教会学校の働きは、教会の中だけではありません。生の全領域で、主を証しすることは、様々な出会いと出来事を生み出します。そうした「今」の時代を生きる教会で共に分かち合いたいテーマに迫ります。（約1,200字）

#### ⊕価格

年間予約購読4000円（12冊、税込）にてご注文を承ります。

年度途中からのご注文は、1冊385円（税込）となります。

#### ⊕翻訳用データ版と音声変換用データ版

外国語に翻訳したいという方向けに「翻訳用データ版」（テキストデータ）でも購読が可能です。必要な言語にするため翻訳ソフトやアプリをご利用になる場合にかぎりません。（巻頭言メッセージ・聖書の学び・共同学習（大人クラス）・共同学習（子どもクラス）・毎日のみことば・5週月記事「多様なわたしたちが共に」）

また、視覚障がい者の方々には「音声変換用データ版」（テキストデータ、PDFデータ）も購入可能です。



## 執筆者紹介



概論・聖書の学び・成人科

よしたか かのう  
**吉高 叶**

市川八幡キリスト教会 牧師

「時代を生きる教会」シリーズの最終の刊となりました。今シリーズ

の企画会議に同席したときには、自分が執筆するとは思っていませんでした。責任に繋がれ、責任に招かれていくって、不思議で感謝なことですね。『聖書教育』ができるまでのプロセスをずっと見てきました。執筆者群も編集・発行側も、いつも息の詰まる道程でしたね。ほんとうにお疲れさまでした。このスタイルの最後の刊に携われて心より感謝しています。



みんなで聴く聖書のおはなし

みやにし ちはる  
**宮西 千晴**

富士吉田バプテスト教会 牧師

執筆者会議はとても楽しい共同学習でしたが、実際書き始めると至

難の業。聖書と取っ組み合いの日々となりました。また、見えない方々に向けて語るのは本当に未知の世界でした。普段教会で語る「おはなし」は、引き出してくれる目の前の聴衆との共同作業であったと気づかされました。多くの助け、特にスタッフの方々の叱咤激励に感謝でいっぱいです。ただ、初めての執筆が『聖書教育』の「おはなし」最後の号で恐縮しています。



青少年科

あい  
**エイカーズ 愛**

小樽バプテスト教会 牧師

小さい頃から教会学校で学んできた沢山のみ言葉が今もお私

を生かしています。共に読み学ぶ中で神さまの言葉が立体的に迫ります。教会の青少年、また昨年の青少年少女大会での対話の中からヒントを得ながら少しずつ書かせていただきました。小樽では「準備のための聖書日課」を毎朝それぞれで読みましようと呼びかけあい、教会学校では聖書箇所でのディポジションと、分かち合いを時々合同で挑戦し豊かな学び合いが与えられています。



幼小科

ながまつ ひろし  
**永松 博**

臼杵キリスト教会 牧師

主題「時代を生きる教会」を意識しながら聖書と向き合いました。

また、みなさんの教会やクラスの一参加者として加わらせていただく気持ちで書いています。いまという時代に生きるわたしたちが感じ、捉えている感覚をたいせつに聴き合いながら、いっしょに聖書を読むことを楽しめたなら幸いです。いまの形では最後となる『聖書教育』を味わい、次年度からの新たな『聖書教育』にも期待しております。



表紙

みうら  
**三浦 あや**

藤沢バプテスト教会  
教会員

表紙タイトル「見つけだすまで」

ルカによる福音書 15章 1～10節から迷子の羊を探し出し、連れて帰るイエスさまを、現代を生きる様々な人たちと共に描きました。どんな時でもイエスさまが先立って歩いておられるという、希望のメッセージを持たせました。今までの『聖書教育』は最終号となりますが、これからもみんなでイエスさまと共に歩いていきましょう! 3年間表紙画作成のご奉仕に関わらせていただき心から感謝致します。

編集後記

季刊誌として発行される『聖書教育』は今号を持って終了いたします。編集の一端を担って参りました者として、購読者の皆さま、執筆者はじめ、ご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。これまで教会教育室の働きの一つとして発行して参りましたが、機構改革にあたり、月刊『聖書教育』は、業務委託の編集人にバトンを渡して参ります。これからも皆さまの日々の養いとして、またバプテスト連盟の教会形成に役立つ学びが提供されますので、引き続きよろしくお願いたします。  
教会教育室室長 富田直美

# この時代に 「ルカによる福音書」を読む

市川八幡キリスト教会  
牧師 吉高 叶

『ルカによる福音書』はもともと「福音書」として独立して書かれたものではなく、続く第Ⅱ巻『使徒言行録』と繋がる流れを持っています。ルカが生きた時代に、一緒に生きていた人々と、「神のみ業はどのように動いてきて」「そして今はどのような時なのか」を真剣に聴き取ろうとして編集した歴史的な著述文書の前半部分です。

ルカによる二つの文書が著されたのは、70年のエルサレム陥落のずっと後の時代です。

もともとはユダヤ人クリスチャンたちが中心に形成していた教会も、いまやすっかり「異邦人」たちの共同体となり、世代も重ねていました。そんなキリスト教会にとって、ユダヤ的過去と自分たちとはいったいどんな関係があるのだろう、はるか50年以上も前に死んだ「地上のイエス」とどんな関係があるのだろう。ローマの反逆者として殺されたイエスを「救い主」と信じ続けることは、ローマ支配のこの世界ではとてもリスクが高いのに、でも、そうする意味は何なのか。それに、今なお執拗に攻撃してくるユダヤ主義者たちにどう向かい合うべきなのか。自分たちは、自分たちが生きているこの時代の中で「教会という生き方」をどう見極めれば良いのだろう。そこに執筆（編集）の動機を持ったルカがいて、そ

れをわかちあった共同体がありました。

イエスの業はこの世の力とどう違っていたのか。イエスの言葉はこの世の知恵とどう違っていたのか。イエスは人間を何から解放しようとしていたのか。イエスは何に怒り、何に挑み、何を尊び、誰を慈しみ、そして祝福したのか。そのイエスを知り、そのイエスと生きたい。いま、自分たちは身分や階級、経済格差、人種や信仰、地域対立を帝国に利用されながら支配されているけれど、イエスはそれらをどう見ていただろう。この時代に立ちただかる根強いバリアを克服するにはどうすればいいのか。そうした視点も、ルカの「イエスを見つめるまなざし」に豊かに注がれています。つまり、ルカ自身が、「時代の中でイエスを読み」、神のみ心に生きようとした人でした。

3年に及ぶコロナの疲れ、困窮者の続出。ミャンマー国軍クーデターの暴挙がまかり通り、ロシアのウクライナ侵攻という破壊と殺戮。悲しみがそこかしこで立ちのぼる時代には、その時こそその「聖書の読み方」があるでしょうし、その時こそその「イエスとの出会い方」があるはずです。時代の中で、教会の生き方を探すために、私たちは繰り返し、聖書と、そしてイエスと対話を続けるのです。



# 十二歳のイエス

聖書

ルカによる福音書2章41～52節

暗唱  
聖句

イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。  
ルカ 2 : 52

40  
課

1月1日

## 萌芽

ルカ福音書の著者（以下ルカ）は、唯一少年イエスの姿を記しイエスの生涯、その言葉と業の独特性の兆しを印象づけています。イエスの宣教は、ユダヤ教の律法に根ざしているながらも、偏狭なユダヤ主義や窮屈な律法主義を超えて、民族や国の境界を越え、また縛りつけられている「身分」や「属性」を超えて人間を解放し、新しい基準で結び合わせていく視野と視点を持っていました。そのような視座、視点、視線をイエスはどこで身につけたのでしょうか。ルカは、12歳の少年イエスの姿に、すでにその「萌芽」が見られることを示しています。少年にして、神を父と呼び、神殿を「父の家」と語るほどの自己理解をイエスが持っていたこと、その独特性を強調しているのです。

## 賢く、しかし危険な知恵

神殿の境内で律法を論じ合うことを日課としていた学者たちは、自分たちに物怖じせずに向かい合い、鋭い質問を放ち、また驚くべき受け答えをする少年に驚愕しています。単に知識の豊富さに驚いたのではなく、それまで律法を論じてきた自分たちの観点とはまるで違うところから人間や物事を見、律法と詩編と預言書を解釈していく、その着眼点の新鮮さに驚きを禁じ得なかったのではないのでしょうか。手前の40節にある「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」という一文に含まれる「養いと培い」

の深みを想像し、さらにはその育みをもたらしていた「見えない教育者」の存在を黙想したいと思います。

ただし、少年ゆえに人々からたいそう驚かれ、「賢い」と称賛されたイエスでしたが、大人になり、公生涯の歩みの中で語った際には、そうはいきませんでした。宗教的に「不可触」とされた人々に進んで寄り添い、また安息日であろうとも求める人を癒やしながら語り抜くイエスの「神の国」の宣教に、多くの人々は躓き、怒り、放ってはおけないと封殺を試み、憎んでいったのです。

## 刺し貫く

ルカは、イエスの誕生記事の中に、母の「驚きと思い巡らし」を繰り返し差し込んでいます。受胎告知の際の「戸惑い、考え込み」（1:29）、羊飼い訪問後の「思い巡らし」（2:19）、そして生後40日の神殿奉獻の折に出会った老人シメオンの言葉への「驚き」（2:33）、特にシメオンの言葉には「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」（2:35）との気になる予告がありましたから、マリアの「驚きや思い巡らし」も深く悩ましいものだったでしょう。子どものことを案じ養育する母親の位置からイエスを見つめることを、彼女は時として妨げられてきたことでしょう。わが子のことであるのに、「この子はいったい何なのでしょう」「いつ、何が始まり、何を始めるのですか」と気が気でない、母親としてのマリアの戸惑いを想像します。そして、この日、自分たちの心配をよそに神殿で生き生

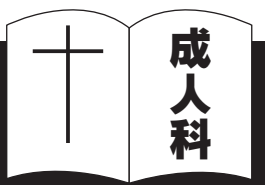
きと話し込んでいる息子を叱った母親に、「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを知らなかったのですか」と切り返されてしまう衝撃は、まさにマリアの心を刺し貫いたに違いありません。父や母にはとって辛い経験です。けれども、これはルカ文書全体（福音書と使徒言行録）に響き渡っているモチーフの一つなのです。

親子・家族といった血肉の関係や、親族・部族、さらには民族を超えて、人々をとらえ新しいつながりへと広がっていく。すなわち、ガリラヤからエルサレムへ、エルサレムから世界の各地へ、そしてローマへと針路を伸ばしていく福音の射程や、新しい共同体の姿の一端がこうした記述に示されています。イエ

## 準備のための聖書日課

26日	㊦	イザヤ9:5~6	平和のみどり子
27日	㊧	ルカ2:15~21	母の思い巡らし
28日	㊨	ルカ2:22~35	シメオンの祝福
29日	㊩	ルカ9:46~48	いちばん偉い者
30日	㊪	ルカ10:21~24	幼子のような者に
31日	㊫	ルカ2:39~40	幼子の成長

スの福音、イエスの言葉、それは触れる人々、出会う人々を刺し貫かずにはおれない、鋭くも新しい力を含んでいます。



## 成人科

● 神殿の境内にいた学者たちを少年イエスはたいそう驚かせました。その「驚き」はなぜだったのでしょうか。「聖書の学び」ではイエスの「着眼点の新しさ」を想像してみました。成人となったイエスの大胆な視点や行動は、幼い頃から培われてきたものだと考えたからです。「神の子だから、もともと特別な力が備わっていたのだ」と済ませてしまわずに、少年イエスの「賢さ」や人々の「驚き」について考えてみましょう。

● 少年イエスを真ん中にして大人たちが話し合っている。この風景も示唆に富んでいます。幼子や小さな存在を真ん中にして物事を考えようとするとき、それまで当然のごとくに固まってしまうものが溶け始めることがあります。子どもたちの感覚や言葉には、人間が大切にすべき率直な真理や夢がたくさん込められています。教会が生き生きとし始めるヒントを、きっと幼子や小さくされた人々が持っているのではないのでしょうか。



# 十二歳のイエス

聖書 ルカによる福音書2章41～52節

暗唱 聖句 イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。  
ルカ 2 : 52

40課

1月1日

逾越祭の翌朝、イエスさまの家族もみんなと一緒に出発しました。エルサレムから故郷のナザレまでは何日もかかる長い旅です。はぐれないように仲間同士かたまって、おしゃべりしながら歩きます。ところが夕暮れ時になって、マリアが血相を変えてヨセフのもとにやって来ました。「たいへん！ イエスがいないの」「大丈夫さ。あの子はもう十二歳だよ。きっと友だちと一緒にだろ」「私もそう思ってたの。でも、いないのよ！」ヨセフも一気に青ざめ、二人はすぐに道を引き返しました。「イエスー！ イエスー！」探して、探して、とうとう三日も経ってしまいました。イエスさまは、一体どこに行ってしまったのでしょうか。

なんと！ イエスさまはずっとエルサレムの神殿にいたのです。境内で偉い聖書の先生たちから熱心にお話を聞いたり、質問したりしていました。「なるほど、いい質問じゃ！」先生たちはうれしそうです。「えー、私の考えですと…」「しかし、こうも言えますぞ…」「どれどれ、聖書にはなんとありますか？」いつの間にか先生たちは、イエスさまを真ん中に車座になっていました。誰かが問うては語り合い、納得してはまた新たな問いが生まれます。「この子と一緒に語り合っていると、ぞくぞくするのう！」「今日はなんだか聖書の文字が生きとるようじゃ」「本当にこの子は大したもんだ！ これほどの賢い子を、私は見たことありませんぞ！」すると、一人の



先生がしみじみと言いました。「まことに、メシアとはどんな方なんじゃろうのう」「そうですね。私たちもお会いできたらいいですねあ。長い髭を触りながら、先生たちは想いを馳せるのでした。

その時です。「イエス！」マリアの声が響きました。「何してるの！ あなたって子は、お父さんもお母さんも、どれだけ心配したと思ってるの！」マリアは怒りつつも、見つかってうれしいやらホッとするやら涙声。でも、イエスさまはキョトンとしています。「どうして僕を探したの？ お母さんたちは、ぼくが天のお父さまのところにいるって分らなかったの？」マリアもヨセフも、イエスさまが何を言っているのか、さっぱり意味がわかりません。「いい加減にしろ。さあ帰るぞ！」ヨセフはもうカンカンです。三人は先生たちにお礼を言うと、急いでナザレに向かいました。

「どうしてあの子はあんなことを言ったのかしら…」久々の我が家の寢床でマリアは思い巡らします。イエスさま誕生からの不思議の数々を。

# 十二歳のイエス

聖書

ルカによる福音書2章41～52節

暗唱  
聖句

イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。  
ルカ 2 : 52

## 聖書から…

イエスさまが12歳の時、エルサレムの神殿に行った帰り道で、イエスさまが見当たらないと大騒ぎになりました。両親は、てっきりイエスさまは親類や知人らと一緒にナザレに帰って来ているだろうと思い込んでいました。イエスさまが見つかったのは3日後、神殿で学者たちから話を聞いたり質問したりしていました。母は困惑しイエスさまを叱りますがイエスさまは、自分の父の家にいるのは当たり前だと答えています。彼らは一緒にナザレに帰り、母はこのことをすべて心に納めていました。

この神殿で少年イエスに教えていた学者たちが、約20年後に同じ場所で大人になったイエスさまと衝突してゆきます。そのこともご存知であったイエスさまは、それでも彼らを警戒したり、恐れることもなく自然体で彼らと時間や場所を共にし、学び合い論じ合うことを喜ばれました。イエスさまにとっての家族や家は、より広い意味を持っていたようです。

## 分かち合おう

- ユダヤ教では男子が13歳になる時に、大人になったと見なされ特別な儀式を行います。今日の箇所のイエスさまは、まだ子どもだと見なされていた12歳でした。日本でも

6年生まではバスも電車も子ども料金。中学生になると大人料金になるのがちょうどその頃です。社会の枠組みの中では、子どもと大人は別の区分に分けられていますが、神殿で大人の学者たちに戸惑いもせず質問し話を聞いていたイエスさまには、明らかに世代の違いは問題ではありませんでした。ユダヤ教では12歳の男子は未成年ですから、捜しても、捜しても3日も顔を見なければ大騒ぎになるのは当然のことでしょう。イエスさまは母親に注意された時に「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前」だと答えています。一見、非常識とも思えるイエスさまの答えは、一体何のことを意味しているのでしょうか。

- 一方13歳になれば、地方のユダヤ教の礼拝堂では成人男性が10人いれば一つの共同体として数えられるという程、ひとりの責任を果たす必要な人格として数えられていました。イエスさまの視点から見ると男女、成人子ども、家族他人で差別や区別されることはありませんでした。私たちが先入観や無意識のうちに立てている隔ての壁はあるでしょうか。神さまが人種や言葉の壁を越えて、大胆に働かれた聖書の場面や言葉で「刺し貫く」ように、痛いけれども新しくされたことがあるか、教会の中で高齢の方をお招きしてお話を聞いてみましょう。

# 十二歳のイエス

聖書 ルカによる福音書2章41～52節

暗唱 聖句 イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。  
ルカ 2:52

40 課

1月1日

## 聖書から…

クリスマスに生まれ、乳飲み子だったイエスさまも、12さい（小学6年～中学1年くらい）になりました。イエスさまにも私たちとおなじ子どものころがあったのです。イエスさまはどんな子どもだったのでしょうか。イエスさまは、出かけて行って聖書のおはなしをよく聞く子だったようです。私たちは、人の話をよく聞くことが大事だと分かっていると思います。同じように、イエスさまは神さまのおはなしをよく聞くことが大事だということを知っていたのです。そして気になったことは何でも質問をしたようです。話をよく聞いて理解することも大切ですが、時に、よい質問は、よい答えにまさります。質問によって、より深く話を理解することができるからです。私たちも教会で、聖書の話に耳をすませてよく聞きたいと思います。また、気になったことは、どんなに小さなことでも、あとで質問をしてみましょう。みことばに集中する真剣な顔と、まっすぐでするどい質問を受けた人たちは、きっと驚かされ、気づかされ、学ばされ、笑顔にされて、その場がますますすてきな集まりになると思います。

## 活動①

### 「いる？ いない？」

聖書のおはなしの場面ごとに、登場人物を確認してみましょう。そのあとで「やおやのお店」の要領で、場面と登場人物をあ

てはめながら、手をたたいていっしょに歌いましょう。楽しみながら、よく聞いて「いるいる」「いない」をこたえましょう。

さらに「なぜ、いない？」「なぜ、いる？」など、疑問も浮かんできたら一緒に考えてみましょう。

例) 「過越祭の／おまつりのあと／かえりのみちにはだれがいた？／よく聞いてごらん／考えてごらん／ヨセフ-いるいる／マリア-いるいる／親類-いるいる／イエスさま-いない」

「エルサレムへ／引き返したら／神殿にはだれがいた？／よく聞いてごらん／考えてごらん／イエスさま-いるいる／学者たち-いるいる／兵隊-いない」

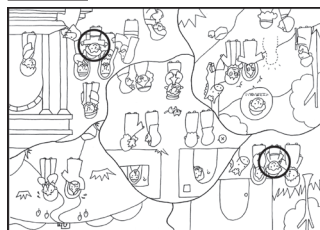
## 活動②

## ワークシート

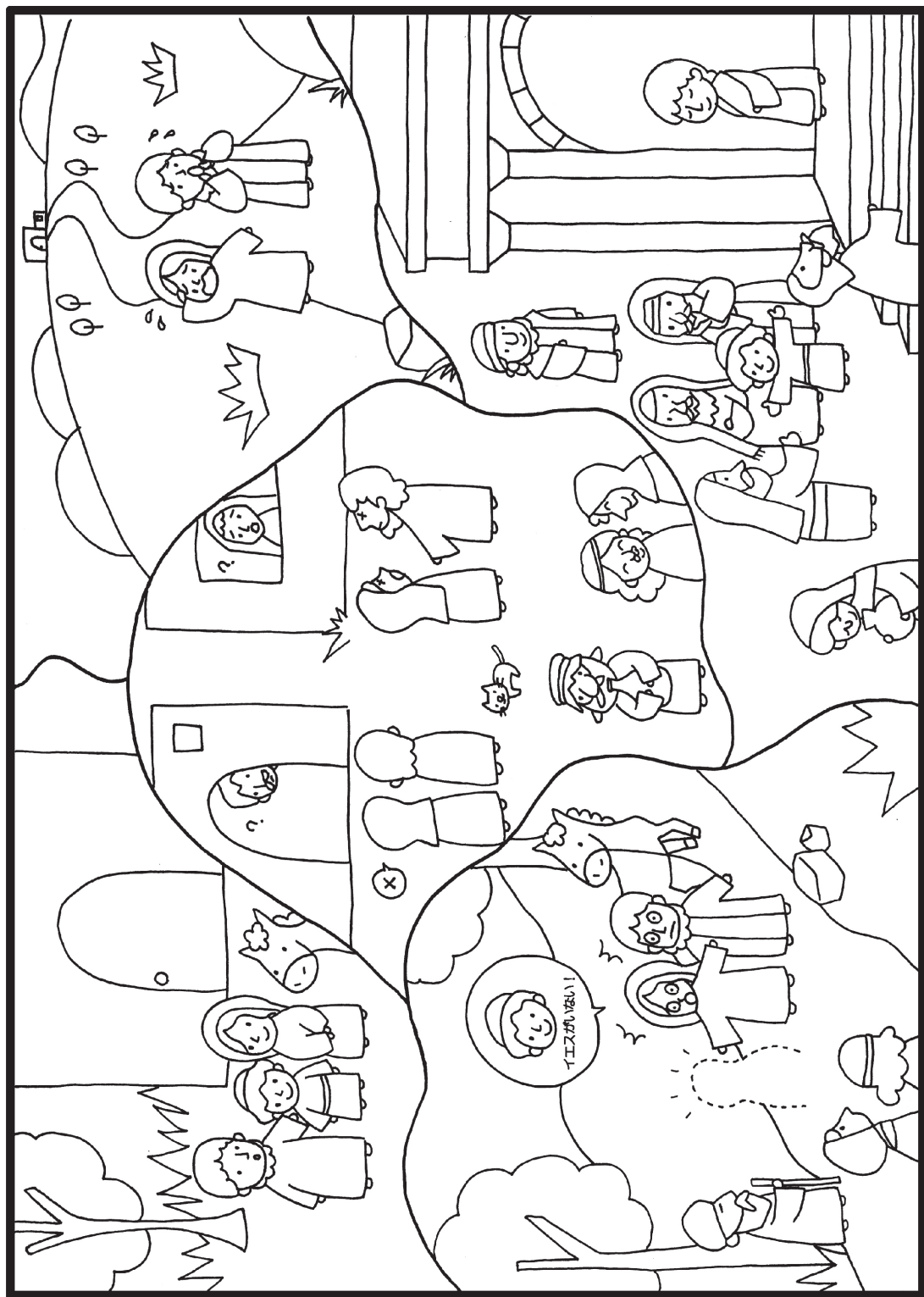
### 「イエスさまをさがせ」

イエスさまはどこにいますか？聖書に書かれているイエスさまの言葉「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」や、「それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになった」などをヒントに、イエスさまのすがたを探してみましょう。

※答え







## 荒れ野を通して

イエスの生涯は荒れ野の道、茨の道、十字架への道でした。バプテスマを受け「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」との天からの祝福を受けたイエスが、決して栄光の道に進み行くことなく、また直ちにエルサレムを目指すのでもなく、まず聖霊によって荒れ野に連れ行かれる事実は、生涯にわたるイエスの生の場とその意味とを象徴しています。

荒れ野での誘惑の記録は共観福音書のすべてに記されていますが、イエスの系図に続いて、しかもアダムまで遡る系図さかのぼに続くように位置取られているのがルカの特徴であり意図でもあります。アダムがのみ込まれてしまった誘惑（それは人間が根源的に背負う誘惑を総括していますが）に、イエス自身が改めて向かい合い、それを凌ぎ抜くことを通して、イエスこそがメシアであることを証言しています。そのイエスの言葉と業とが、荒れ野の道、茨の道、そして十字架への道の中で響きながら、さらには復活を経て、聖霊の導きによってガリラヤからエルサレムへ、エルサレムからローマへ、そして全世界へと響き渡っていくこと。それがルカの眺望、荒れ野から世界へ、世界という荒れ野の中で、という遠近感なのです。

## 誘惑と世界

ルカ福音書を読んでいた初代教会の人々にも想いを寄せたいと思います。悪魔の誘惑を退けるこのイエスの姿が、いったいその当時

の読者たちをどのように励まし、また支えていたのでしょうか。ローマ帝国の繁栄と支配のもと、厳しい弾圧に晒さらされ続けている読者たち（共同体）でした。またユダヤ教指導者たちからの迫害・妨害に揺さぶられ続ける読者たちでした。まさしく誘惑と挑戦に日々苛さいなまれるキリスト者たちにとって、このイエスの「誘惑との対決」の記録記事は、どのような生の態度へと招き導くものだったのでしょうか。さらに今日・現代を生きる私たちキリスト者は、この記録、このイエスの闘いに何を聴き取り、何とどう向き合い、どう対決するように招かれているのでしょうか。

聖霊に引き回されてイエスが向き合わねばならなかったもの、イエスが闘い抜かねばならなかったもの、それはパンの問題の解決（人間の必要の満たし）、権力と繁栄しょうあくの掌握（この世での成長、栄光、称賛）、安全保障の根拠（守護を得、また世界の守護者となる栄誉）でした。歴史を通して世界を揺さぶってきたこれらの誘惑は、今も強い力をもって人間を試みています。今日、様々な国や地域で暴力支配や専制政治を引き起こしているのは「これらの誘惑」に膝をかがめた人々です。「自分こそが提供者、自分こそが守護者である」と豪語して人々を集め、また人々を追い散らし、結局のところ、この世を荒れ野にしています。荒れ野の悪魔の誘惑に捕らえられてしまうところにこそ、荒れ野が広がっていくのです。

「人はパンだけで生きるものではない」「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」「あなたの神である主を試してはならない」

と申命記の戒めを示して闘われたイエスの言葉の響きを、荒野の様相を見せる私たちの社会の中で、どのように聴き取るべきでしょうか。

## 空腹を知る人

イエスは徹頭徹尾、「空腹」の弱さの中に立たれました。空腹を覚え、空腹を知り、その辛さと弱さの中に立ち抜かれる人でした。また、人は、空腹を知らない者となることや空腹を排除するために生きるのでもないこと、それを自らの道とされました。しかし、それは人々を失望させました。失望した人々はイエスに怒り、磔にして殺しました。しかも、その死の間際までイエスを試みました。「もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」(ルカ 23:35) と嘲って。

準備のための聖書日課			
2日	㊦	申命記8:2~6	神の言葉で生きる
3日	㊧	エレミヤ15:16	御言葉を食べて
4日	㊨	アモス書8:11~12	御言葉への飢え
5日	㊩	ルカ22:24~30	いちばん偉い者は
6日	㊪	ルカ23:32~38	「自分を救え!」
7日	㊫	ローマ8:35~39	何ものにも引き離されない

石をパンに変えることを求めなかったこの人は、また十字架から降りることも求めない人でした。私たちは、このイエスをキリスト(メシア)と信じています。



### 成人科

● 「石をパンに変える力」を神に求めたり、それが「信仰による力」だと感じたりすることがあるように思います。苦難からの解放や欠乏の満たしは、確かに人間にとって切なる求め、真剣な祈りです。そうだとすると、「自分の願望」を神に投影することはゆるされません。「神への信仰」にまつわる「誘惑」について考えてみましょう。

● 故中村哲医師(ペシャワール会)の言葉は、現代世界を貫く言葉です。「人間にとって本当に必要なものはそう多くはない。少なくとも私は『カネさえあれば何でもできて幸せになる』という迷信、『武力さえあれば身が守られる』という妄信から自由である」(『天、共にあり』NHK出版より)。ミャンマー軍事クーデター(2021.2.1.~)、ロシアのウクライナ侵攻(2022.2.24~)と深まる闇の力。人間世界は「悪魔の誘惑」に攫われ続けています。イエスの「誘惑の退け」は平和をつくりだす生き方ときっと繋がっているのだと思います。



# 荒れ野の試み

聖書

ルカによる福音書4章1～13節

暗唱  
聖句

イエスは、『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある』とお答えになった。ルカ 4：4

41課

1月8日

神の霊は、バプテスマを受けたイエスさまを荒れ野に連れて来ました。ヘビやサソリがひそむ岩陰に、乾いた風が吹き抜けます。そんな荒れ野で、イエスさまはもう40日間何も食べていませんでした。頬はげっそり、目はくぼみ、さすがのイエスさまももうフラフラ。しかし、イエスさまは神の霊で満たされていました。

そこに、誰かがそーっと近づいて優しい声で言いました。「かわいそうに、お腹がすいて死にそうじゃないか。あなたは神の子なんだから、この石をパンにして食べるといいよ」。しかし、イエスさまはきっぱりと言います。「『人はパンだけで生きるものではない』と聖書に書いてある。確かに人間は食べないと死ぬ。しかし、神に造られた人間は、神の教えから離れては生きていけない。人は神の言葉によってこそ生き、生かされるのだ。それを教えるために、神は荒れ野で人々に試練を与え、天から降らせたマナを食べさせたのだ」。すると、ビューン！ その人はイエスさまを連れて一気に空高く飛び立ちました。はるか下に世界中の国々が美しく輝いて見えます。「素晴らしいだろう！ この世界はすべて私にまかされている。誰にやろうと私の思いのままだ。どうだい、私を拝まないか。そうすれば、この世界のすべてはあなたのものだ」。しかし、イエスさまは目もくれません。「『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えなさい』と聖書に書いてある。私の神は



この主だけ。私が拝み、お仕えするのはこの方だけだ」。すると、その人はイエスさまをエルサレムの神殿の屋根のてっぺんに立たせ、今度は自分も聖書の言葉を使って言いました。「神は天使たちにあなたを守らせる。天使は両手であなたの足が石に当たらないように支える。と聖書に書いてある。あなたなら天使が大勢助けに来るだろう。さあ、ここから飛び降りたらどうだ。この言葉が本当だと証明できるぞ。そして誰もがこのを信じるに違いない。「それは証しでもなんでもなし。ただ神を試しているだけだ。『主を試してはいけない』と聖書に書いてある」。ついにその人は歯をギリギリさせて、イエスさまから離れて行きました。

そう、それは悪魔でした。悪魔はあの手この手でイエスさまを誘惑しましたが、決してイエスさまを神から引き離すことはできなかったのです。この後も、イエスさまはずっと神のみ心に従い続けます。たとえどんなに苦しくても、たとえ誰からも理解されなくても、最後の最後まで…。

# 荒れ野の試み

青少年科



41課

1月8日

聖書

ルカによる福音書4章1～13節

暗唱  
聖句

イエスは、『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある』とお答えになった。ルカ 4：4

## 聖書から…

イエスさまはヨルダン川でバプテスマを受けられた後、すぐに神の霊により荒れ野に導かれました。40日間が終わると空腹をおぼえられます。そのタイミングで悪魔は石をパンにすれば良いじゃないかと言いますが、イエスさまは「否」と答えます。そして立て続けに、残り2つの誘惑を投げかけて悪魔は闘いに敗れて一旦そこを去りました。

今日の聖書の箇所を一文で言い表すなら、「イエスさま、悪魔からの誘惑に勝利する」です。けれども、このところを読めば読むほど、悪魔は人が足りなさをおぼえる時の心理状態や、また高慢になりやすい状況、そして聖書の言葉さえよく知っていることが分かります。

荒れ野の様な、必要な物がすぐ手に入らない、目の前にいる簡単に解決を差し出す人に頭を下げて、拜んでも力と見栄をキープしたいと思わせる極限状況、そして更には神殿の屋根の端での「神の約束が本当かどうか、試してみても」という問いは、昔だけの誘惑ではありません。イエスさまは、私たちにもできる闘い方を示してくださいました。

## 分かち合おう

- 「聖書の学び」のページを読んでみると、旧約聖書の一番初めに出てくるアダムが飲み込まれてしまった誘惑と同じ誘惑にイエスさまも遭われたのだと分かります。緊急のように思える「足りなさ」に迫られると、なるべく速く、自力で簡単にそれを解決しようと考えます。その中で、本来食べる物ではない「石」を「パン」という食べることができるものに無理やり変えようという「不自然」なことをしようとする誘惑が向かってきます。神さまが、その人、その物に本来期待し計画されている「目的」や「役割」とは違うものを、自分を満たすために変更してしまう様なことがあるでしょうか？ パンの誘惑は空腹だけではなく、私たちの持つすべての必要を速く満たそうとする欲求を意味します。
- 3つ目の誘惑、悪魔がイエスさまをエルサレム神殿の屋根の端に引き上げて、「もしあなたがここから飛び降りても天使たちが守るらしいよ」というささやきに対してイエスさまは「あなたの神である主を試してはならない」と答えています。神さまからの守り、またいざとなったら天使らが送られてきて助かる、という本来恵みであり、祝福であることが、いつしか「あたりまえ」になっていることはありますか？ 神さまからの恵みや祝福には、どんなものがあるでしょうか。奇跡や完封勝利だけが祝福なのでしょうか？

# 荒れ野の試み

聖書 ルカによる福音書4章1～13節

暗唱聖句 イエスは、『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。ルカ 4：4

41課

1月8日

## 聖書から…

バプテスマを受けたイエスさまがたどりついたのは、荒れ野でした。荒れ野とは、雨がとても少なく、植物がおおっている部分が全体の半分以下しかない所です（参考：旧約新約聖書大事典編集委員会／荒井 猷・石田友雄 他：編集 『旧約新約聖書大事典』 教文館）。水も緑もほとんどないカラカラで、ザラっとした岩がむき出しの黄土色の世界。そんな所でイエスさまは、四十日間も、何も食べずに過ごしたのです。一日三食なら 120 回も食べなかったことになります。お腹がへったイエスさまには、そばにあった石ころがおいしそうなおパンに見えたこともあったかもしれません。イエスさまは、食べられないつらさを知るお方でもあったのです。生きるためには食べ物が欠かせません。ただ、イエスさまは「人はパンだけで生きるものではない」と言われました。人は、食べ「物」だけあっても生きられない。食べて生きようと思うことができる「事」も大切なのではないのでしょうか。神さまは、食べて生きようと思えるようないのちの言葉をくださいます。そして、イエスさまは「いっしょに食べよう」と言って、私たちを食卓へと招いてくださるお方です。

## 活動①

### 絵本紹介『ぼくがラーメンたべてるとき』

作・絵 長谷川義史 教育画劇

この世界は、さまざまなことが同時に起こっています。食事をしたり、習い事をしたり、ゆっくり過ごすそのときに、世界のどこかでは、働き、食べられない人もいます。そして、そのことは、切り離されてはいないということを「かぜ」が気づかせてくれる、そんな絵本です。主の祈りで「われらの日用の糧を今日も与えたまえ」と祈るとき「われら」の粹が、少しずつ広げられていくことを願います。



## 活動②

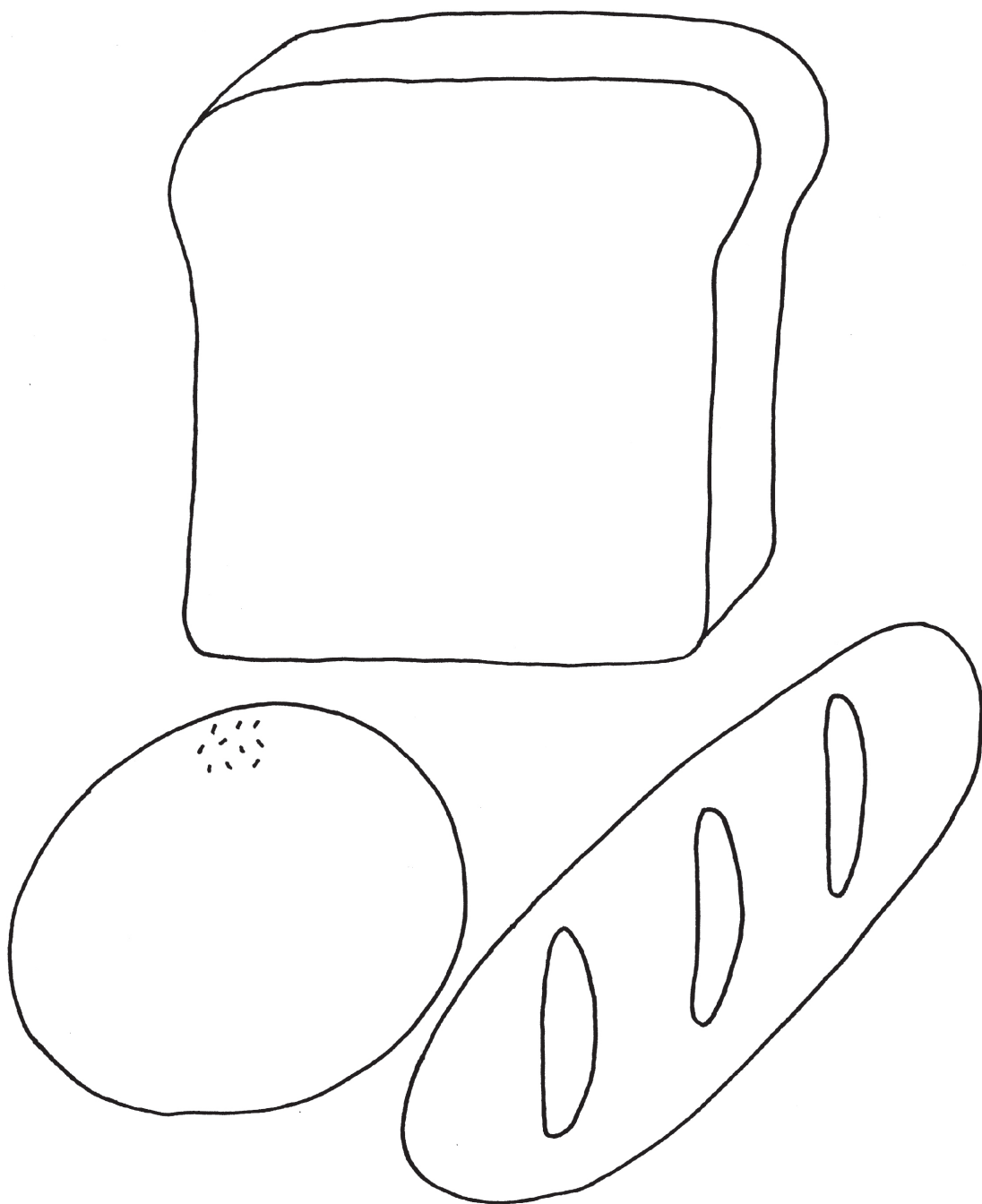
## ワークシート

### 「みことばのパンしおりづくり」

暗唱聖句や好きなみことばをパンのイラストに書いて切り取り、リボンをつけてしおりを作ってみましょう。字を書くのが難しい人は、代わりの人にみことばを書いてもらい、パンにおいしそうなお色をぬりましょう。みことばのパンしおりが、日々の生活の中でのさまざまな困難や誘惑の支えとなりますように。また、私たちには、食べる権利など、いのちが守られ、のびのびと成長できるためのさまざまな権利があることも憶えたいと思います（「子どもの権利条約」国連、1989）。







# あなたの罪は赦された

聖書 ルカによる福音書5章17～26節

暗唱聖句 イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。ルカ5：20

42課

1月15日

## 大胆な接近

身体に麻痺症状を背負い不自由している知人を、なんとかしてイエスのもとに連れてこようとした人々がいました。人だかりがひどくて中に入れないとわかっていても諦められず、天井を剥がして吊り降ろすという奇想天外な方法でイエスに接近しました。その人々が放っていた共感共苦の深さ、我が事として手を添え合う交わり、何より救い（癒やしも赦しも含んだ救い）を求める一途な姿をイエスは信仰と呼び、「罪の赦し」を宣言されます。「罪」とは神と人、人と人との「関係の破れ」のことです。イエスは人が罪赦され、神との関係に結び合わされ、神を賛美する者と変えられることを何より望んでいましたから、互いに交わり、神に向かっていくこの人々の交わりの様子に、すでに罪からの解放の事実を見て心から祝福したのです。

## 神を手握りしめていた人々

その場には、訝しそうにイエスを眺める人々がいました。ファリサイ派に属している人々と律法の専門家たちでした。イエスの評判を耳にし、自分たちの目で見定め、暴いてやろうとの魂胆を持って集まっていた人々でした。神を冒瀆する行為や言動にはことさらに厳しく、容赦なく断罪していたそれらの人々は、このイエスの言葉にすかさず攻撃の狙いを定めます。しかし、その心中の意地悪い思いを悟ったイエスは、たちどころに反問するのです。「罪の赦し」を宣言することが、

なぜあなたたちの怒りにつながるのか、と。

ファリサイ派の人々は、神でもないイエスが罪の赦しを口にすることを「神への冒瀆」だと感じました。しかし、それはひっくり返せば、律法を「正しく」理解し、律法解釈を管理し、あたかも神に代わって人々を監督することを任されていると思いついでいる宗教的権威や特権にしがみついているにすぎません。「罪の赦し」を神の領域という「枠」に押し込め、その上で「神の枠」の番人は自分たちだと自認し、威張っている。これがイエスの前に現れ、執拗に追求を続けた「宗教者たち」の正体でした。そうです、こうした歪んだ宗教性こそが人間を罪人にし続けていくのです。

## 「罪の赦し」。 もっとしなやかに

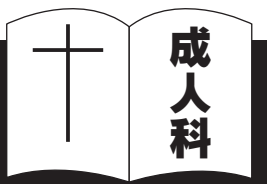
ルカによる福音書では、この箇所ですべて初めてファリサイ派の人々（正確にはファリサイ派に属する一部の強硬な人々）が登場します。そして、それ以降7章末までは、壇を切ったようにそれらファリサイ派の人々の考えや態度に対決するイエスの姿が続いていきます。途中、6章後半から7章前半までQ資料（ことば伝承）が挟まりますが、それとて、自分を正しいと自認している人、富んでいる人、上辺ばかりを飾っている人々への批判、すなわち当時の宗教指導者たちへの批判が重ねられており、特に6章37節では「人を罪人だと決めるな」との端的な主張が響いています。当時の宗教観では「さまざまな病や災難は

罪の結果」と考えられていたようですが、イエスは必ずしもそう考えてはいなかったと思われます（13章1～5節参照）。むしろ、イエスは、病気に苦しむ人々を罪人呼ばわりすることにこそ怒っており、罪人呼ばわりされている人々を憐れんでおられました。ルカは、本日の箇所が続いて「誰と食事をするのか」（5：27以下）「喜びの食卓の様子」（5：33以下）「安息日の癒やしと論争」（6：1以下）「罪深いと擲諭されていた女性との出会い」（7：36以下）の記事を配置していくことを通して、ファリサイ派の人々の頑迷さをよそに、イエスによって「罪の赦し」がしなやかに宣言されていく様子を記します。ルカは、本来なら人間同士は「罪の赦し」（神とのつながりの回復）のために互いに労し合い、赦しを宣言し合って喜び、神を賛美する交わりがどんどん広がっていくはずなのだ、と証言

## 準備のための聖書日課

9日	㊦	創世記3:8～9	あなたはどこにいるのか
10日	㊧	創世記4:8～9	きょうだいはどこにいるのか
11日	㊨	ルカ5:27～32	わたしが来たのは
12日	㊩	ルカ6:6～11	安息日の解放
13日	㊪	ルカ6:37～38	罪人だと決めるな
14日	㊫	ルカ7:36～43	「罪深い女」の解放

したかったのです。福音書と使徒言行録を通して、貧しい人々や異邦人にダイナミックに福音が広がっていくという「ルカ証言」の特徴が、この箇所の位置や前後の文脈からも響いてきます。



## 成人科

● 聖書が問題としている罪は「行為の概念（何をしたのか）」ではなく「関係の概念（どこにいるのか）」です（創3：9）。イエスが見つめた罪も、神と人、人と人の関係の破れの問題でした。一方、頑迷なファリサイ人や律法学者たちは、規範に違反することを「罪」と捉えて人々を判別していました。さて、私たちの中でも「罪の理解」は混在しています。罪を「行為の概念」と捉えるか「関係の概念」と捉えるかによって「救い」の観点も変わってしまいます。「贖罪」の意味も変わってきます。イエスが宣言する「罪の赦し」

とはどういうことなのでしょう。私たちは、もしかすると苦しまなくても良い「罪」を苦しみ、本当は見つめねばならない「罪」をやり過ごしているのではないのでしょうか。

- 「罪」からの解放。それは、一人で克服することでも、個人に与えられるものでもありません。人々との交わりを通して「罪」（関係の破れ）からの解放がもたらされるのです。個人的な「聖化」は、必ずしもイエスの見ていたものではないと思います。

# あなたの罪は赦された

聖書 ルカによる福音書5章17～26節

暗唱聖句 イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。ルカ5：20

42課

1月15日

「行こう！」イエスさまのことを聞きつけた仲間たちは、友を寝床ごと運び始めました。友は中風にかかってずっと寝たきりでした。仲間たちはなんとか治してやりたいと、いろんな医者にもせましたがダメでした。人々は、病気は罪のせいだから仕方ないと言いました。しかし、仲間たちは「イエスさまならきっと！」と、すべての望みをかけて力を合わせます。

やっとのことでイエスさまのいる家まで来ましたが、人がいっぱいでは入れません。途方に暮れていると、「そうだ！」一人がひらめきました。彼らは友の寝床を担いだまま、屋上への階段を上って行きました。

家の中では、大勢の人たちがイエスさまの教えに耳をすましています。ファリサイ派や聖書の先生たちもいました。ガタガタ、ギーギー。突然、上から砂埃が降ってきました。天井には大きな穴！なんと仲間たちは、瓦をはがして寝床ごと友を吊り降ろしているのです。友を落とさないように、イエスさま目がけてそろりそろり。仲間たちは「友を救うことができるのはこの方だけ」と必死です。イエスさまは、仲間たちを見つめてうなずきました。彼らの一途な信仰を見て取られたのです。イエスさまは言われます。「あなたの罪はもう赦されている」。中風の人の目から涙が溢れました。長い間自分を縛り付けていた重い鎖がついに解かれたからです。仲間たちも顔をくしゃくしゃにして抱き合いました。



ところが、ファリサイ派や聖書の先生たちは、ちっともうれしそうではありません。「無礼だ！罪を赦す力は神だけのもの。イエスは神にでもなったつもりか…」ざわざわ思いが巡ります。先生たちはイエスさまが誰か知らなかったのです。しかし、イエスさまにはその心の声は聞こえていました。「何を思い巡らしているのか。赦されたと言うのと、起きて歩けと言うのとではどちらが簡単か。この人が本当に赦されていることを見せよう。私に授けられている力があなたがたにわかるように」。そして、イエスさまは中風の人に命じます。「起き上がり、寝床を担いで帰りなさい」。たちまちその人は立ち上がり、寝床を担いで帰って行きました。踊るように感謝と賛美を歌いながら。

あまりの驚きに家中静まり返り、まるで時間が止まったようでした。しばらくして、「見たか？」誰かがそう呟くと、どよめく声が湧き上がりました。驚きと恐れと感動は神への賛美となって、屋根の穴を突き抜けて大空へ上っていきました。



# あなたの罪は赦された

聖書 ルカによる福音書5章17～26節

暗唱 聖句 イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。ルカ5：20

## 聖書から…

イエスさまの言葉「あなたの罪は赦された」(5:20) が心に残ります。「罪」と「赦し」は、私たちの信仰にとって大切な2つのことです。

放蕩息子の話の中で(ルカ15:11～32)、父親が、大変自分中心で失礼で自分勝手だった息子を受け入れて、赦すどころか大歓迎して祝福して存在を喜んだ。生きていることを心から喜んだ場面は印象的です。

『『罪』とは神と人、人と人との『関係の破れ』のことです』と「聖書の学び」には書かれています。破れない歪みのない関係性など、ひとつもありません。みんな同じ課題を抱えつつ、その中でどのようにして、私たちは神さまとの、そして人と人の関係性の破れを繕う、繕っていただくことができるでしょうか。

イエスさまの一番近くに、周りの人たちと、その家の持ち主に迷惑をかけながらも、なお家の屋根をはがして、病気だった友人を持ち運んだ人たちの信仰を見てイエスさまは「あなたの罪は赦された」と宣言されました。これは一体どういう意味でしょうか。

## 分かち合おう

- 全国少年少女大会の時に、一番困っていることを人に言うのは難しいよねと話したことがあります。聖書には、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ18:20)と書いています。自分の課題を口にするのはハードルが高いのですが、イエスさまを中心に集まるところにイエスさまは共にいて、糸をほどいてくださるのです。糸のからまりがすぐ解けなくても一緒にそこにいてくれる神の家族がいる時に、その中で励ましと慰めを受けながら安心して糸をほどいてゆくことができるでしょう。今日のおはなしの友人のように、誰かのために祈り行動したことがありますか？ または、誰かが祈ってくれていたことに気がついたことはありますか？
- この「ルカによる福音書」を書いたルカは「使徒言行録」も書いています。「ルカによる福音書」を「その1」とすると、「その2」である「使徒言行録」を続きだと考え、少しずつ神の国の豊かさや「赦し」が、もっと広がったのだと気付かされます。自分は小さくても、神さまは大きなことをなさる。神さまのみ名があがめられるようにとマリアはルカ福音書1章46節以下で賛美しています。自分にはできない、自分には不甲斐ない、そんな思いの時にこそ、神さまが実は助けようとしてくださっているのだと気付いた経験はありますか？

# あなたの罪は赦された

聖書 ルカによる福音書5章17～26節

暗唱 聖句 イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。ルカ5：20

42課

1月15日

## 聖書から…

どんな家にも、人が通るための入口は設けられているものです。イエスさまが滞在していた家にだって、ちゃんと入口はありました。でも、床に寝たまま運ばれてきた中風の人にとっての入口はあったのでしょうか。なかったと言えるかもしれません。イエスさまに至る入口は、たくさんの人びとによってふさがれていたからです。すでにイエスさまの前には、ファリサイ派や律法の教師たちが座り（5：17）、群衆たちもまわりを囲んでいたのです。つめたなら、人ひとりが身体を横に向けてとおり抜けるくらいのスペースならばつくれたのかもしれませんが、でも、身体がまひして起き上がることができず、床に寝たままの中風の人にとっては、入口が無いも同然だったのかもしれませんが。けれども、イエスさまに至る入口は思いもよらない仕方で広げられていきました。「イエスさまに会いたい」、「イエスさまに会わせたい」そんな心を持つ人たちによって、屋根のかわらがはがされて、イエスさまに至る新たな入口が天に設けられたのです。そして、この新しい入口から驚くべき神さまのできごとが起こされ、神さまへの賛美があふれたのでした。

## 活動①

### 「あなたのつみはゆるされた」

- ① 24枚の白カードに「あ・な・た・の・つ・み・は・ゆる・さ・れ・た」と一枚につき一文字ずつ書き、それを2組分づ

くります。

- ② バラバラにして、裏返しにしてひろげます。  
 ③ メンバーは2グループに分かれて、順番に一枚ずつ表に向けて「あなたのつみはゆるされた」を完成させましょう。  
 ④ どちらのグループが早くイエスさまの言葉を完成できるでしょうか？

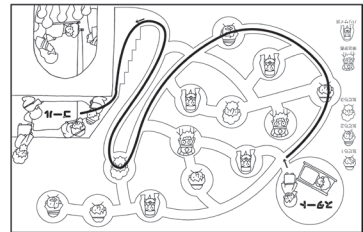
## 活動②

## ワークシート

### 「めいろ：いっしょにイエスさまのもとへ」

三人の友だちだけを通して、イエスさまのところまで進みましょう。同じ道は一度しか通れません。ゴールしたら、私たちの教会は、今、どんな人が入ることができて、どんな人は入ることができないのか。どうしたらみんなが入ることができるようになるのか等、一緒に話し合ってみましょう。

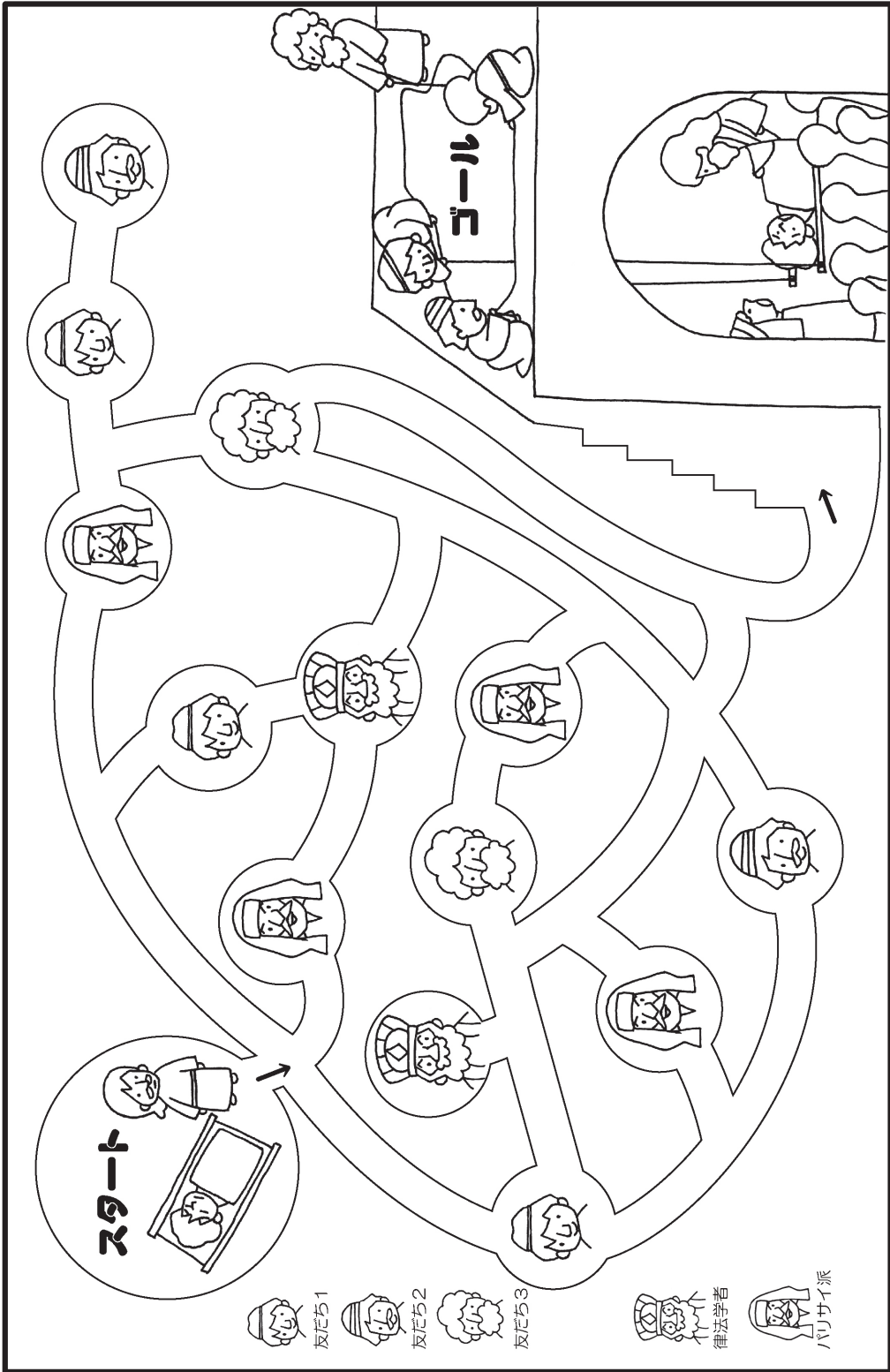
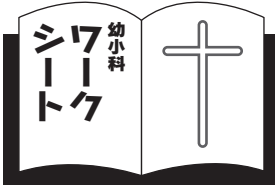
※こたえ



### 絵本の紹介 『いのちの水』

トム・ハーバー 作、中村吉基 訳、望月麻生 絵  
新教出版社

かつて、誰もが飲める「いのちの水」の泉がありました。でも、次第に泉の水は誰でも飲めなくなってしまいます。なぜなのでしょう、どうしたらよいのだろう、と問われ、考えさせられるお話しです。教会という場所が、いのちの水を誰でも飲むことができるように変わり続けられる場所であることを心から願います。



## 「安息日」とファリサイ派

前回に引き続き、ファリサイ派の人々<sup>たい</sup>と対峙するイエスの視点に触れていきたいと思えます。今回の記事は「安息日」をめぐる二つの連続するエピソードです。まずは、ファリサイ派の人々が「安息日」にこだわる理由<sup>わけ</sup>を押さえておきましょう。

ファリサイ派の人々は、律法<sup>りつぽうじゆんしよ</sup>遵守のため<sup>ため</sup>に日夜心血を注いでいる人々でした。律法(トーラー)は、実際の生活上でどのように解釈され、当てはめられるべきか。前例はどうなっているか、「例外」をどう認定するか。先人たち・賢人たちが検討し蓄積してきた言い伝え(ミシュナ)を網羅して、それをもとに主に会堂(シナゴグ)を拠点にして民衆の生活指導に当たってきた人々です。ミシュナは、①畑の耕作と税と捧げ物 ②安息日と祭り ③結婚と離婚 ④民法と刑法 ⑤生贄と食事規定 ⑥保健と衛生 に関するとても細かい規定の伝承です。その中でも、安息日をどう過ごすか、は「神の民」の最大級の重点課題として、とりわけ丹念に調べられ、かなり厳しく教えられていました。ファリサイ派の人々はまさしく「安息日」の番人だったと言えます。そしてその結果、民にとっては、「安息日ほど安息できない日はない」くらいの息苦しさを強いられていたのです。

## 「安息日」とは

安息日の根拠は、出エジプト記によれば、神の創造の業の祝いであり(出エジ20：8

～11)、申命記によれば、奴隷の地エジプトからの贖<sup>あがな</sup>い出しの祝いです(申命5：12～15)。創造に与り、贖いに浴したイスラエルへの特別な祝福に感謝し、神を賛美する日です。しかも、それはただただ神の恩寵・恩恵<sup>おんけい</sup>によることを憶える時です。安息日こそ、命を受けたことを感謝し、解放(自由)の喜びを吸い込む日なのです。

でもどうでしょう。安息日にしていいこと・いけないことを、微細<sup>びさい</sup>な気遣いで過ごし、誰とどこまで関わるかがセーフで、どこからはアウト? と定規をあてるように過ごさねばならないとしたら、そこには平安も喜びも湧きませんし、「安らかな息」をつくことができなくなってしまいます。そして何より、「神の恩恵」による平安ではなく、人間の努力による安心確認の日になってしまいます。安息日を人間がなんらかの目的のために利用しようとする、かえって安息日に手足を縛られ、安息日に支配されていくようになるのです。

## 「安息日」に安息を問う

歩きながら麦の穂を摘んだことは「刈り入れ」労働に値する。それを手で揉んだのは「脱穀」作業に値する。ファリサイ人たちは、そう突っ込んできました。また手が不自由な人を安息日に癒やすのは「生命にかかわる緊急事態」とは言えないので「安息日規定違反にあたる」とミシュナに照らし合わせて考えていました。先人たちの事例検討による言い伝えに固執して、今、目の前に生きる人たちの



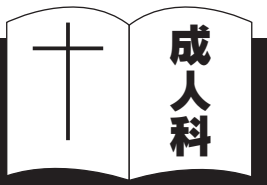
所作、生活、さらには悩みや苦しみを、「正しい安息日」のための素材のように見つめるファリサイ派の人々。彼らに対し、イエスは「ダビデの事例」を指し示しながら、また安息日の本当の目的を端的に語りながら（6：9）、過去の事例を絶対化しすぎると、もう身動きがとれなくなって、今生きている人間を台無しにしてしまう危険を示しました。

「人の子は安息日の主である」これは「人間が安らかな息をついて生きることができるようにと、神がしてくださったことを覚えよ」との呼びかけであると同時に、イエスご自身がその解放の福音のためにここに立っているのだとの宣言でもあります。

イエスは、幼い頃から律法に親しみ、しかもユダヤ社会とそこに生きる人々の姿を見つめ、独自の鋭い視点を培ってきた人です。イエスのご自身の「宣教」の要点として、この

準備のための聖書日課			
16日	㊦	創世記2:1～4a	祝福と聖別の日
17日	㊧	出エジプト 20:8～11	休み、休ませる日
18日	㊨	申命記5:12～15	解放を思い起こす日
19日	㊩	サムエル上 21:1～7	ダビデの場合
20日	㊪	ルカ13:10～17	働くべき日は今日
21日	㊫	ルカ14:1～6	安息日に 病気を癒やす

倒錯した安息日からの人間の解放に挑まねばならないと考えていたのでしょうか。しかし、この解放のための挑みこそが、ファリサイ派に属する頑迷な人々の怒りと憎しみの火に油を注いでいくこととなります。



## 成人科

●安息日は、神の創造の業の祝いであり、解放の祝いです。「休む」とは、それ以上働き続けず、自分の手を止めて神に委ねることであり、また与えられているものを恵みとして感謝することでもあります。更に、他者を休ませること＝搾取してはならないことへの戒めでもあります。安息日の意味の深みや広がりについて思い巡らせましょう。

●主日礼拝を大切にすることは、教会生活・信仰生活の基本です。ただ、昨今のように「シフト」で働く労働形態が増加してきますと、日曜日の朝に礼拝に出られないケースも増えています。だからこそ「安息日」の意味や「復活を祝う朝」の意味を益々大切に捉えて主日礼拝を捧げ、またそれに人々が繋がっていけるような工夫が教会に求められています。

# 安息日の主

聖書

ルカによる福音書6章1～11節

暗唱  
聖句

安息日に律法で許されているのは、…命を救うことか、滅ぼすことか。  
ルカ6：9

43  
課

1月  
22日

神は天地を完成された日、すべての仕事から離れて安息なさいました。だから、安息日はみんなお休み。ロバも牛も人間も、すべての仕事から離れます。そして主の救いを思い、生命を喜び感謝して、主を礼拝するのです。安息日にはどんな小さな仕事もしないように、たくさんの掟が作られました。聖書の先生たちは掟を守らないのは罪だと言いました。

ところがある安息日、イエスさまの弟子たちが麦の穂を摘んで手で揉んで食べてしまいました。ファリサイ派の人たちは「なぜ、おまえたちは安息日に仕事をするのか！」と目をつり上げました。掟では、穂を摘むことも<sup>もみ</sup>を手で揉むことも、どちらも仕事だからです。イエスさまは答えます。「ダビデもお腹がすいた時、食べてはいけない供えのパンを食べた話を、読んだことがないのか」。それから「人の子は安息日の主である」と言いました。「偉そうに！『安息日の主』って、神にでもなったつもりか！」ファリサイ派の人たちは怒って帰って行きました。

別の安息日のこと。イエスさまが会堂で教えていると、端っこに一人うつむいている人がいました。その人の右手は枯れ草のように萎えていました。「病気は罪のせい」誰もがそう信じていたので、その人は小さく身を縮め、息をひそめて座っていたのです。「目を離すな。イエスがあの人を癒せばこっちのものだ。安息日に、命の危険も



ない人を癒すのは御法度だからな」。ファリサイ派や聖書の先生たちは、イエスさまを訴えてやろうと見張っていました。

もちろん、イエスさまは全部お見通しです。イエスさまは手の萎えた人に言います。「起き上がって、真ん中に出て来なさい」。「はい」。その人が皆の真ん中に立つと、イエスさまは先生たちに尋ねます。「安息日にしてよいのは、善いことか。悪いことか。命を救うことか。それとも滅ぼすことか」。それからイエスさまは皆を見回すと、手の萎えた人に言いました。「手を伸ばしなさい」。その人は手にグッと力を入れます。「伸びた！ 伸びたぞ！」。手を曲げたり伸ばしたり、その人は息をはずませてその手を皆に見せました。すると、会堂中が拍手喝采。人々は喜びに満ち溢れました。命を吹き返し自由になったのは、その人の右手だけではなかったのです。やはり、イエスさまは「安息日の主」であられました。

カンカンに怒った先生たちは目配せして外に出ます。「イエスをなんとかしなければ…」恐ろしい相談を始めました。

# 安息日の主

## 聖書から…

イエスさまと弟子たちが安息日に麦畑の中を歩いていると、ファリサイ派のある人々は弟子たちのすることに注目し、注意をしました。「安息日にはしてはならないことを、あなたたちはするのか」。ここで問題にしているのは、安息日の本来の目的を念頭に置いたものではなく、「安息日を心に留め、これを聖別せよ」との十戒のひとつから派生した「穂を摘む」＝「労働」という解釈上の点について指摘をしています。

いつの間にか、私たち自身も「～べき」という結果重視、目に見える所をチェックしなければという考え方や発言で、自分や他者を不自由にさせていることはないでしょうか。「安息日を心に留め、これを聖別せよ」との戒めを神さまがイスラエルの民に命じられた目的は、人々に嫌が応にも「従順」を求めたのではなく、その戒め中で、立ち止まり、神さまこそがあのエジプトから救い出してくださって、今、生かされているのだということを思い起こさせるためでした（申命記5章15節）。

## 分かち合おう

- ファリサイ派の人たちは安息日にはしてはいけないことがすべて頭の中に入っていました。鏡を見てはいけない。1キロ以上は歩いてはいけない。細やかな律法を調べてみ

ると中には面白いものもあります。『聖書男（バイブルマン）』（A.J. ジェイコブズ著 CCCメディアハウス 2011年）という本には、「今、できる限り律法を守るとどうなるか」という実験の記録が残されています。おすすめです。

3分ほど時間をとってそれぞれのこれまでの一週間、神さまが助けてくださったことを紙に書き出し分かち合い、感謝のお祈りをしましょう。

- 丁寧に脚を片方ずつマッサージしてゆくと、不思議なことにマッサージをした脚の方が少し長くなります。これは緊張したり疲れた脚の血流を良くし筋肉をほぐすことで本来の長さに戻るのだそうです。イエスさまが癒された、この手が萎えた人は、手だけでなく心も体全体の姿勢も、周りからの目や本人の気持ちも影響し、本来の姿よりも小さくなっていただけではないでしょうか。でもイエスさまは、「手を伸ばしなさい」と命じられ、その通りにすると本来の姿に戻りました。

安息日を命じられた神さまは、私たちが健やかに生きることを望んでおられます。私たちの周りには、様々な状況の中で、「人に迷惑をかけてはいけないから」と常に周りに気を遣い、疲れてしまっている人たちはいませんか？ 教会として何かできることはあるでしょうか？

# 安息日の主

聖書

ルカによる福音書6章1～11節

暗唱  
聖句

安息日に律法で許されているのは、…命を救うことか、滅ぼすことか。  
ルカ6：9

43  
課

1月  
22日

## 聖書から…

安息日は、ユダヤの人たちにとっては一週間の最後の日（土曜日）の休みの日です。安息日には、みんなが安らかな息をつくことができる日として定められ、ユダヤの人たちの生活リズムを整える中心的な日でもありました。安息日になると、人も家畜も仕事をお休みするだけではなくて、一緒に食事をし、神さまを礼拝したのです。

ただ、ファリサイ派の人たちは、「安息日にしてはならないこと」（6：2）チェックリストを持ち、禁止事項を守ることにとらわれていて、どこか息苦しさがありました。しかし、安息日の主であるイエスさまは、そんなファリサイ派の人たちのさまざまな禁止を自由に越えられ、安らかな息を一人ひとりに取り戻してくださったのです。「クリスチャンになると、日曜日は礼拝に行かなければならないから、窮屈だ」と思う人がいるかもしれません。でも、神さまを礼拝することは、安心して呼吸することとつながっているのです。お祈りも、賛美も安らかな呼吸であり、礼拝は、神さまと共に生きる生活リズムを整える大切な日なのです。私たちの礼拝が、そんな安らかな息をつくことができるものでありますように。

## 活動①

## ワークシート

### 「大切なことはなに？」

① 普段の生活で「しなければならないこと」がありますか？ 今週しなければならない

いことをお互いに分かち合ってみましょう（例、宿題、お手伝い、礼拝など）。

② なぜそうするのか、それをしたらどんなよいことがあるのかも話し合ってみましょう。

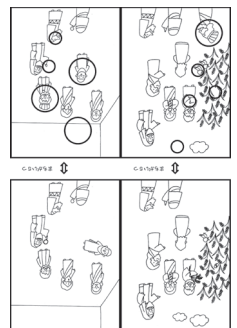
③ 反対に、「してはいけないこと」はありますか？ なぜなのか、考えてみましょう。それぞれに意味や理由をみつけることができましたか？ そのことを考えることは大事です。大切なことを見失わないでほしいですね。礼拝の良さや、大切さにも気づくことができたら幸いです。

## 活動②

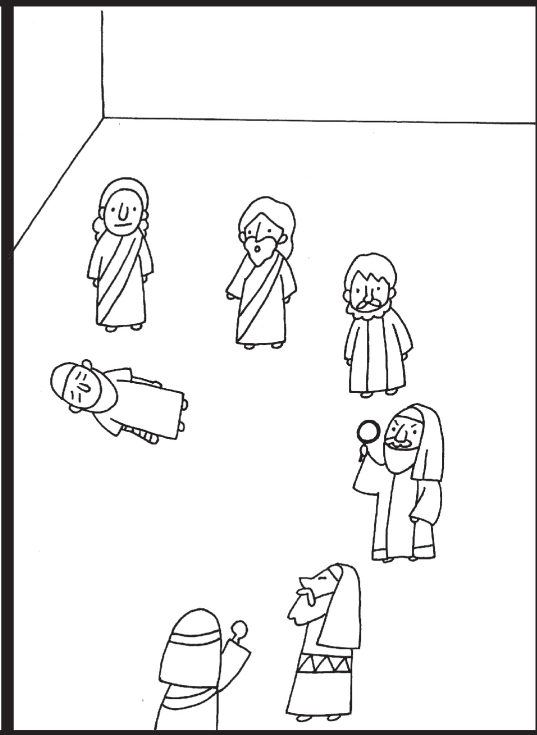
### 「まちがいさがし」

それぞれの安息日の絵を見比べて、違っているところをさがしてみましょ。安息日ごとに5つずつ、合計10この違いがあります。また、「安息日にしてはならないこと」リストを持って、してはならないまちがい探しをしていたファリサイ人たちとは違って、「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか」と言われたイエスさまは何を大切にしていたのかということも一緒に話し合ってみましょう。

※こたえ







まちがい5つ



まちがい5つ



## ヨハネのとまどい

獄中にいたバプテスマのヨハネは随分と戸惑い、心に迷いが湧いていたようです。イエスについて聞かされる報告が、自分自身が抱いていたメシアのイメージと合致しないからです。ルカ3章17節以下で、ヨハネ自身が人々に語り聞かせたメシアの姿は、人々を容赦なく選別し、厳しい裁きをもって振り分ける審判者の姿でしたから。

そこでヨハネは自分の弟子たちを遣わして「メシアはあなたなのですか、それとも他の人を待つべきなのですか」と尋ねました。齒に衣着せず人々に悔い改めを迫り、投獄も辞さずに欺瞞に満ちた為政者たちを断罪していたヨハネ。彼はメシア到来の時の迫りを確信していました。獄につながれ身動きの取れない彼にとって、不安と焦りは強烈なものだったに違いありません。

## つまずかないで

ヨハネの弟子たちが駆けつけたときは、折しもイエスが様々な症状に苦しむ病人を癒やしていたときでした。イエスはヨハネの弟子たちの質問に対し、その事実だけを伝えます。終末が到来したときに引き起こされる出来事としてイザヤ書が描写したいくつかの記述を引用しながら、いま、この人たちに起こっていることを見、そのままをヨハネに伝えよと言うのです。ヨハネが期待していたメシア出現のイメージは、政治的な色彩さえまとった人物が、民全体の前に威厳をもって登場する

様子だったかもしれません。しかし、イエスは、生きる悩みに閉ざされてきたひとりの方が、その荷を降ろされ喜んでいいる事実を伝えよと言うのです。「あとはあなた自身が決めることだ」とでも言うように。

バプテスマのヨハネには自分の抱く「メシアの型枠」があったように、私たちもまた「救い主の型枠」に固執することがあります。イエスの業、言葉、人々への関わり、その事実面に直面し、自らの解放をそこに感じて「イエスこそ主なり」と告白する自由を失わないようにしましょう。

イエスは引き返していくヨハネの弟子たちに伝言を添えました。「わたしにつまずかない人は幸いである」と。「つまずく」(スカンダリゾー)という動詞は、鳥が仕掛けられた罠に捕らえられるようなニュアンスを持っていて、「真理を得る道において妨げられる」ことを意味しています。私たちの生き生きとした主告白を妨げるものは、ついつい固定されてしまう自分自身の信仰的観念なのかもしれません。

## ヨハネの時、イエスの時

ルカ福音書には、イエスの宣教の時をそれまでの歴史と峻別させようとする特徴があります。ヨハネは「約束と準備の時」の最大の存在であるのに対し、イエスは「成就の時」を生きるメシアです。ヨハネは「女から生まれた者」すなわち人間が織りなす歴史的な時間の中で最も偉大な人ではあるのですが、イエスは神の国の存在であり、それまでの歴史

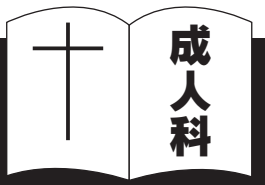
もあらゆる預言も約束も「イエスに向かって」進んできたことなのです。さらに、今は救いの業のすべてが「イエスから」開始されていることを証ししています。しかもそれはユダヤ人やユダヤ主義にとどまらず、全世界の人々に広がっているのです。ルカ福音書が記され読まれていた時代にも、バプテスマのヨハネの教えを汲み、悔い改めのバプテスマを伝える「ヨハネ集団」が活動し、人々に影響を与えていたようですが（使徒 18：24～19：10）、そうしたユダヤ主義的な文脈や枠組みを打ち破ろうとするルカは、イエスの名によるバプテスマを受け聖霊に満たされて生きる者となること、それこそが救いのおとずれなのだを強調しています。イエスとヨハネの「時の意味・次元の違い」を意識するルカの編集意図が、ルカ福音書の「イエスとヨハネの接触」記事を特徴付けています。

ところで、ヨハネをもイエスをも拒絶する

#### 準備のための聖書日課

23日	㊦	マラキ書3:1	道を備える使者
24日	㊦	ルカ3:1～14	ヨハネの登場
25日	㊦	ルカ3:15～20	ヨハネの「メシア像」
26日	㊦	ルカ16:14～18	これまでとこれから
27日	㊦	使徒10:34～43	ヨハネの後に
28日	㊦	使徒18:24～19:7	イエスの名によるバプテスマ

ことしかできない、しかも正反対の理由で両者を非難するファリサイ派の人々や律法の学者たちの頑迷な姿は、42課から続くルカのファリサイ派の人々への批判としっかりとつながっています。



## 成人科

●イエスがバプテスマのヨハネを高く評価していたことは間違いありません。厳しい自己批判に基づいて悔い改めを起こし、神の義に向かって生き直そうと呼びかけるヨハネの姿勢は誠実そのものです。けれどもその「一生懸命さ」が「つまずきのもと」となってしまうたり、自分の信念や信仰者像・教会像に固執してしまう危うさも持っています。

●つまづく（スカンダリゾー）は新約聖書中30回も出てくる言葉ですから、初代の教会世界にとって、イエスの言葉やふるまい、そして何より十字架の死と復活は、常に「つまずき」の石であったと思われます。人間の固定観念、社会の通年、尊重してきた宗教的枠組み、そのようなものとぶつかってしまう作用を「福音」は持っているのです。

# ヨハネの時、イエスの時

聖書

ルカによる福音書7章18～35節

暗唱  
聖句

貧しい人は福音を告げ知らされている。  
わたしにつまずかない人は幸いである。ルカ7：22～23

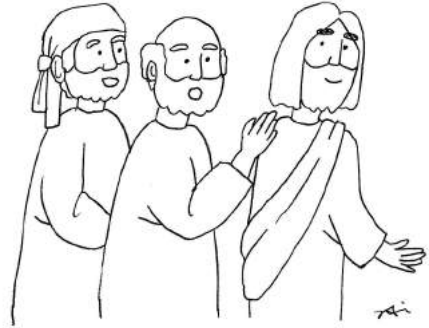
44  
課

1月  
29日

イエスさまのもとには、いろいろな人が集まってきます。病気や悪霊に苦しむ人、貧しい人、罪人、仲間外れにされた人…。イエスさまは人々を癒し、福音を告げ、苦しみから解放しました。死んでいたのに生き返った人もいました。イエスさまの評判はたちまち国中に知れ渡りました。

さて、牢の中のヨハネは自分の使命を思い、メシアはまだかと焦っていました。ヨハネの弟子は、イエスさまの噂を伝えました。「では、やはりイエスがメシアなのか。しかし…」そこで、ヨハネは弟子を二人遣わして直接イエスさまに尋ねることにしました。

その日も、イエスさまは人々を癒しておられました。「イエスさま、ヨハネ先生からの質問です。『来るべき方はあなたですか。それとも、まだ他の方を待たなければなりませんか』」。イエスさまは答えます。「ここで見たこと聞いたことを、そのままヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病の人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、何より貧しい人は福音を告げ知らされている」。イザヤの預言は成就し、イエスさまによって神の救いの時はもう既に始まっていたのです。でも、それは人々が描いていた救いとは違いました。ヨハネさえ、イエスさまが救い主かどうかわからなかったのです。イエスさまは言われず。「わたしにつまずかない人は幸い



です」と。自分の考えにしがみつ়くことをやめなければ、イエスさまを受け入れることはできないのです。

ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスさまは群衆に話しました。「ヨハネこそ、メシアの前に道を整えるため神に遣わされた人です。この世でヨハネより偉大な人はいません。しかし、わたしと共に神の国に生きる人たちは別です。神の国で最も小さい人でも、ヨハネよりは偉大なのです」。

ヨハネの教えに耳を傾けた人々は皆、罪人の代表の徴税人さえも、バプテスマを受けて神の正しさを認めました。しかし、ファリサイ派や聖書の先生たちは、ヨハネからバプテスマを受けないで、自分たちを救おうとなさる神のみ心をつっぱねたのです。「神のみ心を受け取らない人は、悔い改めを迫るヨハネの呼びかけにも、わたしの喜びの福音にも応えません。それどころか勝手な理屈でケチばかりつけて、せっかくの神の救いの計画を台無しにします。しかし、神の救いの計画の正しさは、み心に従うすべての人たちによって証明されるのです」。



# ヨハネの時、イエスの時

青少年科



44課

1月29日

聖書

ルカによる福音書7章18～35節

暗唱  
聖句

貧しい人は福音を告げ知らされている。  
わたしにつまずかない人は幸いである。ルカ7：22～23

## 聖書から…

イエスさまの様子をヨハネは自分の弟子たちを通して聞きますが、どうも想像していた『メシア（救い主）像』と違うと感じます。そこでヨハネは弟子をイエスさまの元に派遣し確認させます。

イエスさまはちょうどその頃、病気などに苦しめられている人たちを癒していました。「見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病の人は清くなり、聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人々は福音を告げ知らされている」とヨハネに伝えなさいと命じられます。

ヨハネがイエスさまに対して持っていた期待する役割や姿、またファリサイ派の人々や律法の専門家たちもイエスさまを押し込めようとした「型枠」（彼らの前提は、イエスは神ではないという考え）をもっていた様です。「イエスさまが、こんなことをするはずがない」と思う聖書箇所を読むと、私は少し戸惑います。たとえば、神殿で両替の台をひっくり返すなど少々暴力的なイエスさまについて読む時です。皆さんは、どうでしょうか。

## 分かち合おう

- イエスさまを親戚として小さい頃からよく知り、ヨルダン川で直接イエスさまにバプテスマを受けたヨハネでさえ、イエスさまが本当にずっと自分たちが教えられ、期待

し、待っていた「救い主」なのかどうか、きちんと知りたいと思いました。ヨハネにとって、メシアは厳しい裁きをすぐに行われるお方というイメージがあったのかもしれない（ルカ3：17参照）。

「イエスさまは、こういうお方だ」というイメージを私たちも持っていると思います。

イエスさまのイメージを紙に3つずつ書き出します。そして、今日の箇所でイエスさまが実際になさった具体的な働きを調べて分かち合ひましょう。例えば、イエスさまはどのような人々と共におられたでしょうか？

- それまで「道」を整え、メシアの到来に備えよと唱え、バプテスマを授けていたヨハネが逮捕され、イエスさまを迎える「準備の時」が終わりを遂げます。今度は、イエスさまご自身が出かけて行き、癒し、教え、福音を宣べ伝える「イエスさまの時」が始まりました。福音書を読むと、イエスさまと出会い癒された人たちは皆、喜びに満たされて、確実に変えられている様子がわかります。ある人は、賛美をしながら帰っていきました。イエスさまが告げられた「福音」とはどんなことだったのでしょう？自分に都合の良いことばかりでなく、イエスさまの望まれる「福音・よき知らせ」の情景を今日の箇所（7：21～22）から想像してみましょう。

# ヨハネの時、イエスの時

聖書

ルカによる福音書7章18～35節

暗唱  
聖句

貧しい人は福音を告げ知らされている。  
わたしにつまずかない人は幸いである。ルカ7：22～23

44  
課

1  
月  
29  
日

## 聖書から…

洗礼者<sup>バプテスマ</sup>ヨハネとイエスさまの出会い、どちらもお母さんのお腹の中にいた時だったようです。はじめてイエスさまに会ったヨハネは、胎内で「おどった」と言います。成人したヨハネは牢屋の中にいます。イエスさまの道を準備するために、悔い改めのバプテスマを宣べ伝えていましたが、王さまにも「悪いことは悪い」と悔い改めを語り、捕まったのです。イエスさまが、病気や痛みや悪霊に悩んでいる多くの人々を癒しているとの知らせがヨハネの耳にも届きました。ヨハネは「イエスさま、何をしていますのですか。急いでください。あなたは王座を受け、私たちを助けてくださるお方で間違いないのですよね？」と不安になりました。

私たちも困ったり、不安になることがあります。そんな時には、神さまに祈ります。でも、祈っても何も変わらなかったという経験があるかもしれません。イエスさまは言われます。「知恵の正しさは、それに従うすべての人によって証明される」(7：35)と。イエスさまを通してなされる神の助けは、時に私たちが思う助けとは違う仕方になされることがあるのです。だから、神さまの思いに従う自分であるようにとも祈りたいと思います。その先には必ず、私たちにとってもすべての人にとっても、一番よい神の救いが準備されているからです。

## 活動①

### 「いっせいにポーズ！」

「〇〇のポーズ！せーの！」との掛け声で、一斉にポーズをとってみましょう。みんな同じポーズになりますか？(例：おさるさん、お祈り、など)

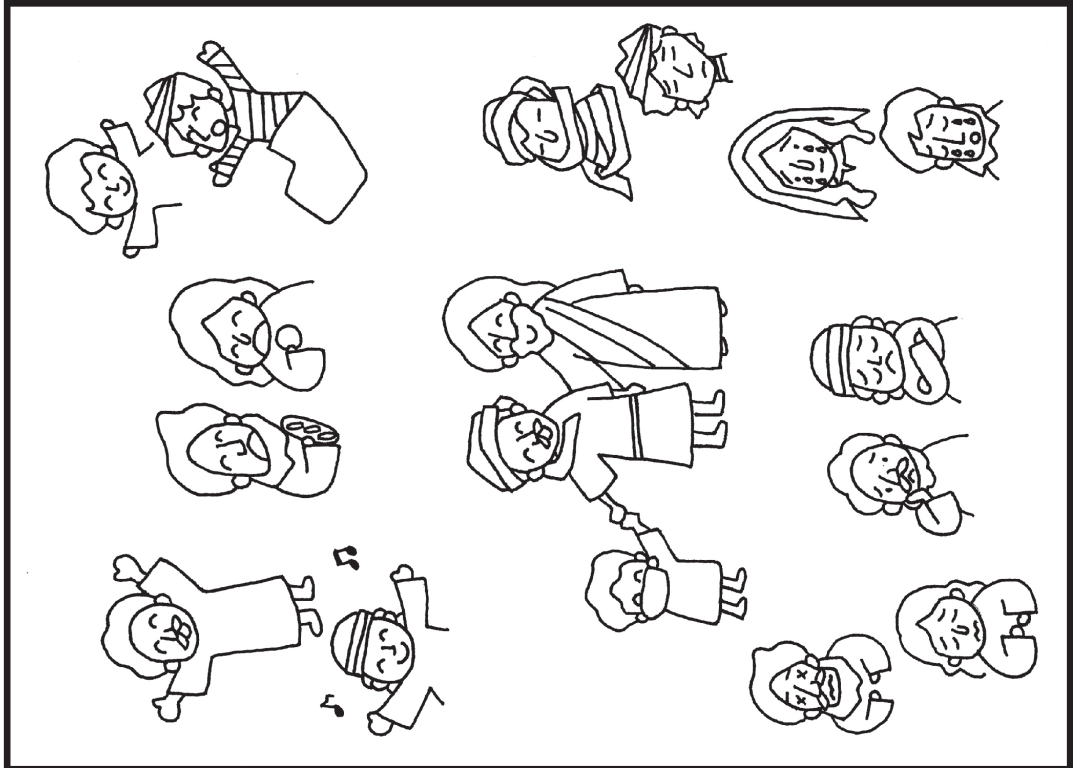
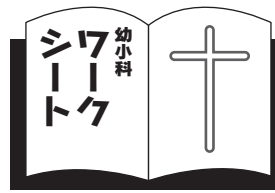
お祈りのポーズは、みんな目を閉じ胸の前で両手を合わせる姿で揃うかもしれませんが、ただ聖書中では、祈りのポーズの指定はありません(両手を広げたり、伏したり様々)。むしろ聖書は、「どんなとき、だれにむかって、なにを祈ったか」という祈りの中身がたくさん書かれています。祈りのポーズから、祈りの中身についても考えてみましょう。

## 活動②

## ワークシート

### 「ヨハネのまなざし、イエスのまなざし」

- ①ワークシートのAとBの絵の外枠をはさみで切り取ります。
- ②Aの小窓太線に切り込みを入れ、開くようにします。
- ③AをBに重ねたら準備完了です。
- ④ヨハネのまなざしを想像しましょう。癒された人とイエスさまが喜んでいる顔だけが見えます。ヨハネはどう思ったでしょう。
- ⑤Aの絵を取り除き、Bだけの絵を見ます。イエスさまのまなざしを想像します。イエスさまはどんな気持ちだったのか、語り合ってみましょう。

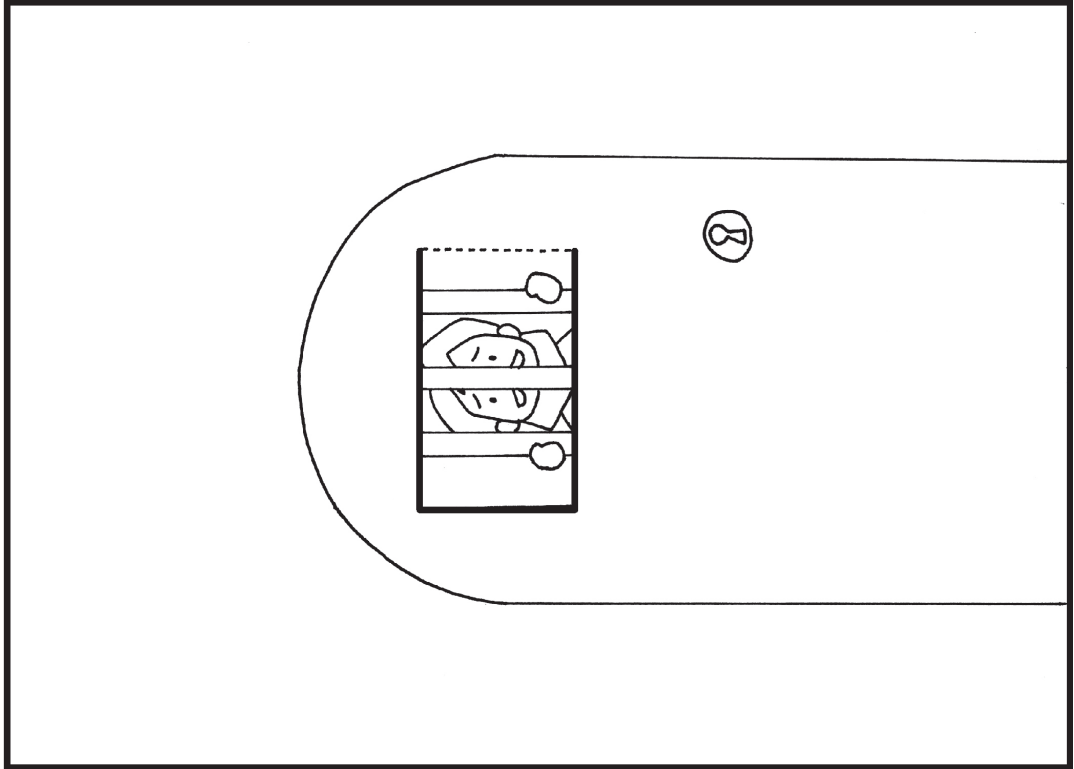


B

折る

切る

A



# イエスの涙、イエスの怒り

聖書 ルカによる福音書19章41～48節

暗唱 聖句 わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。  
イザヤ 56：7

45課

2月5日

## 信教の自由を守ること

国家と教会が密着し、人を生まれながらにして支配する制度に反対し、幼児洗礼を批判して誕生したバプテスト派。その思いを汲む私たちにとって「信教の自由」は大切な理念の一つです。政教分離を原則とし、信教の自由を守る。それはマモン(この世の富や権力)による信仰の浸食とのたたかいです。また特に日本の歴史文脈においては、天皇を「現人神」と告白することによってアジア諸国への侵略戦争を引き起こしたことへの深い反省として掲げなければならない原則です。そのことを念頭におきながら、エルサレムのために泣き、神殿で怒ったイエスの心に触れていきたいと思います。

## イエス、泣く

エルサレム入城を目前にしてイエスはエルサレムのために泣きます。それはルカ福音書13章31節以下の「エルサレムのための嘆き」とも深く連動しています。エルサレムはヘブル語でイール・シャローム「平和の町」という意味です。平和を讃え、平和に仕えるための都エルサレムは、実際には預言者たちを拒絶し、政治的な策謀に満ち、異教崇拜に毒され続けた都であり、まさに「マモン崇拜の町」とでも言うべき姿でした。そして今は、ローマ支配に侵され、特権を享受する一部のユダヤ指導者たちによる民衆支配の拠点となっていました。神殿も、巡礼者たちの献げ物に利ざやを加えて搾取する「集金システ

ム」の場となっていました。

イエスは嘆き、泣きます。「平和の町」が平和への道を見ることができないでいる。平和の主、平和の君を拒み、見失っていかうとしている。前掲の13章33節はルカの独自資料ですが、イエスはエルサレムでの謀殺の危険性を承知し、それでもそこに進み行かねばならない覚悟を抱いていました。そしていよいよそのエルサレムに入城し、おそらくはここで葬られていくであろう自身の時の迫りを感じています。そうした緊張感の中で、やがて崩れゆくであろうエルサレムの悲しい運命を予告しながら、彼は涙を流すのです。

事実、紀元70年に、ローマ軍によってエルサレムは陥落してしまうことになります。

## イエス、怒る

エルサレム入城のその日のうちに、イエスはエルサレム神殿の境内に足を踏み入れます。そして怒りをあらわにして、両替商人や生贖販売人たちを追い出してしまいます。その時、イエスが怒りとともに発した言葉は、イザヤやエレミヤが預言した「本来の神殿の姿」を告げる言葉でした。やがて異邦人たちさえもがここに共に集い、共同の祈りを捧げる「祈りの家」となるビジョンでした(イザ56:7)。また神殿礼拝とは、正義を行い、寄留者を保護し、孤児や寡婦を助け、無実の血を流すことをしない社会形成と結びついたものでなければなりません。それなのに、現実はその正反対のことを引き起こしてしまい、さながら「強盗の巣」のようにしてしまった(エレミ



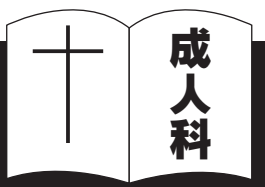
ヤ7:11)とイエスは叫ぶのです。神殿での祭儀は、ユダヤ人のアイデンティティを保持する制度の一つでした。とりわけ、ディアスポラ(諸国に離散した)のユダヤ人たちにとって「巡礼」は大切な営みでした。しかし、そうだとし、神を収めてしまうような建物も、また制度も、この世には何一つありませんし、そのように思い違いをすることはできないのです。私たち教会もまた、建物を持ち、運営のために制度を持ちますが、常に形骸化から離れる努力をし、またマモンへの欲望に呑み込まれないように、イエスの怒りを記憶すべきでしょう。

## 指導者たちの結託

神殿で騒動を起こしたイエスのこの行為は、かなり決定的な出来事でした。それまで、それぞれの領域で棲み分けていた祭司長たち

準備のための聖書日課			
30日	㊦	イザヤ書56:6~8	すべての人の祈りの家
31日	㊧	エレミヤ7:1~11	強盗の巢窟
1日	㊨	ルカ16:13	神と富とに仕えられない
2日	㊩	ルカ21:5~6	神殿崩壊の予告
3日	㊪	ルカ21:20~24	エルサレム滅亡の予告
4日	㊫	ルカ13:31~35	エルサレムのために嘆く

(宗教的貴族)と律法学者たち(思想・学問・教育従事者)と民の指導者たち(行政担当者)が遂に結託して、イエス殺害を共謀していくこととなります。政治と思想や信仰が統合される時とはどのような時なのかを暗示する出来事でもあります。



## 成人科

●「平和への道をわきまえる」(19:42)とは、現代の私たちにとってはどのような事を指すのでしょうか。戦争が準備され引き起こされるときには「信教の自由」が侵されていく、これは歴史から学んできた教訓です。国家が宗教や信仰をコントロールしてはならない、これは間違いなく「平和への道のわきまえ」です。そして、これを掲げて生きることは「教会のわきまえ」であり、教会の「平和への責任」だと思えます。

●聖書テキストには「時のわきまえ」についても記されています。私たちが生きている時間という時(クロノス)に、突如として神の時(カイロス)が立ち現れます。カイロスの時に神によって祝福される事柄に、今つながって生きること、それが「時をわきまえて生きる」ことでもあります。

# イエスの涙、イエスの怒り

聖書 ルカによる福音書19章41～48節

暗唱 聖句 わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。  
イザヤ 56：7

45課

2月5日

「主の名によって来られる王、イエスさまに祝福あれ！ 天には平和、いと高きところには栄光あれ！」弟子たちはイエスさまを囲んで、谷を越え丘を登ります。ようやくエルサレムの都が見えた時、イエスさまは両手で顔を覆い、肩を震わせました。拭っても拭っても、込み上げてくる涙。こんなに悲しそうなイエスさまは見たことがありません。「ああ、エルサレムよ…。お前はやがて滅ぼされるだろう」。嘆くように預言しました。

しかし、エルサレムは滅ぶどころか、生き生きと活気づいていました。モーモー、メエーメエー、クックルルー。境内の異邦人の庭では、供え物の動物が賑やかに売られています。遠くから何日もかけて旅をして来た人も、わずかなお金をコツコツ貯めてやっと来ることができた人も皆、ささげ物をして礼拝できることを喜んでいました。商売人たちは、ジャラジャラ銀貨を数えてはにんまり。それを眺める祭司長や聖書の先生たちは、「神殿が栄えて大いに結構！これでユダヤも安泰だ！」とほくそ笑みます。入り口の庭止まりの異邦人や、門の外で物乞いする人たちのことなど、まったくお構いなしです。神殿に仕える先生たちの多くは、み心に従うことよりもお金や権力を喜んでいたので。イエスさまの涙は怒りに変わります。それは、神の怒りであり神の涙でした。

イエスさまはもう一度涙を拭くと、帯を



締め直していざ神殿へ。「『わたしの家は、祈りの家でなければならない』。わたしの父の家は、異邦人も、差別されている人も、誰もが一緒に祈る家。民族や立場の壁を超えて、皆が心一つに、神の憐れみを求めて祈ること。それが神のみ心。それこそが主の平和の町、エルサレムだ。それをお前たちは、勝手に自分のものにしてしまった。罪を悔いる祈りさえない。これはもはや神殿でなく、強盗の巣だ！」。イエスさまは強盗から父の家を奪い返すように、商売人たちを追い出しました。そして、神殿が本当の祈りの家となるように、毎日境内で主のみ心を教えました。人々はみな夢中になって聞き入りました。

一方、先生たちは、イエスさまを殺すことで頭がいっぱいです。せつかく救い主が来てくださったのに、それが神の訪れとわからなかったのです。

エルサレムの都が滅ぼされたのは、それから40年後のことでした。あの日、悔い改めてイエスさまを受け入れていたなら…。平和の教えに耳を傾けていたなら…。イエスさまの涙と怒りがよみがえってきます。

# イエスの涙、イエスの怒り

聖書

ルカによる福音書19章41～48節

暗唱  
聖句わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。  
イザヤ 56：7

## 聖書から…

当時エルサレムの町は、ローマ帝国の軍事力による支配の下にありました。ユダヤの自治行政機関であった「サンヘドリン」（現在の日本でいう最高裁判所、国会、宗教議会が合併されたもの）も、一部の特権階級が政治と宗教の力を持ち過ぎていました。神殿すら、貧しい人たちや遠方からの巡礼者から過度に搾取する組織の一部として使用されていました。

イエスさまは城壁に入る前、遠くからその都の姿を見て涙を流され言われます。「お前も平和の道をわきまえていたら」「崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったから」。そしていわゆる「宮清め」をなさいます。イエスさまが怒りをあらわになさる珍しい箇所です。涙を流され、怒りをあらわになさる、直視しづらいイエスさまの姿がここにはあります。涙を流してまで、また怒ってまで、イエスさまが伝えなかったことは何でしょうか。

## 分かち合おう

- エルサレムには裁判所、政治、宗教の役割がひとつになった機関がありました。当時エルサレム周辺の人たちは、それにより安定した強い基盤があり治安が保たれていると考えたことでしょう。しかし、その「平和」は、ローマ帝国による力の支配による

もので、イエスさまは、そのような平和は本当の平和ではないと心から憂い、涙を流されました。イエスさまの考えられる平和とはどのような平和でしょうか。

お金がなければ鳩も買えず、神さまからの赦しを受け取ることができない様に見えるシステムが当時ありました。私の教会の看板には礼拝時間の案内があり、「どなたでもお越しく下さい」と書いてあります。どうして教会は、どんな人でも礼拝に迎え入れようとするのでしょうか。

- バビロン捕囚の時期、バビロンでは動物を手に入れることも、祭儀を執り行う礼服を着た祭司もいませでした。その頃には、動物の犠牲が焼かれる際に立ち上る煙の代わりに多くの祈りの言葉が、「この感謝と悔い改めが神さまに届くように」と生み出されたようです。詩編にある祈りの幾つかはその頃つづられたようです。

今日の箇所では、「どれだけ悪いことをしても、犠牲を捧げたのだから大丈夫」と、いつしか本来の礼拝の本質である「悔い改め」「感謝」の姿勢が薄れ、一方通行な儀式となっていました。私たちの教会が真の「祈りの家」となるために、今、私たちが手放し、断念できることはあるでしょうか？神さまの思いを聴かせてくださいと、共に主の前に静まり、頭を垂れ、祈る群れとなりますように。

45課

2月5日

# イエスの涙、イエスの怒り

聖書 ルカによる福音書19章41～48節

暗唱 聖句 わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。  
イザヤ 56：7

## 聖書から…

「信教の自由を守る日」を前に、聖書の箇所は少し先回りします。

時にエルサレムへ向かう決意を固めたイエスさまは、町や村を巡って教えながら先頭に立って、エルサレムの町へと進んでいきました。「平和の町（へ：イール・シャローム）」の名を持ち、幼少の頃から親しんできた（40 課）エルサレムは、今やイエスさまにとっては行くために決意しなければならないほど危険な場所を感じられていました。イエスさまの平和と、エルサレムの平和が、あまりにもズれてしまっていたからでしょう。平和は大切だとだれもが分かっています。でも、平和が指す中身の方がもっと大切です。

ついに、イエスさまの前にエルサレムが見えてきました。遠くには見事な石造りと捧げ物で飾られた神殿も見えます。その時イエスさまは、目から涙をこぼして、言われました。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら…」（19:42）。…の続きは「…町も神殿も残らず崩されはしないだろうに」でしょうか。イエスさまの目には、やがて偽りの平和もろとも残らず崩され、荒れ果てるエルサレムの町の姿が重なって見えていたのかもしれないと思います。こうしてイエスさまは、さらに神殿の中まで進んで行かれました。そこで、偽りの平和に生きる人たちを退けられたのです。

神さまは今も生きて働いておられます。

偽りの平和は必ず崩され、神の平和が実現します。だから、私たちは、すでにイエスさまを通して示された平和への道を信じて生きましょう。

## 活動①

### 「へいわって？」

絵本紹介『へいわってどんなこと？』

浜田桂子作 童心社

日・中・韓の12人の絵本作家が、平和のために書き、各国の言語で刊行しあう取り組みの中の一冊です。この本の中では「どんなかみさまをしんじても…だれかにおこられたりしない」ことも平和だとされています。政教分離の原則のもとで、信教の自由が守られていきますように。

## 活動②

## ワークシート

### 「鏡をつかって見てみよう」

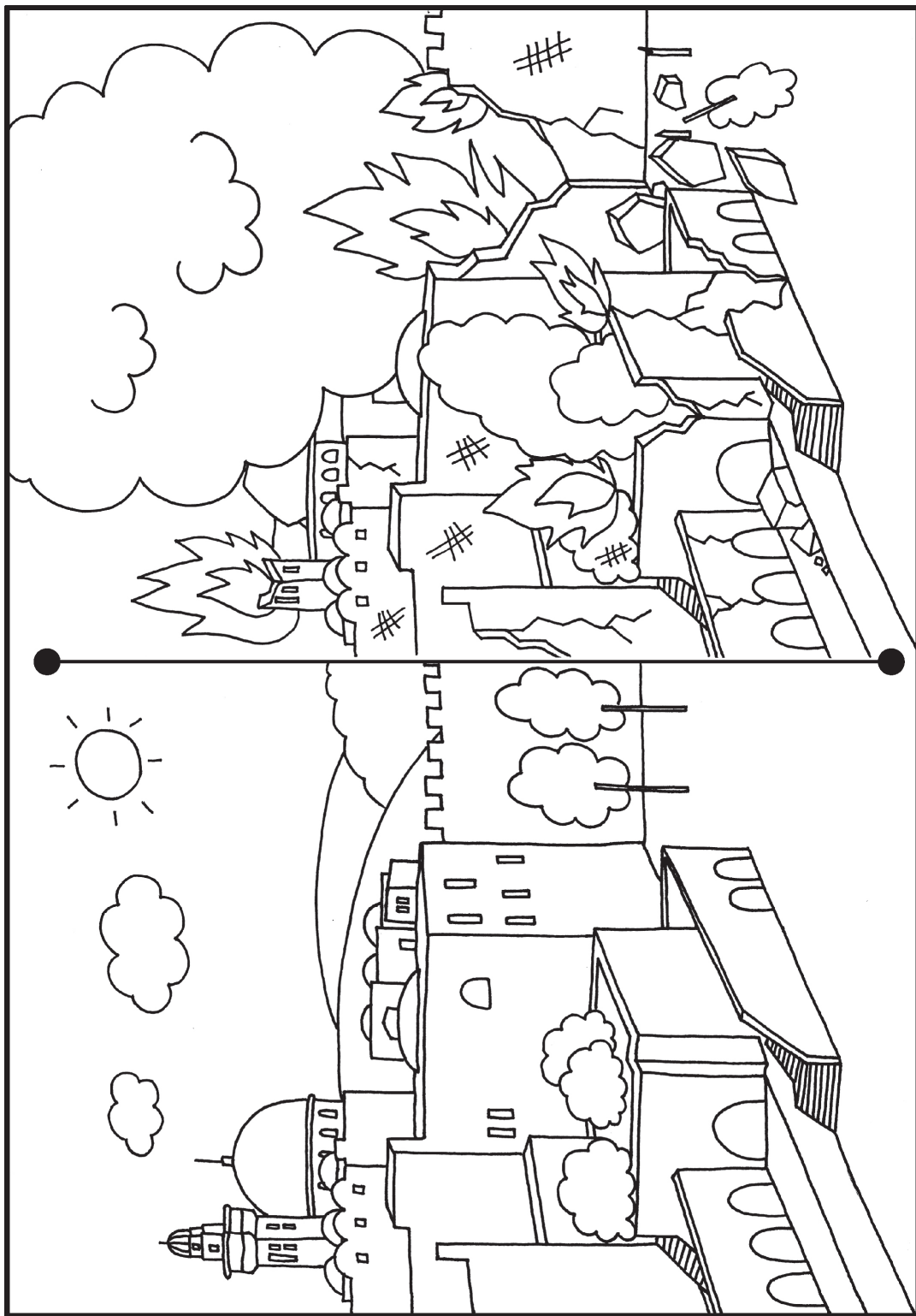
●準備●ワークシート、鏡、色鉛筆

①ワークシートの中心にある線に沿って鏡を立てます。

②鏡の置き方は、最初は左向き、次に右向きに立てましょう。

戦争がなく秩序立っていることが平和ではありません。平和に見える社会の中で、ひとつでも笑顔が奪われ、涙が流れ、うめく声があるならば、それはイエスさまの言う平和ではないでしょう。鏡写しかがみうつしを通して、エルサレムの町を見つめて涙を流したイエスさまの平和のまなざしを体験しましょう。





45課

2月5日

# ともし火をともして

聖書 ルカによる福音書8章16～18節

暗唱  
聖句 だから、どう聞くべきかに注意しなさい。  
ルカ 8：18

46  
課

2  
月  
12  
日

## 「譬え話」の特徴

今回の46課からしばらくはイエスが語られた「譬え話」を通して福音を聞いてまいります。譬え話は、「言いたいこと」を聞き手に直接に伝える話法とは異なり、聞き手の感覚や類推からの理解を呼び起こす話法ですから、言うならば聞き手自身がその「聞き方」を問われていくことにもなります。イエスはそんな「譬え話」を多用して、しかもルカ福音書は、他の共観福音書には登場しない独自の譬え話をたくさん盛り込んで、イエスが神の国の福音を人々に生き生きと語られる様子を証言しています。

## どう聞くか

8章4節以下の「種を蒔く人」の譬えと、本日の「ともし火」の譬えは、ルカの譬え話群のトップバッターの位置にあり、まさしく「聞き手の聞き方」の大切さを考えさせる譬えです。後ろに続く「イエスの母、兄弟」たちの記事を、この二つの譬えの後ろに配置することとも合わせて、ルカは、「神の言葉をどう聞き、聞いた言葉にどう従うか」の肝心を強調しているのです。マルコの並行記事(4：24)が「何を聞いているかに注意しなさい」と、「聞かされている事柄」を問題にしているのに対して、ルカは「どう聞くべきかに注意しなさい」と「聞き方」を問うています。些細な違いのように思えますが、それぞれの福音書が書かれ、また読まれていた時代の違いや、それぞれの共同体の課題の違い

が現れていると思えます。まさしく「いま、どう聞く(読む)か」が、私たちにも投げ込まれてきます。

## ともし火は隠せない

ルカは、この福音書の早い段階で、赤ん坊のイエスを抱くマリアに対して、シメオンが(この子は)「イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりする」ために、あるいは「反対を受けるしるしとして」も定められた人物であり(2：34)、「多くの人々の心にある思いがあらわにされるため」(2：35)に生まれた子であると予告しています。神の言葉は歴史の中で響き人々の心の中に蒔かれてきたのですが、覆われたり、封じられたり、歪められたり、押し込められたりもしてきました。神の言葉を覆い隠し、人々を暗闇の中に倒れ込ませてきたのは(ルカ福音書の文脈で考えれば)、ファリサイ派の頑迷な人々や律法の専門家たち、またユダヤ教指導者たちでした。しかし、今や、神の救いの想い・民の命を励ましつづけようとするみ心は、イエス自身によって明らかになり、灯され始めたのです。イエス自身、それは決して隠すことなどはできないのだという信仰に立ち、人々を覆い隠している暗闇を照らし、暗雲を吹き晴らしていく自らの使命を強く自覚しています。種を蒔く農夫が、種がどこに飛び散ろうとも、来る日も来る日も発芽を願って蒔き続けるように、自分自身も種を蒔き、光を燭台の上に掲げるのだ、と。ただし、聞き方がずれば、それは実らないのだ、とイエスは語るのです。

## 持っている、持っていない

「持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる」。このフレーズも聞き方を間違えると、搾取さくしゆのスパイラルのような論理になってしまいます。ここでいう「持っている」とは（命を生かし励まそうとする）神の言葉を、聞きたい、受けたいと渴望し、求め願う「心」を持っている人のことです。それに対して「持っていない人」とは、神の言葉を自分の考えを補強するためや自分の利害を強めるために利用しようなどと目論んでいて、聞き方が歪んでいる人のことであり、そのような人は「持っている」と自負（誤解）しているものまで粉碎されてしまうだろう」と言うのです。

続く箇所、イエスの肉親たちは「イエスに近い」「イエスを知っている」と自認し、

### 準備のための聖書日課

6日	㊦	ルカ8:4~15	種を蒔く人のたとえ
7日	㊧	ルカ8:19~21	聞いて行かう人こそが
8日	㊨	ルカ10:21~24	あなたが、 今聞いていることこそ
9日	㊩	ルカ12:49~53	分裂さえももたらす
10日	㊪	ローマ10:14~21	聞くことによって 始まる
11日	㊫	マルコ4:21~25	何を聞いているかに 注意を

突拍子も無いことを始めたイエスを取り押さえ、引き戻そうとするのですが、そうした肉親の反応もまた、聞き方を間違え、聞くべき事を聞き損ねてしまった人々の実例として、「ともし火」の警えを補強しているのです。



## 成人科

● 譬え話に限らず、聖書を読むときには「読み方」や「聞き方」がとても大切です。いつでも、どこでも、誰にでも通用する真理として読むよりも、「いま、ここで、わたしたちに」問いかけられている事柄を聴き取ろうとするなら、聖書は具体的に語り始めてくれます。この読み方、聞き方は、たとえば教会学校のクラス等で「一緒に読む」時に、よりいっそう生き生きと語ってくれるように思えます。

● 「聖書の学び」では、「ともし火」を掲げ続けようとするイエスの覚悟を読み取りました。教会も意思や覚悟が問われる時があります。時代の風潮に忖度し、順応することに気遣いしすぎると「ともし火」を寝台の下に置いてしまうことになるかもしれません。聖書を読んで生きる教会は、いつの時代にも、その時代の中で問われています。

# ともし火をともして

聖書

ルカによる福音書8章16～18節

暗唱  
聖句

だから、どう聞くべきかに注意しなさい。  
ルカ 8：18

46  
課

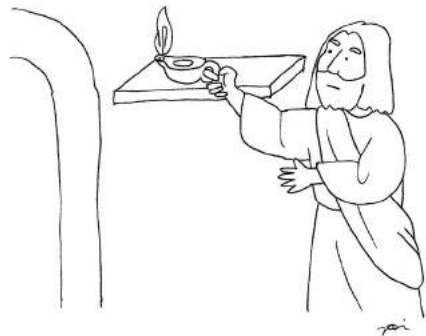
2月  
12日

「種まき」のたとえの説明が終わると、もうたそがれ時に。イエスさまは、小さなランプに火をともしてランプ台の上に乗せました。すると、部屋中があたたかい光に包まれました。「みんなの顔がよく見える!」「こんなに暗くなっていたとは…」と弟子たち。「あった!」。失くしたと思っていたペンも出てきました。

イエスさまは言います。「ともし火を器で覆い隠したり、ベッドの下に隠したりする人はいません。ともし火は、入ってくる人にちゃんと光が見えるようにランプ台に置きます。隠れているものは必ずあらわになり、秘密にしていることも必ず皆に知られるようになる」。イエスさまは、「種まき」のたとえに続いて、み言葉を「ともし火」にたとえて話しているのです。「暗闇に隠れていたみ言葉を、今俺たちは、イエスさまの光の中で聞いているんだな」。さっきペンを見つけた弟子が言いました。「そうだな。だから俺たちも、聞いたみ言葉を自分の中にしまい込まないで、人々にしっかり伝えていかなくちゃ。ともし火を台の上に置くようにさ」。

すると、イエスさまが真剣な顔で言いました。「自分がどんな風に聞いているか、注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思っているものまでも取り上げられます」。

「俺、聞いたことあるよ。金持ちはますます金持ちになって、貧乏人はどんどん貧乏



になるってさ」。「それは世の中の話だろ。聞き方がズレてるぞ。どう聞くか注意するように、言われたばかりだろ」。イエスさまは、弟子たちが語り合うのを黙って見守ります。「私は、み言葉をただ聞くだけじゃなくて、それに従うことが、ちゃんと聞くってことだと思う。つまり、持っている人は、み言葉を実践して実を結ぶ人。反対に、聞いても従わない人が持っていない人。せっかく蒔かれたみ言葉の種も、守らなければ実を結ばないって、イエスさまさっき言ってたでしょ」。すると「僕は、持っている人は、み言葉を聞きたいと願う『心』を持っている人だと思う。求める心がないと、イエスさまのもとに来ないから、いくら与えたくても与えようがない。そんな人は、自分は持っていると思い込んでいますが、本当は何も持っていない。暗闇の中だと無いことすら見えないからね」と別の弟子。

「もっとみ言葉を聞きたいな!」「そして実践したい!」「皆に伝えよう!」。語り合う弟子たちを、ともし火がやさしく照らしていました。



# ともし火をともして

聖書 ルカによる福音書8章16～18節

暗唱 聖句 だから、どう聞くべきかに注意しなさい。  
ルカ 8：18

## 聖書から…

イエスさまは、たとえ話を通して神の国の秘密を教えられました。ともし火というのは、イエスさまの時代には小さな陶器のお椀に油が入れられていて、火がつけられたヒモが入っているものでした。家の中の安全を確保し、お互いの様子がわかるようになります。

み言葉の光に照らされる時に、隠れているものはすべてあらわになり秘められたものも人に知られ公となります。だから、どう聞くべきかに注意しなさいとイエスさまは教えられたのです（「ともし火」が「神の言葉」という理解について「聖書の学び」参照）。

「持っている、持っていない」ということは「聖書の学び」にあるように、命を生かそうとする神の言葉を聞きたいと求め願う心を持っている人とそうでない人のことでしょう。ランプに火を点けてくださる方は「光あれ」と世界のはじめに命じられ、その言葉が現実となった神さまです。

これまで、神の言葉を受け取りたいと強く願ったことありますか？ 私自身は青年時代に、夜「神さま助けてください」という思いで聖書の中に慰めの言葉を求める時期がありました。深い闇の中に置かれていると感じる時ほど、み言葉の光が鮮明に浮かび上がるのです。

## 分かち合おう

● イエスさまは誰の家にでもある素朴なランプを使ってたとえ話をされました。今の家の電気は明るく本の細かい文字も夜でも読めるほどですが、当時のランプでは周りの2、3歩分ぐらいの距離しか照らすことができないものでした。それでも、そのランプがあれば安心して過ごすことができました。

神さまがイエスさまという希望の光を人生に与えてくださいました。自分の人生や思いを、「このようにしてくださった」という証しを互いに分かち合ってみましょう。また、互いの存在が神さまからの光をもつ大切な存在だと感謝して一緒に祈りましょう。

● 神さまがイエスさまという光を与えてくださったので、私たちを覆う闇は吹き飛ばされ、生きる希望と励ましを受けることができます。「光あれ」（創世記 1：3）と命じられた神さまが、私たち一人ひとりの内にも、同じ命の光をくださっています。私たちの存在も「あれ」と、強く願われ生まれたもの。そのようにして、私たちは今日も生かされています。私たちは「自分」という存在を、どのように見ているでしょうか？ 目の前にいる人の存在を喜び、同じ時間に同じ場所を共有させてくださるイエスさまを思い浮かべます。今日、私たちはどのようにして隣人の存在を喜ぶことができるでしょうか？

# ともし火をともしして

聖書 ルカによる福音書8章16～18節

暗唱 聖句 だから、どう聞くべきかに注意しなさい。  
ルカ 8：18

## 聖書から…

道具には、道具の正しい使い道があるでしょう。例えば、えんぴつは文字を書くという使い道、はさみは紙などを切るという使い道があります。

イエスさまも、福音の正しい使い道、生き方やたとえ話で教えてくださいました。イエスさまは福音を光にたとえて言われます。「たとえば、暗い部屋の中で唯一のあかりを持っている自分の姿を想像してごらんください。せつかくのあかりを容器で隠してしまったり、ベッドの下に置いたりはしないでしょ」と。福音という光は、その性質上、独り占めしようとしたり、使い道を間違えるなら、たちまちその人のところでは意味を失います。また福音の光は、誰かにだけ占有せんゆうされることはなく、別の所であらわされ、公となって広がっていきます。だから、福音の光の正しい使い道は、私たちの歩みを照らすこと、そして部屋へ「入って来る人」(8:16)をも照らすことです。イエスさまがこの世に来られたのは、すべての造られたものを照らすためだからです。

聖書を通してみことばを聴く私たちは、「どう聞くべきかに注意」(8:18)したいものです。すべてのもののためという広がりの中で、互いにみことばに聞こうとすることが「ともし火を燭台の上に置く」ということではないでしょうか。

## 活動①

### 「光はどこに？」

●準備●小型ライト、厚手の容器3つ

- ①親を一人決めて、親は全員が見ている前で容器の一つにライト入れ、ランダムにシャッフルしましょう。
- ②みんなでライトはどの容器に入っているかを当てましょう。遊びながら、光は隠すものでなく、辺りを照らす性質のものであることを分かち合えたらと思います。

## 活動②

## ワークシート

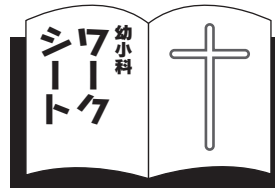
### 「どう読む、どう聞く？」

文章の区切りを間違えて読むことを「ぎなた読み」と言います(例、「ともし火をともしして」→ともし、火をともしして/ともし火を、ともしして)。巻物に写され残された聖書の文書は、今のように章も節もなく、句読点も字間もありませんでした。だからこそ、祈り、お互いに注意深く神さまの思いを聞きとろうとする作業が大切なのです。

- ①ワークシートの英文を「V」で区切って読んでみましょう。また、意味を調べて、翻訳してみましょう。
- ②次に、「^」で区切って、同じように翻訳してみましょう。区切り方ひとつで意味がまったく違います。だからこそ祈り、教会の礼拝や教会学校、また多くの方がたとの出会いの中で、聖書を読み直し、互いに聞き合う作業の大切さを分かち合いましょう。

※こたえ

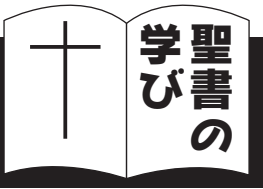
GOD IS NOW WHERE  
GOD IS NOW WHERE  
GOD IS NOW WHERE



# GOD IS NOWHERE

46課

2月12日



# 神の前に豊かに

聖書

ルカによる福音書12章13～21節

暗唱  
聖句

神のさまざまな恵みの善い管理者として、  
その賜物を生かして互いに仕えなさい。1ペトロ4：10

47課

2月19日

## ルカとルカ共同体の文脈

まず著者ルカの経済に対する理解を概観しておきましょう。ルカは使徒言行録の中で、イエスの名によって生き始めた人々が、思いを一つにし、互いに持ち物を持ち寄って共有し、相互扶助的に生きている様子を潑刺と描いています（使徒4：32以下）。また一つの信仰共同体が、他の共同体のために献金を届けていく相互支援の様子をも報告しています。彼は、ローマ帝国の権力や繁栄がもたらす富に与することなく、またそれらからの誘惑や迫害に怯むことなく、むしろそうした権力や富の支配によって疎外されている弱い立場の人々を、どんどん仲間に招き入れて膨らんでいき、また地域を越えて繋がっていく新しい共同体の姿を証ししています。ルカの経済への感覚や指向性を感じます。「愚かな金持ち」の譬え話はルカ特有のものですが、その編集意図の背後にはルカの「信仰者と経済」というテーマが映り込んでいます。

## 譬え話の文脈

この譬え話は、とても緊張感の高い文脈の中に置かれています。前後をたどると、「すべてが明らかにされる話」（12：1～3）「恐れるべきものは何か」（12：4～7）「弾圧を恐れず仲間として結びつくこと」（12：8～12）「愚かな金持ちの譬え」（12：13～21）「神の養いがある。だから、恐れるな小さな群れよ、との励まし」（12：22～34）「思いがけずに審判の時が来る話」（12：35

～48）「分裂に直面する予告」（12：49～53）「時を見分け、できることを懸命にすることの勧め」（12：54～59）と、これが12章という緊張感あふれる段落を形成しているのです。まさに、ローマ支配下で何かと難儀を強いられていたクリスチャンたちに対し、その時代の支配的価値観がどうであろうと、「何に根差し、何に依拠し、信じる者同士がどう結びついて生きていくべきか」を懸命に問いかけ、また励まそうとしています。その中でルカが大切にしていることは、いのちの主は神であり、その神の養いと支えがあなたがたから離れないこと、それゆえに世の力を恐れることなく勇気をもって一つとなり、共に生きていく関係をつくりなさい、ということでした。

## 愚かな金持ち

この譬え話は、遺産相続に漏れて腹を立て、イエスに裁定を求めた一人の人物の訴えに呼応して語られました。ただし、イエスは「財産分与に関する見解」にではなく、「財産とは何か」「そもそも財産を託される人間の『いのち』とはどのようなものか」について目を向けるよう促します。そのために描き出した一人の人物の姿。それは、貪欲に心が奪われてしまいがゆえに、①自分の畑が豊作であったばかりに不安が生じ、②それらをしまい込む大きな倉（複数形）を造ることを思いつき、③これでいつまでも愉快地生きることができると自分に言い聞かせて安心している「愚かな人物」の姿でした。この人物は、いのちも



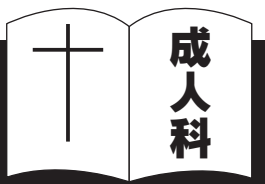
恵み（収穫）も神からのものであり、しかもそれらが「預かりもの」であることを忘れませんでした。更に、自分の現在に執着するばかりに、恵みを他者とわかちあうことに思い及ばず、自分のためだけにしまい込もうとしたのです。しかし、根源的な事実が一撃として彼に襲いかかります。「今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」。

## 命と恵みは預かりもの

この「根源的な一撃」こそが私たちの生命の事実です。私たちの命は、与えられ、また取り上げられ、しかも、それがいついかなる時かもわからないのです。忘れることはできても、この事実から誰も離れることはできません。また、私たちには、恵みとして何らかの賜物や財が与えられるのですが、それらはすべて「預かりもの」であり、それらの「恵

準備のための聖書日課			
13日	㊦	使徒3:1~10	私には金銀はないが
14日	㊧	使徒4:32~37	わかちあって生きる
15日	㊨	一コリント16:1~4	エルサレム教会への募金
16日	㊩	フィリピ4:10~20	贈り物への感謝
17日	㊪	ルカ12:4~7	一羽の雀さえ
18日	㊫	ルカ12:22~34	思い悩むな

み」には必ず「使命」が含まれています。ですから、自分を「恵み」の最後の受取人にせず、常にそれらを隣人とわかちあい、それらを用いて神を賛美していくべきであること。それが「恵みの法則」であるということ。「財の原理」として知っておかねばならないのです。



成人科

●ドイツ語で「贈り物」のことをgabe（ガーベ）といい、aufgabe（アオフガーベ）は「課題」や「使命」を指します。恵みや賜物には、つねにそこから始まる課題があります。あるいは使命に向かって備えられたものを恵みと理解するべきかもしれません。教会の「経済観念」は、等価交換的な考え方ではなく、恵みを循環させる（恵みを贈り出し続ける）経済観念でありたいと思います。

●ルカ12章の文脈は、ルカ共同体が置かれていた厳しい現実を反映しています。もちろん経済的危機も常に伴っていたでしょう。それでも生かされ、養われ、満たされる。「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」。そう信じて歩んだ共同体の姿に、今日の教会も励まされています。

# 神の前に豊かに

聖書 ルカによる福音書12章13～21節

暗唱聖句 神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。1ペトロ4：10

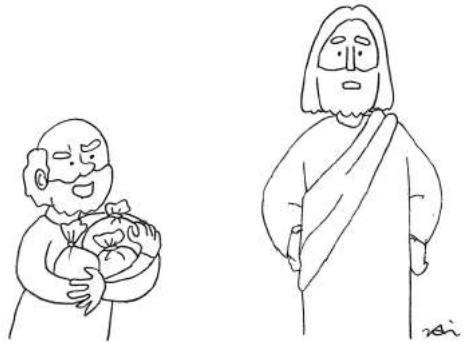
47課

2月19日

「先生。私にも遺産を分けるように、兄さんに言ってください!」。不意に誰かが言い出しました。皆がイエスさまのお話聞き入っている間も、この人は遺産のことで頭がいっぱいだったのです。イエスさまはその人に「誰がわたしを裁判官や遺産分配人にしたのですか」とだけ言うと、皆に向かって話し始めました。「どんな貪欲にも気をつけなさい。貪欲は人の心をすっかり盗んでしまう。いいですか。いくら有り余るほど持っていたても、人の命はお金や物でどうこうできるものではない」。

そしてこんなたとえ話をされました。「ある金持ちの畑が豊作だった。ところが金持ちは喜ぶのも束の間、すぐに案じ始める。『どうしよう。全部の倉を使っても入りきらない』。自問自答する金持ち。『そうだ!今あるのは全部取り壊して、もっと大きい倉をバンバン建てよう。そこに収穫も財産も一切合切集めて、俺自身にこう言うのさ。『見ろよ。お前はどの先何年分もの蓄えを手に入れたぞ。さあ、のんびり休んで食べたり飲んだりいっぱい楽しめ!』ってな。ワッハッハ』。しかし神は言われた。『愚かな者よ。今夜お前の命は取り上げられる。お前が自分のために用意した蓄えは、いったい誰のものになるのか』。イエスさまは続けます。「いくら自分のために宝を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ」。

人々はギョッとしました。「財産がいく



らあっても命を取られたらおしまいだよ。『じゃあ、どうしたら安心できるんだ』。

弟子たちは考えます。「貪欲ってなんだろう。あの金持ちの何が愚かだったの?」。『自分のために一人で考え、喜んで、その心に自分しかいないことかな?』。「神の前に豊かになるってどういうことだろう」。『でもやっぱり、お金がないと心配だよ』。するとイエスさまが言われます。「あなたたちの心はどこにあるのか。何を頼りに生きているのか。命を生かしておられるのはいったい誰だ。神は必要なものをすべて与えてくださっている。そもそも人が手にしているものはすべて神のもの。だから恵みを皆で分かち合いなさい。そこにこそ神の国はある」。

しばらく思い巡らす弟子たち。「そういえばあの時、パン五つと魚二匹ぽちしかなかったけど、イエスさまに差し出してよかったな。『うん。皆で腹いっぱい食べて、最高に美味かったね!』。イエスさまが分けてくれたあの豊かな豊かな食事の喜びが、弟子たちの心に甦よみがえってくるのでした。

# 神の前に豊かに

青少年科



聖書

ルカによる福音書12章13～21節

暗唱  
聖句

神のさまざまな恵みの善い管理者として、  
その賜物を生かして互いに仕えなさい。1ペトロ4:10

## 聖書から…

遺産相続のことでイエスさまに相談してきた人への応答として、たとえ話をされました。ある金持ちの畑が豊作だった時に、その人は倉を大きく建て直して、そこに穀物や財産をみなしまい安心していました。でも神さまは「愚か者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意したものは一体、誰のものになるのか」といわれました。

「聖書の学び」を見てみると、このたとえ話が、幾つかの大きなテーマをもったエピソードの後に置かれていることがわかります。「神の養いがある」(12:22～34)、「時を見分け、できることを懸命になすことの勧め」(12:54～59)などです。

この「ルカによる福音書」のテーマのひとつは、神さまがすべての人に必要な物やお金、賜物を、地上にいる私たちにすでに託して下さっているということです。その一つひとつを託された私たちが、祈りつつ、また出会い、相談しながら、「自分を恵みの最後の受取人にしない」(「聖書の学び」参照)という信仰の姿勢の中で生きるとき、喜びと豊かさが更に広がっていきます。

## 分かち合おう

- ルカによる福音書12章24節に「<sup>からす</sup>鳥のことを考えてみなさい」から始まるイエスさまの言葉があります。イエスさまに遺産のことで相談をしたこの人は、他の人とくらべて裕福でした。イエスさまは、たとえ話をする中で、財産が一番大切なことではなく、生かされているということが一番大事なこと。そしてそれは神さまのおゆるしがなければできないと教えます。今、この時に、神さまからの「預かりもの」であるこの命、賜物やお金で、私たちが既にしている神さまへの応答についてを分かち合ってみましょう。

- イエスさまが5つのパンと2ひきの魚を5千人の人たちに、祈りをもってわかちあった箇所があります。もしイエスさまが差し出されたパンと魚を一人で食べきってしまっていたら…。私たちが日々与えられている恵みの最後の受取人にならずに、さらに分かち合ってゆく中で、神さまが豊かに働かれます。

同じ様に、誰かが困っている時、私たちも、助けられてここまで来たことを思い起こすことができるでしょうか。私たちは、例外なく何も持たずに生まれてきます。私は生まれてすぐ川崎病を患い、カテーテル手術を受けました。若い牧師家族の赤ちゃんが大変だと同じ連合の多くの方々が祈り、献金を届けてくださり、今も私は生かされています。祈られた、助けられたという経験を分かち合ってみましょう。

47課

2月19日

# 神の前に豊かに

聖書

ルカによる福音書12章13～21節

暗唱  
聖句

神のさまざまな恵みの善い管理者として、  
その賜物を生かして互いに仕えなさい。1ペトロ4:10

## 聖書から…

イエスさまは、村から村へと巡り歩いて、困っている人たちに寄り添われたお方でした。でも、今日の箇所、遺された財産の分配で兄弟とうまくいかず、困り果ててやって来た群衆の一人に対しては、すこし冷たくも感じられるような言葉を返しています「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」(12:14)。それはたぶん、イエスさまご自身が、この時は「貪欲にも注意を払い、用心」(12:15)なされたからではないかと思うのです。財産の分け前のことで困り果てイエスさまのところに行って来たその人は、まるで「命の危機」が訪れたかのようにひどく困り果てていたのでしょう。

そこで、イエスさまは言われました。「人の命は財産によってどうすることもできない」(12:15)のだと。それは、たとえどんなに大きな倉を建てて、多くの穀物と財産を蓄えたとしても同じことです。つまり、言いかえるならばイエスさまの言葉は、「たとえ財産を蓄えたとしても、また逆にたとえ遺産の分け前が充分にもらえなかったとしても、あなたの命は財産の有無によって脅かされはしない」と伝えられたのではないのでしょうか。冷たくも感じられたイエスさまの言葉は、本当は命の根源的な保証を宣言しておられたのではないのかと私には響きます。

私たちは、命の保証を「神の前に豊かに」見出して歩む者でありたいと思います。

## 活動①

### 「お宝はなに？」

- ①クラスのメンバー同士で、自分の持ち物の中で一番大切にしているお宝を一つだけ発表してみましょう(例：ぬいぐるみ、好きな絵本や童話、ゲーム機など)。
- ②次に、もしそのお宝が無くなってしまったらどうなるか、考えてみましょう。話し合いの中で、命こそかけがえのない宝であることが分かち合われたなら幸いです。

## 活動②

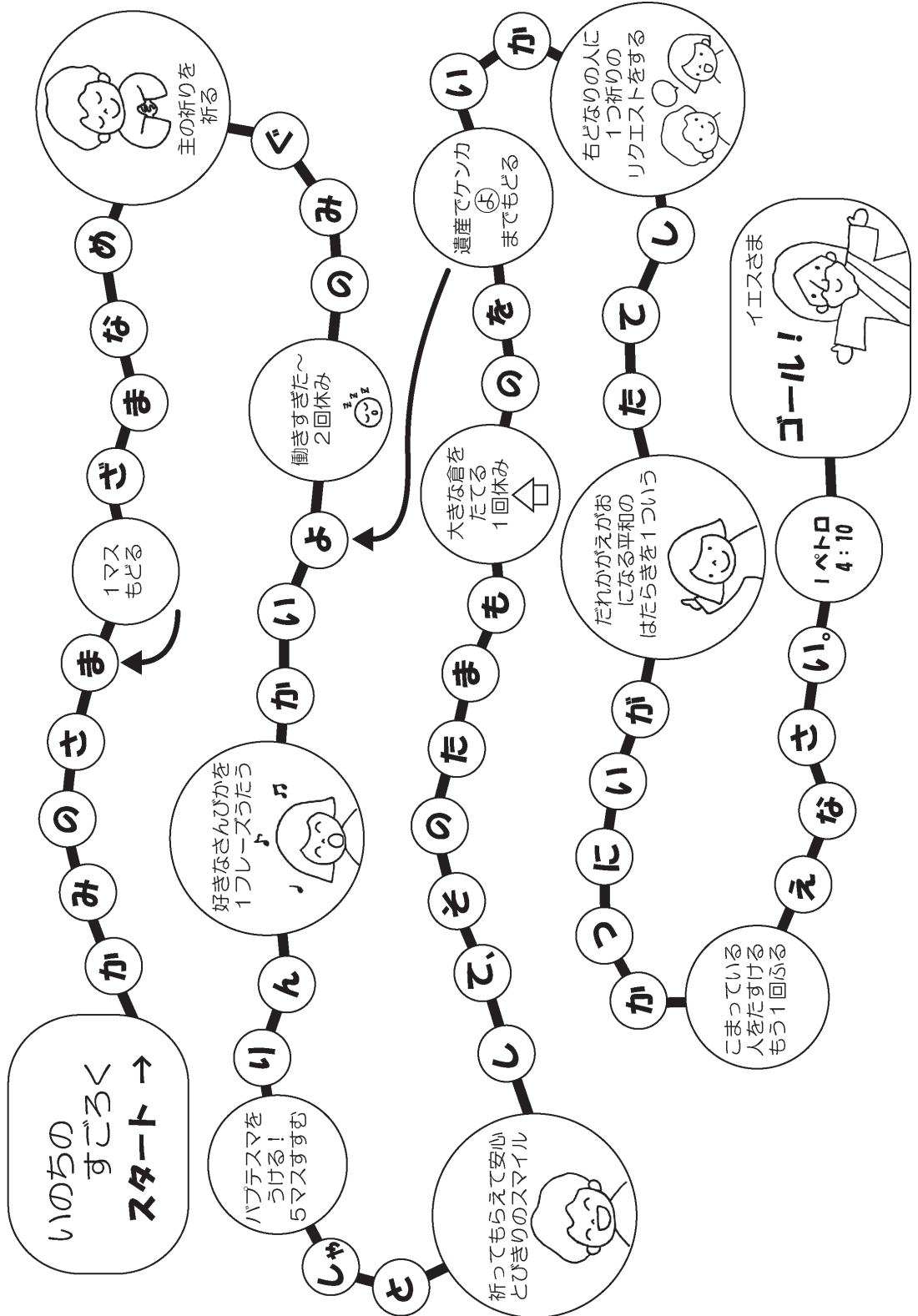
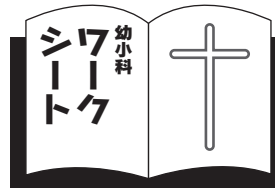
### ワークシート

### 「いのちのすごろく」

●準備●さいころ、各自のコマ

- ①じゃんけんでさいころをふる順番を決めます。
- ②順番にさいころをふって、出た目だけ進みゴールを目指します。
- ③止まったマス目の文字を読みましょう(読むのを忘れたときは前いたマスへ逆戻りとなります)。
- ④おおきなマスにとまったら、書いてある通りにしましょう。
- ⑤最後に、すごろくに書いてある指示以外の文字を最初から読んでみましょう。今日の暗唱聖句です。聖書箇所と共に覚えましょう。





## 喜び三部作

15章の譬え話群は、無くしたものを諦めずに見い出して喜ぶ「喜び三部作」です。見失った羊の話は「迷い出た羊の話」としてマタイ福音書に並行記事がありますが、ルカは羊の話に続いて、「無くした銀貨の話」や「家出してしまった息子の話」を並べることで、大切なものを失った悲しみの深さと、それゆえにそれを見い出し、取り戻した時の喜びの大きさを伝えています。異なる事例を三つも重ねて、神の想い、神の喜びに目を向けさせようとしています。

## 失うな! 失われるな!

47課では「命や恵みをどう受け取るか」というテーマで譬え話を読みましたが、あの「愚かさ」の中には、自分で自分を保持し、祝福しようとする高慢も含まれています。それは、イエスの目から見れば「悔い改める必要のない人間」の側に立って他人を見下しているファリサイ派の人々や律法学者たちの高慢とも通じます。

この「喜び三部作」は、彼らから「おまえは、徴税人や罪人たちと一緒に食事までしていてけしからん」と不快感をぶつけられ断罪されたことを受けて語られた譬え話です。イエスは常々、「罪人」とか「反ユダヤ的」と呼ばれて宗教的にも社会的にも排除されてきた人たちと向き合い、繋がり、交わって来ました。そして、それらの人々が「罪人」と呼ばれ、失われかけていることに怒りと悲しみ

を抱いておられました。「失ったもの」を「羊」「銀貨」「息子」に譬えてはいますが、事は人間の話です。「その人」を透明な存在にしている社会、「その人」を見失っている社会、「その人」を価値なき存在としてみよう社会をこそ、イエスはむしろ問うています。「その人」こそが神の目に尊く、また「掛け替えのない」無二の存在なのだ。神は「その人」を諦めない。追いかけて、見い出すまで探し、また待ち続け、その手に抱いて喜ばれるのだ。神のこの想い、神の喜びを見失うな! とイエスは語るのです。イエスは、その神の想いを地上の食卓に現しました。「食卓を囲む」という、相手を全面的に受け入れている徴しるしの場を、「その人」たちと一緒につくったのです。三つの譬え話が指しているものは、この「食卓の意味と喜び」そのものなのです。

## 「99人」はどこにもいない

「悔い改める必要のない99人の正しい人」(15：7)は、岩波訳では「改心する必要のない99人の義人たち」と訳され、本田哲郎訳では「低みからの見直しの必要を感じていない99人のまっとうな人たち」と訳されています。この譬えが語られた経緯を考えれば明らかですが、おおよそ悔い改め(方向転換)などする必要もないと自惚れている人たちの中にこそ、イエスは「罪」(神の想いの的をはずすこと)を見ていると思います。それに、そもそも「悔い改める必要のない人」など、実はどこにもいないのです。

15章の譬え話を読むとき、「失われると

はどのような状態か」とか「家出をすることとは」などと人間の「離反」や「放蕩」の考察に深入りし、その上で「悔い改める」ことの大切さを強調してしまうことがあります。この譬えの主意はそのようなところにはありません。

神はあなたを求めている。神はあなたを探す方。そして神はあなたと繋がれたならば、神ご自身が大喜びして祝宴を開かれるような方なのだ、と、まさしく「福音」を告げているのです。

## 「その一人」から

今回も、この福音書を読んでいた「ルカ共同体」は、この譬え話（群）から何を聴き取っていたかを想像したいと思います。ユダヤ的な背景と無関係な人々、「異邦人」世界を生きる多様で多彩な人々、それも、主には経済的・政治的に周縁におかれた庶民たちとの

準備のための聖書日課			
20日	㊦	ルカ4:16~21	イザヤの言葉とイエス
21日	㊦	ルカ5:27~32	わたしが来たのは
22日	㊦	ルカ8:42b~48	イエスの服に触れた女
23日	㊦	ルカ19:1~10	見いだされたザアカイ
24日	㊦	使徒言行録 13:44~52	異邦人たちへ
25日	㊦	ルカ15:18~24	待ち続ける父

交わりや、性別や身分を超えた繋がりへと広がっていく文脈の中に共同体は置かれていました。一人を見いだして喜ぶ神のまなざしには、なに一つボーダーは無い。「その福音」の宣教を共同体は確認し合ったはずです。私たちも、そこを聴き取りたいと思います。



● 著者ルカは、『使徒言行録』で、福音が異邦人世界に広がっていく様子を

描いています。特にパウロが、無割礼の人々に対して「そのままが良い」と伝道したこと、しかし、その大胆なアプローチが偏狭なユダヤ主義者たちの反感を買って、命を狙われ続けたことを報告しています。ここに初代教会が新たなステージを迎える際に抱えていた葛藤や、それまでの思考の枠組みを乗り越えようとする

努力を感じます。これまでの枠組みや価値観を問われ直した経験があれば、分かち合ってみましょう。

● それゆえに、「罪人」とはそもそも誰のことなのか。「罪」とは何のことなのか。「見失われた人とは誰なのか」「見失ってしまったのは誰なのか」を初代教会は問われていたのだと。時代を生きる教会の宣教は、この問いと共に生きるものなのだと思います。

# 見つけだすまで

聖書

ルカによる福音書15章1～10節

暗唱  
聖句

一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。  
ルカ 15：10

48課

2月26日

今日もイエスさまのもとには、あちこちから大勢の人が集まっています。農夫や漁師、病気の人や元気な人、それにファリサイ派や聖書の先生たち。老若男女いろいろな人がイエスさまの教えを聞いています。

この日は、みんなから「罪人」と言われている人たちや、徴税人もやって来ました。徴税人や罪人たちは、端っこの方の貧しい人や異邦人たちの後ろに、そうっと立ちました。すると、ファリサイ派や聖書の先生たちが、ぶつぶつ呟き始めました。「イエスは、罪人たちと仲良くして、食事まで一緒にしているようだ。」「汚らわしいな!」。先生たちは、自分は罪人ではなく、正しい人間だと思っているようです。

そこで、イエスさまはこんなたとえ話を始めました。「羊を百匹飼っている人が、一匹の羊を見失ってしまったらどうするだろうか。九十九匹を野原に残してでも、その一匹を見つけ出すまで探し回るはずだ。そして見つけ出したら、大喜びしてその羊を背負って帰るだろう。それから、友だちや近所の人たちに『いなくなっていた羊を見つけたんだ!一緒に喜んでくれ!』と言って、大宴会を開くにちがいない」。

すると、誰かが「イエスさま、そんな無駄をする羊飼いはいませんよ」と言いました。「確かにそうだな。しかし、この羊飼いが、救い主だったらどうだ? 主にとって、一匹一匹がかけがえのない大切な宝物。だから、主は、いなくなった一匹を見つけ



出すまで、絶対に諦めないで探してください。自分の命に代えてでもだ」。イエスさまの言葉は、人々の心に力強く響きました。「主はそれほどまでに、俺たちのことを愛しておられるのか」。端っこで聞いていた貧しい人や異邦人たちも、うれしくて涙がこぼれます。徴税人や罪人たちは、「これからは、イエスさまに従っていきます」と言って、泣き出しました。

ところが、「自分は正しい」と思っている人たちは、一緒に喜ぶことができません。「たかが一匹のためだけに、馬鹿らしい!それで九十九匹を失ったら大損だ」。すると、イエスさまは、「悔い改める必要のない九十九人の正しい人よりも、悔い改める一人の罪人にこそ、天では大きな喜びがある」ときっぱり言いました。そして、天を仰いでから、徴税人や罪人たちに向かって言いました。「よく来たね。私の父は大喜びでもう大宴会を始めている。さあ、わたしたちもお祝いしよう!」。イエスさまに従う弟子たちも、飛び上がって一緒に喜びました。



# 見つけたすまで

聖書

ルカによる福音書15章1～10節

暗唱  
聖句

一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。  
ルカ 15：10

## 聖書から…

人々から嫌な目で見られ、「そこにいないかのように」扱われていた徴税人や「罪人」もイエスさまの話を聞こうと近寄ってきました。すると、ファリサイ派の人や律法学者たちは不平を言いました。イエスさまは一匹の迷子になった羊を見つけたのを喜ぶ羊飼いの様に、一人の罪人が悔い改めれば大きな喜びが天にあり、神の天使たちの間に喜びがあると教えられました。

ファリサイ派の人々や律法学者がここで「罪人」と呼んでいる人たちは、実際に犯罪を犯したのではなく、ユダヤ教の律法を守ることが難しいことが誰の目にも明確であった人たちのことです。ファリサイ派の人々や律法学者たちは、罪を犯しても、それを償うための犠牲の捧げ物をしましたが、それができなかった人たちのことがここでは「罪人」と呼ばれています。

イエスさまは一匹の迷える羊と一枚の銀貨のお話をされます。イエスさまにとっての本当の「罪」とは、どういった状態を指すことだったのでしょか。

## 分かち合おう

- ファリサイ派の人々や律法学者たちは、頻りにイエスさまの間違いを指摘していました。神さまは、取り締まりをする人を求め

ておられません。神さまの愛と慈しみを、言葉を越えて表す人たちを常に必要としておられるのではないのでしょうか。

ある人が初めて教会に行きました。皆さん挨拶はしていただきますが、それぞれ忙しいそうで、側で時間をとって話しかけてくれる人はおらず、早く帰りたいと感じたそうです。教会は、神さまが招いておられる方を心からお迎えしているのでしょうか？

- 「土の器」というプレイズソングを知っていますか？ 田中瑠美子（南光台キリスト教会員）さんが作った曲です。「土の器 欠けだらけのわたし その欠けからあなた（神さま）の光がこぼれ輝く…こんなわたしでさえも主はそのままで愛してくださる…」ポロポロに傷つき欠けのある器のような気持ちの時に神さまの光が注がれる、そんな経験がありますか？

3.11の直後、遠野ボランティアセンターでKさんが、「これから仮設住宅を訪ねます。言葉ではなく、表情と姿勢、そのすべてを使って神さまからその方々への愛を表してください」と、宿題を出されました。神さまからの愛を惜しむことなく注がれたKさんは、行く先々の避難所でハグで迎えられていました。私たちにも、神さまから受けた沢山の愛を丁寧に少しずつでも、届けてゆくことができるのかもしれない。

48  
課

2月  
26日

# 見つけだすまで

聖書 ルカによる福音書15章1～10節

暗唱 聖句 一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。  
ルカ 15：10

## 聖書から…

「見失った羊」のたとえば、羊に対する見方が問われています。イエスさまが言われた羊とは、失われてしまったら、ほかの何ものとも代えることができないようなもの。名前があり、特別で、ただ一つのいのちのことです。上も下も、優も劣も、聖も俗もなく、みな等しく尊い一人の人間のことで

イエスさまは「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて」（15：4）と語りはじめます。たとえば、羊飼いが多数派を優先する人だったとします。一匹を見失ったならその羊飼いは、たぶん九十九匹と一匹のいのちを天秤にかけ、九十九匹を選び、一匹を捜しはしないでしょう。あるいは、羊飼いが百という数字を大事にする人だったとします。一匹を見失ったならその羊飼いは、見失った一匹を捜すより、新しい小羊を一匹産ませて百匹とし満足するでしょう。しかし、私たちの羊飼いであるイエスさまは、だれ一人として見捨てず、一匹を捜すお方なのです。

このたとえばが語られた時、イエスさまは「徴税人や罪人」（15：1）たちと一緒にいました。イエスさまにとっては一人ひとりがかけがえのない尊い存在でした。でも、イエスさまに対して不平をいった（15：2）ファリサイ派や律法学者たちにとっては、諦めた一匹の羊たちだったようです。

天とは、見失った一匹が見つかったことを大いに喜ぶところです。そして、天とは

「天の大きな喜びを一緒に味わいたい」と、向きを変えるひとりが起こされることをも喜ぶところなのです。教会もそんな人たちの集う場所でしょう！

## 活動①

### 「宝さがしゲーム」

リーダーはメンバーの数より一つ多く宝（飴など）を準備し、部屋のあちこちに隠します。メンバーは宝を一人ひとつだけ探します。全員が見つめることができたなら、最後の一つを全員で探しましょう。最後の一つまで探すイエスさまの優しさを分かち合いましょう。

## 活動②

### ワークシート

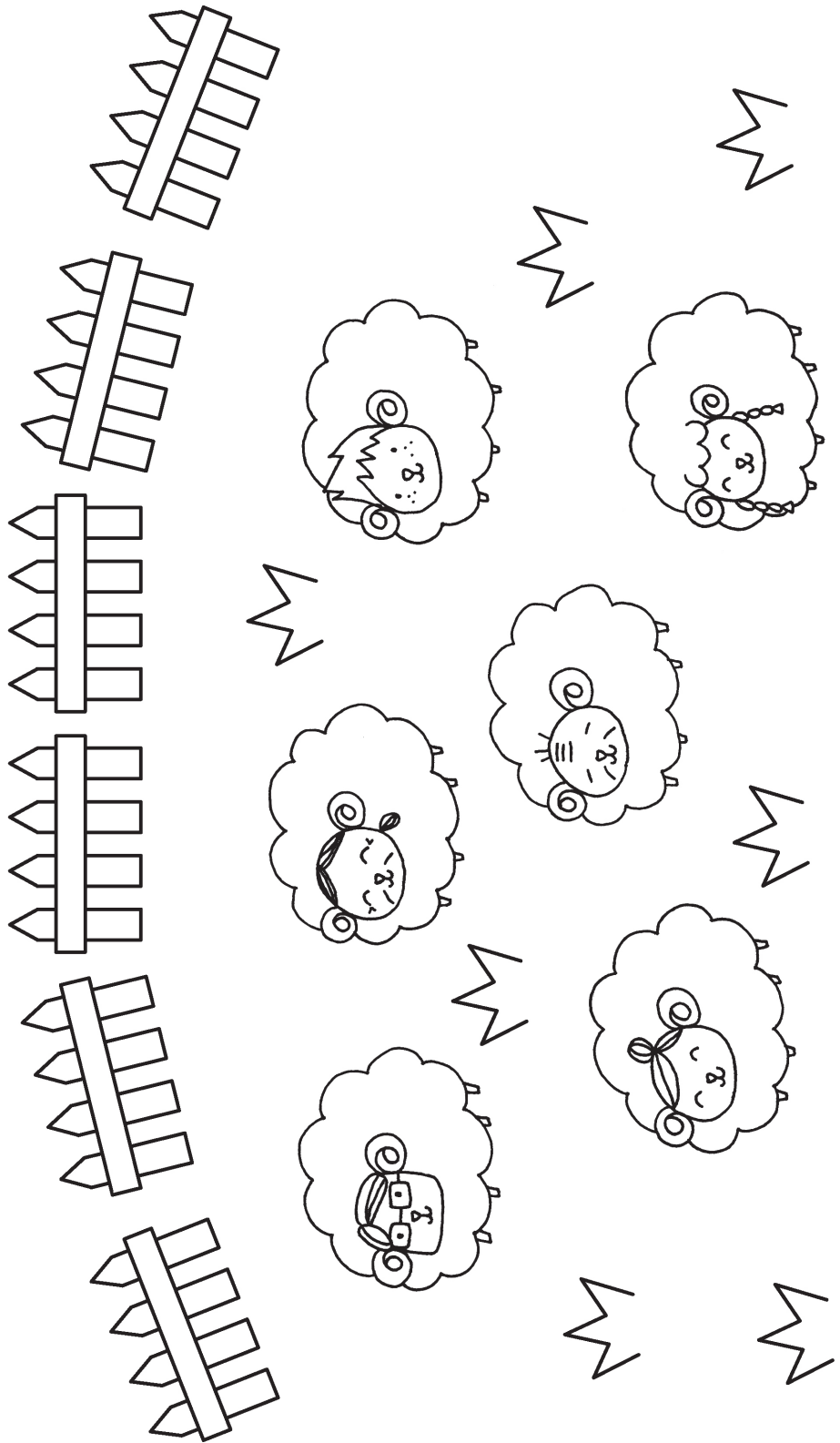
### 「羊分け」

●準備●ワークシート人数分、色鉛筆、はさみ

①ワークシートの絵に色を塗って、はさみで切り取ります。

②リーダーの言うお題に沿って、それぞれ自分の身の回りの人をイメージしながら羊分けをしてみましょう（例、料理する羊、花が好きな羊、運動が好きな羊、教会に行く羊など）。

答えは、バラバラでいいのです。ステレオタイプの先入観で人を見るのではなく、互いの違いを尊び、一人ひとりが大切な存在であることを確かめたいですね。イエスさまは、一人も諦めることなく捜し出してくださいませ。



## イエスの祈りの「熱心」

「やめめと裁判官」、「ファリサイ派の人と徴税人」の譬えは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、イエスが弟子たちに語り聞かせた譬えです。「祈りの熱心さ」を考えさせられ、倒錯した祈りの姿について自問させられる箇所でもあります。

ところで、福音書はイエスご自身が熱心に祈る人であったことを記しています。独りきりになって祈ることもしばしばでした。しかしイエスの祈りは、ご自身の願いを神に届けようとする熱心さではなく、むしろ激闘のような祈りを通して「神のみ心を自分の人生に落とし込み、受け止める」ためのものでした。二つの譬えの少し後には、イエスが自らの受難と処刑を予告する場面が続きますから、まさしく、祈りを通して、イエスご自身が神のみ心・神の業を自分自身の「現在」に迎え入れる覚悟を決めていた時なのです。ルカは、こうした編集を通して、自分の暗い現実から神に願いを届ける「熱心」な祈りではなく、熱心に祈ることを通して神のみ心とみ業とを、暗闇の現実の中に迎えて生きる生き方を呼びかけています。読者たちと共に、「今の、この時代」を懸命に生きようとしているのです。イエスの覚悟を想起し、イエスの招きを思い、生きることと祈ることを深く連結させていくのです。

## 「不正な裁判官」のリアリズム

神を畏れず人を人とも思わない放埒で傍若無人な人物が裁判官の地位についている。これこそが、ルカとその読者たちが生きた時代のリアルな現実でした。剣と槍が言葉を封殺し、不正と賄賂が横行し、訴えは門前払いされ、真実が葬られる。そしてローマの支配に隷従しない者は容赦なく弾圧される。そうした暗黒の中に共同体のメンバーたちは生きていました。ですから、イエスの譬えは現実的でした。他方、「やめめ」は法的・社会的保護から漏れた存在でしたから、この暗闇に切り込む術は持ち合わせていません。彼女の武器は叫び続けること、門をたたき続けることでした。諦めず、うるさいと嫌がられようがしつこく食い下がることでした。裁かれるべきは「相手」であり、この不義の下で「生きることにはできない」と叫び、「服従できません」と訴えることでした。これもまた、メンバーたちにとってリアルな自己理解であり、自分たちにできる精一杯の事として重なったのではないのでしょうか。

## 「その日」を祈る

しかし、「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」（17：21）とイエスが語られたように、この虐げられ小さくされた「わたしたち」のただ中にイエスはおられるが故に、神の国を「既に」いただいている者としての自由さが信じる者たちにはあるのです。それは、不思議な作用をもたらして、時には硬直



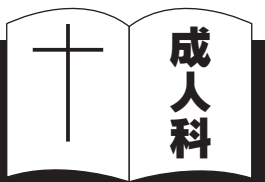
した現実を打破していく力となる。だから諦めないで、この世に服従しないで生きていくのです。

ところで、お気づきのように、この警えの「裁判官」と「神」とは決して類比関係にはありません。むしろ、「まして神は」(18:7)と記されているように対比関係にあります。地上の暗闇でさえ粘り強い作用によって穴が空き、光が射すことがある。まして神は、自分に向かって昼も夜も叫び求めている人々のために「その日」を忘れてなどはおられないし、神の義は天に確立しているのです。だからこそ、『その日』に支えられて『<sup>いま</sup>現在』を生きよと、「時代を生きる人々」を励ましています。

ただし、「その日」はあくまでも「現在」ではありませんし、「現在」は決してまだ「その日」ではありません。人間はどうしても「現在」に捕らわれますから、「現在から」神を捉えようとし、「現在について」神に祈ろう

準備のための聖書日課			
27日	㊦	ルカ6:12~16	夜通し祈るイエス
28日	㊧	ルカ9:43b~45	自分の死を予告する
1日	㊨	ルカ11:1~13	祈るときには
2日	㊩	ルカ12:22~34	神の国を求めなさい
3日	㊪	ルカ17:20~37	神の国が来る
4日	㊫	ルカ22:39~46	オリーブ山で祈るイエス

としてしまいます。「現在への」の熱心な祈りが捧げられます。しかし、その日。「その日」のことを求めて祈り、生きていた人が果たして地上にいるだろうか。これは、今日もなお、時代を生きる教会に対する重い問いかけではないでしょうか。



成人科

● 「警え話」をどこに配列していくか。ここに編集者の狙いがありますから、文脈がとても大切です。この警えは「神の国はいつ来るのか」という問答の直後に置かれ、「ファリサイ派の人と徴税人の逆転の警え」の前に置かれています。実に、「その日、その時」という終末の時、カイロスの時を意識しています。「祈り」とは、神のカイロスの時と結びつく道であることを教えられます。

● 私たちの世界の現実も、まさに傍若無人で理不尽な力が猛威を振るう世界です。この間、直面してきたミャンマー国軍の軍事クーデターも、ロシアのウクライナ侵攻もそうです。その暗黒のただ中に響いている叫びや、解放の希望を求めてささげられている祈りに、教会はつながってたいと思います。

# 気を落とさずに

聖書

ルカによる福音書18章1～8節

暗唱  
聖句

神は、昼も夜も叫び求めている…

彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。ルカ 18：7

49  
課

3月5日

イエスさまは、弟子たちにこんなたとえ話をされました。「ある町に裁判官がいた。ある日のこと。『ドンドン！ 裁判官さま！』。ドアを叩くのは貧しい寡婦。『どうかあの人を正しく裁いて私を守ってください。あの人は、私に夫も身寄りもないのをいいことに…』と泣き崩れた。しかし、裁判官はみすばらしい寡婦を見るなり眉をひそめ、話を聞こうともせず追い返した。『賄賂もないくせに図々しい！ あの女がどうなろうと知ったことか。私は神を畏れず人を人とも思わない男。頼りになるのは金と権力。正しく生きてなんの得があろうか』。

一方、寡婦は追い返されても、追い返されても諦めない。『ドンドン！ 裁判官さまー！ どうか正しいお裁きを！ どうか私を守ってください！』。次の日もそのまた次の日も寡婦はひたすらドアを叩き続ける。『ドンドン！ 裁判官さまー！ ドンドン！』。これにはさすがの裁判官もお手上げ。『あ～、うるさい！ なんてしつこい女なんだ。仕方がない。あの女のために裁判をしてやろう。そうしなければ私の方がまいてしまう。あの女はどんなことがあっても諦めないだろうから』。

「寡婦の粘り勝ち！ スカッとする」。手を叩いて喜ぶ弟子たち。「神に代わって公平な裁きをするのが裁判官の仕事だろ。寡婦や孤児みたいな弱い立場の人を守らないでどうするのさ！」「ご多分に洩れず、この裁判官は最悪だ」。するとイエスさまが話



し始めます。「これほど悪い裁判官でも寡婦のしつこさには負けました。しかし、あなたたちが祈り求めている相手は、外でもない神です。寝ずの番をして私たちを守ってくださる神ではありませんか。その神が、ご自身を信じて昼も夜も祈り続ける人たちのために裁きをしないで、いつまでも放って置かれるのでしょうか」。首を横にふる弟子たち。「いいですか。神はすぐに裁いてくださいます。だから気を落とさずに祈り続けなさい。どんな時も神を信じて祈るのです」。

弟子たちはまた祈る力をもらいました。「『すぐに』っていつかな？」「さあね。「それにしても、イエスさまはいつも一人で祈っておられる。耳を澄ますようにしてさ」。「最近は特に長いね。時々とても苦しそう」。「何をそんなに祈っているんだろう」。

イエスさまはその夜も祈ります。「父よ、来るべきその日、果たしてあなたを信じている者はあるでしょうか。父よ、どうかこの後もずっと彼らを導き続けてください」。

# 気を落とさずに



聖書

ルカによる福音書18章1～8節

暗唱  
聖句

神は、昼も夜も叫び求めている…  
彼らをいつまでもほうっておかれることがあるのか。ルカ 18：7

## 聖書から…

イエスさまは気を落とさずに絶えず祈らなければならぬことを教えるためにたとえ話をされました。ある町の裁判官に、ひとりの女性が「どうぞ相手を裁き、私を守って」と訴え続けていました。裁判官は、うるさくて迷惑なので裁判をしてやろうと考えました。イエスさまは、こんな裁判官でも繰り返し訴えてくる人に対応するのであれば、「まして神は…裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあるのか」と、言われました。

ゲッセマネで、血のような汗を流しながら祈る姿が印象的なイエスさま。気を落とさずに絶えず祈りなさいと教えられたイエスさまこそが、先の望みが最も見えづらい時に、率先して祈っておられたのでした。

「聖書の学び」によれば、「イエスの祈りは、ご自身の願いを神に届けようとする熱心さでなく、むしろ激闘のような祈りを通して『神のみ心を自分の人生に落とし込み、受け止める』ためのもの」だったとあります。イエスさまの祈りの根本には、いつも「よい」お方である神さまが、子である私たちに「よい」ものをくださるという信頼があります。神さまにとって「よい」ものが、私たちにとっては「最善」には見えない時があるのでしょうか。

## 分かち合おう

- 私たちは、どうして祈るのでしょうか。また何のために祈るのでしょうか。イエスさまが「祈りなさい」と命じられた理由は何でしょうか。

これだけは弟子たちにわかって欲しいと、たとえ話さえ交えながら教えられたのが、気を落とさずに祈ることでした。それは、どんな状況に置かれたとしても、これですべてが終わったと決めつけないで、その只中にあっても祈り続けることでしょうか。私たちは、「昼も夜も叫び求めている」人のためにどのように祈ることができるでしょうか。今週、特におぼえて祈りたいこと、祈って欲しいことをひとつずつ分かち合いましょう。

- エクアドルに宣教師として遣わされたエリザベス・エリオットは、夫が先住民たちに惨殺された事件の後、加害者のために祈っていたところ、世界中の人たちから「あなたに慰めがあるように祈っています」という便りが殺到し、自分たちこそが祈られ支えられていたと気づいたそうです。（“THROUGH GATES OF SPLENDOUR” Elizabeth Elliot 1956 Hodder & Stoughton Ltd.）私たちは、手をさしのべられても、助けてもらうことに抵抗があるかもしれません。相手に黙ったままで、3カ月間毎日その人のために祈り続けたという人がいました。祈ってもらった経験を分かち合いましょう。

# 気を落とさずに

聖書

ルカによる福音書18章1～8節

暗唱  
聖句

神は、昼も夜も叫び求めている…

彼らをいつまでもほうっておかれることがあるか。ルカ 18：7

## 聖書から…

「やもめと裁判官」のたとえば、イエスさまが弟子たちに「気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるため」（18：1）に語られました。

ある町に、神を畏れず人を人とも思わない不正な裁判官がいました。裁判官とは、その町の善と悪を判断する重要な人です。裁判官が「正しい」と言ったことは、どんなことでもその町の正義となり、「悪い」と言ったことは、どんなことでもその町では悪となるのです。ですから、不正な裁判官がいる町では、悪人が正当化され、正しい人が不当に踏みつけられるという捻じれが起こります。

たとえばの中の「一人のやもめ」は、まさに不当に踏みつけられていた人であり、「相手をさばいて、わたしを守ってください」と叫び続けました。イエスさまは、やもめの叫びを「祈り」と言い、気を落とさずに声を上げ続けることを「信仰」と言います。

私たちの世界にも、善悪が捻じ曲げられ、不当に踏みつけられている人たちがいます。その叫びは私たちの祈りです。そして、いまも生きて働くまことの裁判官である神さまに向かって、気を落とさずに絶えず正義を祈ることは私たちの信仰です。「神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあるか。言っておくが、神は速やかに裁いてくださる」（18：7～8）。

## 活動①

### 「きれいに分けて」

#### ●準備●新聞紙

二人一組で向かい、一人が紙を両手で引っばって構え、もう一人は人差し指で紙の中心をつつきます。真っ二つになったら成功です。予め、紙を半分に折り、筋をつけておくのがコツです。私たちも神を神とし、人を人と思う一本筋をもって、神さまの正義を祈り続けたいですね。

## 活動③

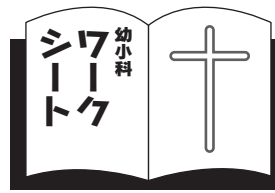
### ワークシート

### 「いっしょに祈ろう」

各自、身の回りのことに思いを馳せて、どんな祈りがあるか考えてみましょう。教会では、定期的に祈り会（祈祷会）が持たれています。決まった時間、決まった場所で祈りが続けられています。ワークシートに祈りのリクエストを書いて、私たちの声も祈ってもらいましょう。絵を描いたり、祈ってくれている方々への感謝を伝えるのも良いでしょう。

他にも普天間基地・野嵩ゲート前でゴスペルを歌う会（沖縄・毎週月曜日 18時～19時、Since2012年10月）やマンマーを覚える祈り会（オンライン・毎週金曜日 21時～21時40分、Since2021年2月12日）などで、祈りの声が上げ続けられています。





まして神は、<sup>かみ</sup>昼も<sup>ひる</sup>夜も<sup>よる</sup>叫び<sup>さけ</sup>求<sup>もと</sup>めている  
<sup>えら</sup>選ば<sup>ひと</sup>れた人たちのために<sup>さば</sup>裁き<sup>おこな</sup>を行わずに、  
<sup>かれ</sup>彼らをいつまでも<sup>ほう</sup>ほう<sup>て</sup>っておかれることがあるか。

(ルカ18:7)

# 主がお入り用なのです

聖書 ルカによる福音書19章28～40節

暗唱  
聖句 イエスはこうに話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。ルカ 19：28

## 「主のお入り用は」子ろば

ろばは貧しい人たちの動物で、農作業や運搬の折に、人々の慎ましい生計と共にありました。旅行者が利用する時のために乗用として村人たちに飼育されたりもしました。「持ち主たち」(19：33)とあるように、貧しい人々が共同で飼っている場合が多かったようです。ろばは身を寄せ合って生きる人々の労苦多き生活のしるしのようなでもあります。イエスは、エルサレムに入城するにあたり、そのようなろばの子を「お入り用」とされました。やがて、解放の王が「高ぶることなく、子ろばに乗ってくる」ことを預言したゼカリヤ書(9：9)を意識してのことでもあったでしょう。「主のお入り用」とされるものが、決して強いもの、立派なものではなく、むしろ取るに足らないものや、敵視さえしていた異邦人たちがこそが、自由に用いられて福音は世界に広がるのだ、という使徒言行録の主題の一つともつながっています。

## ルカの証言の特徴

子ろばの調達場面までは、ほぼマルコ福音書の記述に従っていますが、37節以降は独特の描き方を見せます。マルコとマタイ両福音書は、大勢の群衆が道に枝を敷き詰め、歓喜してイエスを迎えたように描きますが、ルカは弟子たちの行進としてシンプルに描きません。マルコ、マタイが記す賛歌の中に共通している「ホサナ」という表現や「ダビデ」の名の引用もありません。その代わりに、ルカは

「主の名によって来られる方、王に」と、「王」が加えられており、賛歌そのものはイエス誕生の際に天の軍勢が夜空に響かせた賛歌(2：14)と重なります。「真の平和の王が到来した。イエスこそがメシア。天の平和を地上にもたらせる真の王である。弟子たちの群れ(後の教会)は、この方を賛美しながら生きる」というルカの証言の特徴がここに表わされています。

## イエスの決意の道のり

9章51節で、イエスがエルサレムに向かう決意を固められて以降、彼の語る言葉も譬えも、「ご自身が取り去られる日」に向けられていると言えます。ベツレヘムからガリラヤへ、ガリラヤからエルサレムへ、エルサレムから全世界へと、ルカ文書には時間の流れと舞台の移り変わりのプロセスを見ることができます。エルサレムへの道のりは、十字架の場面でクライマックスを迎えますが、その道りにあって重要なことこそが「イエス自身の決意」でした。灯火は食卓の上に置かれなければならないことを「自らの使命」と決意したように(46課)、また熱心な祈りを通して、イエスご自身が神のみ心を自分の中に迎えようとしてきたように(49課)、イエスの決意がエルサレムへの道をここまで導いてきました。「エルサレム入城」は決して美しい宗教都市への入城ではなく、神への背信と欲望の都への入城でしたし、栄光と名声の場への入場ではなく、拒絶と苦難の場への入場でした。しかし、その「罪の場」(神と

人との関係が破れ、人と人との関係が歪められてしまった世界)の真ん中であって、神と人間との交わりの回復を成就する神のみ業のために、イエスの決意はこの日も固められ、子ろばの背中に身を委ねられたのです。「神のお入り用」としてのご自身の道を、彼は見ていたのです。

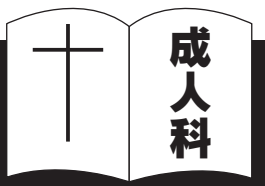
## 石が叫び出す

弟子たちの歓喜の言葉を、ファリサイ派の人々はたしなめます。しかし、イエスは断固として語ります。「言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫び出す」。

ルカ共同体が生きていたのは、イエスの名によって語ることを「黙らせよう」とする石垣に囲まれたような時代でした。しかし、「たとえ人を黙らせても石が叫ぶ」「人々を黙らせようとする力に向かって石は叫ぶのだ」。このことに堅く立ち、互いに励まし合ったの

準備のための聖書日課			
6日	㊦	ルカ9:21~27	苦難の予告
7日	㊧	ルカ9:51~55	エルサレムに向かう決意
8日	㊨	ルカ21:5~6	神殿の崩壊
9日	㊩	ルカ21:20~24	エルサレムの滅亡
10日	㊪	ゼカリヤ書9:9~10	ゼカリヤの預言
11日	㊫	マルコ11:1~11	マルコが記す入城

だと思えます。あの日、神殿の城壁のために組まれていた美しい巨大な石は、今は見る影もなく崩れ落ちています。しかし「道ばたの石ころ」のような自分たちは、今、イエスの名によって神を賛美し、証言をやめないで、確かに生きているのだと。



成人科

- 45 課で「イエスの涙」を見つめました。イエスの命はエルサレムが目標ではありませんでした。エルサレムは、人々が(弟子たちさえもが)考えていたような「頂点」でもありませんでした。むしろエルサレムによって葬られていく命にこそ、世界に広がる新しい生き方が生じるのではないのでしょうか。十字架と復活こそが新しい世界の中心となり、出発点となる。そこにルカの証言の核心があります。
- 人々を黙らせてきたエルサレムの力は、新しい時代にはその力を失うのです。教会は、そこに立脚して語り(宣教)します。もし、教会が時代の中で沈黙するなら、教会に対して、また教会に代わって石が叫び始めるでしょう。ルカは、そのような警告を含ませながら共同体の人々を勇気づけているのだと思います。この時代の中で、私たち教会が語っていくべきことは何でしょうか？

50 課

3月12日

# 主がお入り用なのです

聖書

ルカによる福音書19章28～40節

暗唱  
聖句

イエスはどのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。ルカ 19：28

50課

3月12日

エルサレムへ進むイエスさま。弟子や仲間たちも後に続きます。やっと隣町に近づいた時、イエスさまは二人の弟子に言いました。「向こうの村に行きなさい。そこにまだ誰も乗ったことのないろばの子がつかないである。それを解いて引いてきなさい。誰かが『なぜ解くのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい」。

二人は歩きながらブツブツ。「どうしてろばの子？」「見つかるかな？」「勝手に解いて大丈夫？」「…でも、イエスさまが言われたんだから。」「うん」。しばらく歩くと「いたっ！」。まだ誰も乗せたことがないろばの子です。二人は顔を見合わせると、勇気を出して綱を解き始めました。手が震えています。「なぜ解くのか」とろばの主人。ガクガク足まで震えてきました。「しゅ、主が…」。「え？ なんだって？」「…主がご入用なんです」。やっと言えました。するとどうでしょう！ 主人はすんなりろばを渡してくれました。「すごい！ イエスさまの言った通りだ！」「僕たち、イエスさまのお手伝いができたんだね！」。興奮で赤らんだ顔の二人は、ろばの綱をギュッと握ってイエスさまのもとへ急ぎました。

イエスさまがろばに跨ると、仲間たちは上着を脱いで道に敷きました。その上をえっちらおっちら、ろばが進みます。「ガンバレ、ろばの子！」。弟子たちの肩にも思わず力が入ります。えっちらおっちら。



まるで子ろばをかかえるように、その背に揺られるイエスさま。ふと皆の心に、これまでイエスさまがなされた神の国の出来事が次々とよみがえってきました。「この方こそ、私たちの王さま！ 子ろばが似合う、平和の王さま！」。皆うれしくなって大きな声で神を賛美し始めます。「主の名によって来られる王に祝福あれ！ 天には平和、いと高きところに栄光！」。それはイエスさま誕生の夜、天使たちが大合唱した、あの賛美でした。

しかし、町の人たちは「王は軍馬に跨るもの。子ろばとは情けない」と、奇妙な行進に眉を擡めます。「先生、弟子たちを叱ってください」。ファリサイ派の何人かが言いました。しかしイエスさまは、「この人たちが黙っても、石が叫び出す！」とピシャリ。「そうだ、黙ってなるものか！」。より力強くなる賛美。子ろばの上のイエスさまは黙ってただ前を見据えます。怒っているような、泣いているようなその瞳で。えっちらおっちら、子ろばは進む。イエスさま乗せて、いざエルサレム！



# 主がお入り用なのです

青少年科



聖書

ルカによる福音書19章28～40節

暗唱  
聖句

イエスはこうに話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。ルカ 19：28

## 聖書から…

イエスさまが先頭に立って歩かれ、弟子たちと一緒にエルサレムへの移動が再開です。エルサレムに近づいた時、イエスさまは弟子たちに、「向こうの村へ行き、子ろばをほめて引いて来なさい。もし『なぜ』と聞かれたら『主がお入り用なのです』と言いなさい」と命じられました。弟子たちは順調に子ろばを借りて来て、イエスさまの元に用意することができました。人々は自分の服を敷いてイエスさまを歓迎します。イエスさまがオリーブ山の下り坂にさしかかれた時、弟子の群れは声高らかに賛美し始めました。

イエスさまがエルサレムの城壁の中へと入って行かれる時に選ばれた動物は、戦争では役に立たず、逃げるにも早く走れず、人も乗せたことがないろばの子でした。

イエスさまはこの後、エルサレムで自分がかどのような目に遭うのか知っておられました。しかし、逃げることなく隠れることなくゆっくりと、ご自分もまた、神さまに用いられるのだという思いでエルサレムの坂をのぼって行かれました。

## 分かち合おう

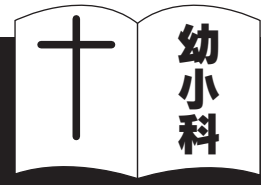
- 弟子たちが声高らかに賛美するのと対照的に、イエスさまは真剣な顔つきで子ろばに乗ってゆっくりと坂をのぼって行かれる印象です。ちょうど今は、灰の水曜日からイースター前日までの日曜日を除く40日間、受難節を過ごしています。その間、特に十字架を思い、自分の好きな食べ物を我慢して祈る人もいます。十字架にはどんなメッセージがあるのでしょうか。

この数カ月を振り返ってみましょう。今日の子ろばのように、良い意味で期待を裏切るかたちで、まるで台本に書かれていたかのように、「神さまがこの人を用いられた」と確信するような出来事はありましたか？

- 神さまが招かれる時に、イエスさまも子ろばも、その神さまの声に従いました。礼拝へと招かれるすべての人が、神さまに呼び集められ、仕える（礼拝する＝英語で service）人たちです。65年前に、小樽教会のひとりの高校生が、ある社会人一年生の方に「ちょっと、そこまで付き合ってください」と言って、教会の礼拝にお誘いしたそうです。誘われた方は、戸惑いつつも何となく教会に行けるのだと気づいて、うれしかったとお聞きしたことがあります。神さまが招いておられると、その方は確信されていたのでしょうか。

50課

3月12日



# 主がお入り用なのです

聖書

ルカによる福音書19章28～40節

暗唱  
聖句

イエスはどのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。ルカ 19：28

## 聖書から…

「イエスはどのように話してから…」(19：28) というのは、直前の「ムナ」のたとえ話をしてから、ということでしょう。だとすると、イエスさまは「神の国はすぐにも現れるものと思っていた」(19：11) 弟子たちに対して、王の位を受けるために「遠い国へ旅立」つこと(19：12)、そして「王の位を受けて帰って来る」(19：15) ことを話し、エルサレムへと進んで行かれたということになるでしょう。つまり弟子たち(教会)には、イエスさまの誕生によって平和の道が示されただけでなく(「地には平和」2：14)、イエスさまとの別れがあること、イエスさまがいない間に託されるものがあること、イエスさまが王として帰って来られることまで語られていたことになるでしょう。

すると、イエスさまが先頭に立ち、子ろばに乗って、エルサレムへと進まれた行進は、その時だけでおわる平和行進ではなく、その後の十字架による和解の出来事や、教会の時代、神の国の完成に至る壮大な歩みであることが見えてきます。

そして、イエスさまによって村へと遣わされ、子ろばを探しに行った弟子たちの姿も、まるでイエスさまがいない中で「『主がお入り用なのです』と言いなさい」(19：31) とのイエスさまの言葉に支えられ、導かれて歩いていったとき起こった不思議な出来事のようにも見えてきます。今とい

う時代の中で、教会で生きる私たちも、イエスさまの言葉に支えられ、導かれて、まことの平和のパレードに加わって歩んでいきたいと思います。

## 活動①

### 「パレードを歌おう」

『バプテスト・ユースソングブックII』(日本バプテスト連盟発行)のNo.22「パレード」を一緒に歌いましょう。子ろばに乗ったイエスさまは、先頭に立って平和の道を歩まれるまことの王です。歌いながら列を作って、パレードしても楽しいですね。

## 活動②

### ワークシート

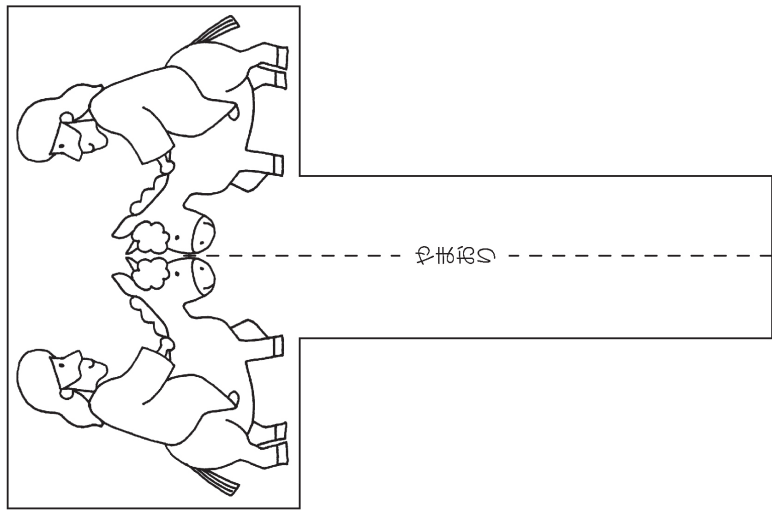
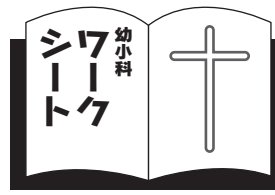
### 「子ろばに乗ったイエスさまの行進」

- ①ワークシートの絵に色を塗りましょう。
  - ②イエスさまの乗った子ろばをはさみで切り抜き、やまおりにしてのりづけします。
  - ③エルサレムへの道を線にそってのはさみで切りこみをいれます。
  - ④切った道の切れ目上から、イエスさまの乗った子ろばの持ち手を差し込み、道に沿って左右を入れ替えながらエルサレムへと動かしてみよう。
- すべてのものを愛し、平和への道を進んで行かれたイエスさまの愛の深さを思うことができたなら幸いです。

50課

3月12日

# 子ろばに乗ったイエスさまの行進



きりこみ



「主の名によって来られる方、王に、  
祝福があるように。  
天には平和、いと高きところに栄光。」

(ルカ19:38)



# ぶどう園はだれのものに

聖書

ルカによる福音書20章9～19節

暗唱  
聖句

家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。

ルカ 20：17

## 最後の譬えは「受難の譬え」

ルカ福音書の豊富な譬え話群のなかにおいて、この「ぶどう園と農夫」の譬えは最後の譬え話です。しかもルカがこの譬え話を置いた位置（文脈）はとても重要です。

イエスは、エルサレムへ激しい嘆きと涙をもって入城し（19：41～）、神殿の境内に入ったとたんに商売人たちを追い出していきます（19：45～）。巡礼者たちを搾取し、神への祈りを「取り引き」のようにしている様子を『強盗の巣』のようにしてしまつた」と怒り、また権威を身にまとい、他人の権威が気になり（20：1～2）、気高そうな外面や自分の席順などにばかり関心を持つ祭司長や律法学者たち（20：45～）の偽善性を批判します。言葉じりを捉えて陥れようとする企みのために「信仰問答」を仕掛けてくる（20：20～26、27～40）彼らやサドカイ人たちの欺瞞や思い違いを退けられ、またダビデの権威にあぐらをかいた自己栄化を撃破します（20：41～）。一転して、この神殿の中でもっとも大きな信仰は、二枚のレプトン銅貨をささげた貧しいやもめの中にあると指さし（21：1～4）、栄光を標榜する神殿の虚栄と空疎をイエスは撃ち続けます。その上で、神殿の崩壊と（21：5～6）、エルサレムの滅亡を予告し（21：20～）、弟子たちに、「目を覚まして」生きていくことを呼びかけるのです（21：34）。これらは、イエスが「神殿」に象徴された「イスラエルの信仰」の虚しい内実を問い、「破綻の宣告」をしている文脈です。「ぶどう園と農夫の譬

え」は、そのような文脈の中に置かれた譬え話であり、その倒錯した宗教体制の中で葬られていく自分自身の姿を重ねた「受難の譬え」だと言えます。

## この「譬え話」は イエスの覚悟

この譬え話は、主人が留守の間、農夫が実直に働いて豊作を導いたとか、逆に怠けていて主人に損失をもたらせたというような話ではなく、使用人（農夫）たちが反逆し、主人の農園を略奪しようとした物語です。

普通ならば、主人の跡取り息子を名代として送り込むことによって、効果的に事態を収束できるのですが、略奪を狙う強盗化した人々にとっては、跡取り息子ほど格好の餌食はないというわけです。使用人たちは、息子を殺さずすれば、この農園は自分たちのものになると考えてしまうのです。しかし、この思い上がりはとんだ思い違いであって、ただちに主人は彼らに報復し、まったく別の人々にこの農園を預け直すのです。

イザヤ書5章1～7節の「ぶどう畑の歌」を念頭に置きながら、さらに農夫たちによる反逆事件としてこのような譬えを仕立てるほどに、イエスはエルサレム神殿の様子（に象徴される宗教指導者たちの姿）に悲しみを抱いていましたし、何よりこれから自分自身の身に起こることを「これほどまでの出来事」として受け止めていたのです。

51課

3月19日



## あってはならないことが、 なくてはならないこと

「そんなことがあってはなりません」(20:16)。弟子たちはイエスの話を聞き続けることができませんでした。

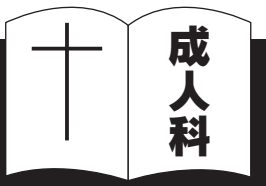
イエスは彼らを見つめた(20:17)のでした。「『そんなことがあってはならない』と言うか。しかし、そんなことが起こるのだ。そして、そんなことが起こることに意味があるのだ」。イエスはそう言わんばかりに詩編を引用して語ります。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」。

自分自身はまもなく、確かに捨てられる。しかし、その命を神は新しい建物(神の国、神の民)の親石となさるのだ。農夫たちが、思い違いによって自らの手中に収めようとした「神の国」、預言者たちを排撃して握りしめようとしてきた「神の支配」は、軽々と「ほかの人たち」(20:16)に委ねられ預けられていく。その時、その新しい世界の親石と

準備のための聖書日課			
13日	㊦	創世記1:27~31	被造世界の祝福
14日	㊦	イザヤ5:1~7	ぶどう畑の歌
15日	㊦	詩編118:22~25	家造りらが退けた石が
16日	㊦	イザヤ書 28:16~18	堅く据えられた礎
17日	㊦	使徒言行録 2:22~42	ペトロの説教
18日	㊦	一ペトロ2:1~10	生きた石の上に

なるのは、まぎれもなく「捨てられた石」すなわちこのわたしなのだ。そして、新しい神の民が形成されていくのだ。

この時、弟子たちを見つめたイエスは、間もなく襲いかかる受難と共に、その先に拓かれていく未来、新しい神の民の時代を確かに見つめていたのではないだろうか。



### 成人科

● 主人がぶどう園という働く場をつくり、自分たちを雇い、収穫の喜びに与る「世界」を用意してくれたのです。預けられた場で、恵みに応答して働くならば、持続的に生きていける「世界」を備えられたのです。しかし農夫たちはその状態に満足できず、その「世界」を略奪しようと企てました。創造の神・養いの神と人間の背信の関係を総括しているような譬え話であり、被造世界をズタズタにしている現代の人間の姿をも映し出しています。私たちの身近で起こるどんな出来事と重なりますか？

● 預言者たちが遣わされてきた時代はバプテスマのヨハネで終焉を迎え、歴史にとって決定的な「イエスの時」が立ち現れました。しかし、その「時の徴」は「輝かしい王」の姿ではなく「捨てられた石」のようでした。十字架に磔けられていくイエスが「親石」となるような「建物」。教会がこの「親石」を忘れるとき、再び崩れていきます。この時代の中で、十字架の主を礎とする<sup>いしづえ</sup>ことの意味を再確認してみましょう。

# ぶどう園はだれのものに

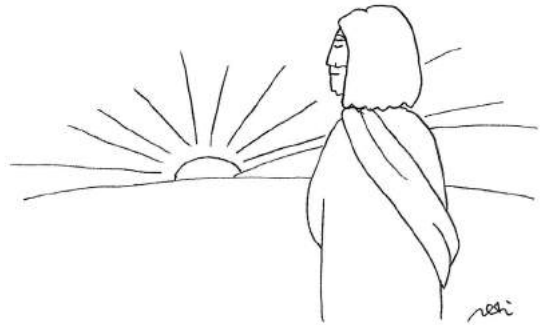
聖書 ルカによる福音書20章9～19節

暗唱 聖句 家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。  
ルカ 20：17

エルサレムでは、イエスさまは神殿の境内で毎日人々にみ言葉を教えました。「イエスのヤツめ。何の権威もないくせに!」。祭司長や聖書の先生たちはついにイエスさまを殺そうと考えます。ところが、人々がイエスさまの話にあまりに熱中していてどうにもできません。

イエスさまはたとえ話を始めました。「ある人がぶどう園を作り、農夫たちに貸して長い旅に出た。しばらくして収穫の時になったので、ぶどう園の主人は僕を一人遣わした。農夫たちが主人に納める分を受け取るために。ところが農夫たちは僕をゴコゴコに袋叩きにして、一房も納めないで追い返した。そこで主人は別の僕を送った。しかし、農夫たちは汚い言葉で罵ってまたも僕を袋叩きにし、一房も納めずに追い返した。そして三番目に送られた僕も袋叩き。農夫は傷だらけの僕をそのまま外へ投げ捨てた。ほとほとがっかりする主人。『さて、どうしよう…。そうだ、私の愛する息子を送ることにしよう。きっとこの子なら、さすがの農夫たちも大事に敬ってくれるだろう』。ところが農夫たちは主人の息子を見るなり相談を始めた。『こいつは跡取りだぜ。袋叩きじゃダメだ。一思いに殺してしまおう。そしたら財産はすべて俺たちの物ってことよ!』。不敵な笑みを浮かべる農夫たち。息子をぶどう園の外に放り出し、本当に殺してしまった」。

蒼ざめる人々にイエスさまは続けます。



「さあ、ぶどう園の主人はどうするだろうか。今度こそ主人は戻って来て農夫たちを滅ぼして、ぶどう園は別の人たちに預けるに違いない。」「ダメです! イエスさま。そんなことがあってはなりません!」。

するとイエスさまはその人たちをじっと見つめて言いました。「聖書にこう書いてある。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』神は思いもよらぬ大逆転をなさる方。この石の上に落ちる者は木っ端みじん、この石が落ちればその人はペシャンコになる」。

遠くから耳をそば立てていた聖書の先生たちや祭司長たちは、「もう許せん! すぐにでも殺してやるぞ!」と怒り心頭。イエスさまが自分たちへの当てつけに話していると気づいたからです。でも、やはり人々の目が恐くて、手を出すことができませんでした。

さて、夕方になって人々は家路につきます。沈みかけた夕日が、一人残されたイエスさまを照らします。まもなく深い闇の時。しかしイエスさまは知っています。神は必ず光輝く朝をもたらしてくださることを。

# ぶどう園はだれのものに

青少年科



聖書

ルカによる福音書20章9～19節

暗唱  
聖句

家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。  
ルカ 20：17

## 聖書から…

ある人がぶどう園を農夫たちに貸し、長い旅に出ます。収穫の時期に僕を送り出しました。しかし農夫たちはこの僕を袋叩きにし、何も持たせずに帰ります。次にも同じことが起こります。そして3人目の時には傷も負わせました。ぶどう園の主人は、自分の息子を送ればきっと大丈夫と期待し送り出しますが、農夫たちは、この息子をぶどう園の外にほうり出して殺してしまいます。

イエスさまは、このたとえ話の最後に、ぶどう園の主人はこの農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えると言われます。人々は、「そんなことがあってはなりません」と言いますが、イエスさまは「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」と言い、捨てられた石が大切な石となり、その上に落ちるなら打ち砕かれ、この石が落ちれば押しつぶされると教えられます。

「捨てられた石が隅の親石に」という部分は、エルサレムの城壁の外で、十字架で死なれたイエスさまのことです。神さまは、イエスさまの復活を通して、私たちに希望を示してくださっています。嘲られることや、死が終わりではないと…。

## 分かち合おう

- 「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」(ヨハネ 15：5) というイエスさまの言葉があります。中東では、ぶどうは、親戚知人友人が集う食卓に欠かせない喜びの象徴であるワインの材料です。その農場での事件は、かなり衝撃的な内容です。弟子たちは、どんな思いでこのたとえ話を聞いたと思いますか？

今は受難節にあたります。イエスさまの十字架を思いながら過ごしています。苦しみや悲しみ、病の中にあっても、イエスさまと繋がっていることで、支えられていると感ずることがあるでしょうか。

- もうすぐ今年度も終わろうとしています。1年を振り返り、イエスさまが教会の隅の親石として大切な働きをしてくださったと思うことを分かち合ひましょう。

イエスさまの十字架へと続く受難の出来事とは、何を意味しているのでしょうか。そして、そのことは、私たちの「今」にどう関係しているのでしょうか。十字架で、既に苦しんでくださったイエスさまがおられます。私たちは、「もう苦しむ必要はない」と宣言されているのではないのでしょうか。

51課

3月19日



# ぶどう園はだれのものに



ルカによる福音書20章9～19節



家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。  
ルカ 20：17

## 聖書から…

イエスさまは、エルサレムの民にむかって最後のたとえとなる「ぶどう園と農夫」の話をなさいました。たとえの中で農夫たちは、ぶどうの実りを独り占めし、主人の僕たちに乱暴し、最後には主人の息子を外に放り出して手にかけてしまいました。この農夫たちとは、律法学者や祭司長たちのことだったので（20：19）。つまり、イエスさまは「律法学者や祭司長たちは、民の献げ物を独り占めし、神さまから遣わされた預言者たちに乱暴をし、最後にはエルサレムの城壁の外で自分を手にかけるよ的な外れな者たちだ」と批判をしたのでした。

当時の社会の仕組みでは、農夫たちの悪だくみは成功するはずでした。ぶどう園の主人の跡継ぎがだれもいなくなった場合には、農夫が土地を所有できるというきまりになっていたからです（参考：K.H. レングストルフ著、泉治典・渋谷浩訳『NTD 新約聖書註解』NTD 新約聖書註解刊行会、1976年、474頁）。でも、イエスさまは「律法学者や祭司長たちの思い通りにはならない」と言われました。「わたしはまもなく外に捨てられる。しかし、捨てられるわたしが隅の親石となる」。「そして、ぶどう園はほかの人たちに与えられるにちがいない」と新たな未来を語られたのです。ぶどう園にたとえられた神の国は、一部の人のものにはなり得ないものなのです。独り占めしようとした者たちが、外に捨てた

石を基礎として、新たに広がり、分け与えられていくのですね。

## 活動①

### 「捨てた石入れ」

十字架のしるしをつけて教会に見立てた入れ物（カゴや段ボール箱）を用意します。新聞紙をくしゃくしゃに丸めた石のボールをつくり、決まった場所から入れ物を狙い、投げて入ったら成功です。教会は、捨てられた石であるイエスさまを基礎とする場所であることを確かめられたなら幸いです。

## 活動②

## ワークシート

### 「ぶどう園はだれのもの？」

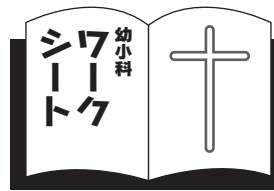
イラストを見て色を塗りましょう。そして、「ぶどう園は…」に続く暗号を解いてみましょう。ヒントは、イラストの名前記号が対応しています。記号に文字をあてはめて解読してみましょう。ワークを通して、神の国と教会はだれのものであるのかをいっしょに確かめましょう。

「7㊦」	▽◎	「㊦羊」	*△
「㊦㊦」	○◆	「7㊦㊦」	☆▽□
「G㊦」	×#	「㊦㊦」	◇◇

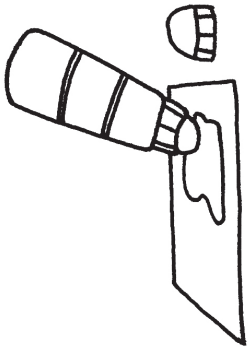
「㊦㊦㊦㊦㊦」 27㊦ 「㊦㊦㊦㊦㊦㊦」 ㊦㊦㊦㊦㊦  
㊦㊦㊦

51課

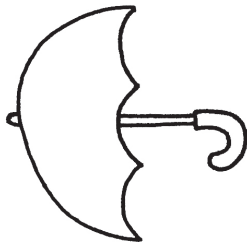
3月19日



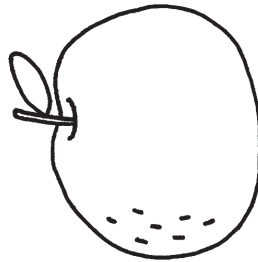
×  
#  
↑



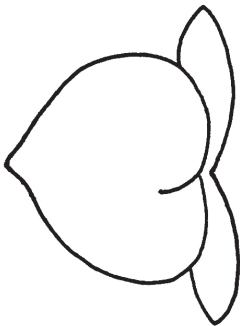
○  
◆  
↑



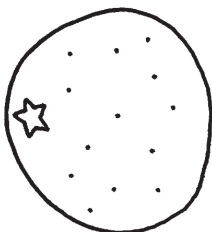
△  
◎  
↑



◇  
◇  
↑



☆  
△  
□  
↑



\*  
▽  
↑



「 # ◇ # ◎ ☆ □ 」 2 1 2  
「 # ◇ # △ ○ □ ◆ 」 は ぶどう園は



## 頂点の時、原点の時

過越のほふ小羊を屠るじよこうさい除酵祭の夜。主イエスは弟子たちと地上での最後の食卓を囲みました。ただし、イエスだけがそれを知っていました。間もなく自らの身体は当局に引き渡され、処刑される。裂かれ、血を流して息絶えていく。けれどもその命は弟子たち一人ひとりの新しい命となり、新たな原点となり、また生命力（希望）の源となっていく。そのことを記憶に遺していくための決定的な食事だったので。イスラエルの歴史とご自身の存在の位置、そしてご自身の生と死と弟子たちの未来とを結び付け、意味づけながら「過越の食事」をすることを、イエスは切に願っていました。

ここにはルカの信仰や歴史観も反映しています。ルカは、神とイスラエルの救いの契約に基づく歴史の頂点として、イエスの存在を証します。イエス以前の歴史を「イスラエルの時」とでも言いましょう。その頂点、救いの約束の成就としてのメシアが現れ歩まれた、それが「イエスの時」。そして（使徒言行録に続きますが）イエスの死と復活の後、舞台を世界に移しながら、聖霊の導きのもと教会が新しい契約の民を形成していく「教会の時」という三つの時の理解です。

それゆえに、この最後の晩餐の記事も後々の教会を意識して「使徒たち」という言葉を用いますし（マタイ、マルコは「弟子たち」、後に「主のほんさん晩餐」の制定となっていく言葉「あなたがたのために与えられる・流される」と語ります（マタイ、マルコは「多くの人のために流される」）。ルカは、この食卓の当事者

としての教会（使徒たち）を大切に意識していますし、いま自分や信仰共同体が生きている「教会の時」の原点がここにあることを強調しています。「教会の時」の中心には、たとえ今はもう目に見ることができなくなっているとしても、あの時、この地上を生き、語られたイエスがおられるのだ、と。

## イエスの思い

イエスご自身、幼い時から、常にこの祭り、この食事に与って育ちました。出エジプトの出来事によって解放されたイスラエルの歴史の意味について、彼は洞察し続けたことでしょう。人は何から解放されなければならないか。人は何から何に向かって脱出しなければならないか。イエスは、そこに注がれていた神の思いを念頭に、常に生きたのです。それが、イエスの言葉をつくり、イエスの業、イエスの人との関わりをつくってきたとも言えます。

この日、除酵祭の夜。イエスご自身、この渴いたパンと葡萄酒に、ご自身の命の意味を重ねられていくのです。もう間もなく、自分自身は捕らえられ処刑されていくことを、彼自身が嘔みしめ、また飲み込んでいく食事でもありました。この貧しいパンを裂きながら「わたしの命はこのパンだ」と伝え、葡萄酒を飲み回しながら「わたしの死はこの葡萄酒。わたしの生と死を受けて欲しい、記念として生きて行って欲しい」と杯を回したのです。自分の命を弟子たちの命の中に残そうとし、自分の死を弟子たちの新たな命となさる

うとするイエスの最後の関わり、最後の言葉、最終的な交わりでした。

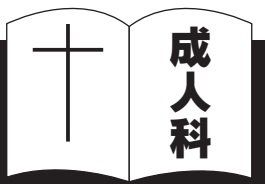
## やがて、この食事を

弟子たちは、翌日の十字架と三日後の復活の経験を経て、この最後の食卓の意味がどれほど濃密なものであり、また重要な晩餐であったのかを知りました。裂かれたパンと注がれた葡萄酒に、人間の背任と残酷が固められ、同時にイエスの赦しと愛が絞られていたことを知りました。不信と裏切りの火種をすでに灯していた自分たちのために、それでも愛し抜くしるしとして、招き続けるしるしとして、パンを裂き杯を回したイエスの信実、命がけの関わりを見たのでした。

初代教会は、イエスの命じた言葉に立って「主の死を記念する食卓」を、「新しい民」の「原

準備のための聖書日課			
20日	㊦	出エジプト 12:21~28	主の過越
21日	㊦	ルカ9:21~27	十字架を負うて
22日	㊦	ルカ22:24~27	仕える者となりなさい
23日	㊦	ルカ23:44~49	イエスの死
24日	㊦	一コリント 11:23~26	主の死を 告げ知らせる
25日	㊦	一コリント 11:27~34	主のからだを わきまえて

点」とし、この食卓にあらゆる人々を招いていくことを「宣教」として歩いていったのです。それは私たち、すなわちこの時代を生きる教会への遺産、心からの招きでもあるのです。



成人科

●「わたしの記念として」(22:19)の言葉はルカのみ記されています。記念して生きる、とはどういうことでしょうか。私は、「倣い、従うということ」だと思います。この晩餐の記事に続くイエスの言葉は「自分があなたがたの間で給仕をするもののように生きてきた」故に、あなたがたも「他者に仕える」生き方をするようにとの勧めがあります。

●「主の晩餐」は「主の死の記念」です。「主の死(十字架)」とは「主の生き方の結果」ではないでしょうか。「主の晩餐」は、主の生き方を噛みしめ、主の言葉や歩みに倣って生きていこうと決意する時なのです。「主の晩餐」は、一方的な恵みの業としての主の十字架を覚えると共に、自分の(私たちの)背負うべき十字架を、この時代の中で見据え、決心する時です。「この食卓」を持つ交わり。その交わりに名付けられた名前が「教会」なのです。

52課

3月26日

# 最後の晩餐

聖書

ルカによる福音書22章14～23節

暗唱  
聖句

苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。ルカ 22：15

昔、神はエジプトの奴隷だったイスラエルの民を救い出されました。人々はこのことを決して忘れないように、毎年過越の食事をします。苦菜を食べて奴隷の苦しみを、酵母抜きパンを食べてあわてて逃げたあの日を思い起こします。そして肉を頬張り、グラグラ笑って語り合い、大きな声で賛美を歌って、神に解放された自由の喜びを家族みんな味わいます。

しかし、この日の過越の食事はいつもと違っていました。イエスさまは弟子たちをまっすぐ見つめて言われます。「苦しみを受ける前に、わたしはどうしてもあなたたちと一緒にこの過越の食事をしたかった」。そしてぶどう酒の杯を持ち上げて感謝すると「これを取って、互いに回して飲みなさい」。弟子たちは言われた通り一つの杯から分け合いました。それからパンをとって感謝すると、それを裂いて一切れずつ手渡しました。「これはあなたたちのために与えられるわたしの体です」。「これがイエスさまの体?」。弟子たちは不思議そうにパンを見つめ、言われた通りに食べました。食事が終わると、イエスさまはもう一度ぶどう酒を取って言いました。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です」。「私たちのために流されるイエスさまの血?」。「新しい契約?」。弟子たちはちんぷんかんぷんでしたが、差し出されるままに飲みました。それを見届けると、イエスさまはこう言いま



した。「今ここにわたしを裏切る者がいる。わたしは神のご計画通り去っていく」。

動揺しざわつく弟子たちに、イエスさまは言いました。「これからわたしは、あなたたちのためにこのように体を裂かれ、血を流されて殺される。その時、あなたたちはわたしを見捨てる。それでもわたしはあなたたちを赦す。わたしはあなたたちを愛している。今晚、あなたたちはわたしの命、わたし自身を受け取った。このことをしっかり憶えていておくれ。これは神があなたたちと結ぶ新しい契約だ。間もなく、あなたたちがわたしの新しい命に生かされ、み国を伝える時が来る。そしていつか必ず、この地が神のみ心で満ちるその日がやって来る。その日こそ、みんなで過越の食事を思いっきり楽しもうじゃないか。わたしはそれまで過越の食事を口にしない」。

これが、イエスさまがずっと続けてこられた罪人たちとの食事の最終回。しかしこの食事の交わりは、イエスさまを記念してこれからも続けられるよう、今弟子たちに託されたのです。

# 最後の晩餐

聖書

ルカによる福音書22章14～23節

暗唱  
聖句

苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。ルカ 22：15

## 聖書から…

イエスさまと12弟子と一緒に食事するのは、当たり前のことでした。けれども、この日の晩餐が彼らにとって、最後の晩餐となります。レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」に描かれている場面です。

出エジプトの出来事は、神さまの、み手によって、その民が奴隷の地エジプトから救い出された出来事です。パンと杯が登場し、これは、主の晩餐式の元になっている食事です。平らなパンは、かつて急いでエジプトを脱出した人たちの置かれていた状況を表し、杯は結婚式などで飲まれ、喜びを象徴するアイテムです。

しかし、この最後の晩餐の時に、これまでの過越の晩餐でのパンと杯の意味から、さらに意味深いものへと更新され、それが使徒たちに伝えられました。パンはイエスさまの命をあなたたちのために差し出すという意味。ぶどう酒は十字架で流されるイエスさまの血と、それによる新しい契約です。

これまでの「主の民」の歴史、そして、この「最後の晩餐」の時、そして、その後に残り今を経て将来へと繋がってゆく教会の歴史、この壮大な神さまのご計画の中心にイエスさまの十字架と、復活があることをこの箇所は示しているのではないのでしょうか。

## 分かち合おう

- イエスさまは、これから自分のことを裏切り、逃げてしまう12人の弟子たちと一緒に、「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた」(22：15)と言われました。52課の「聖書の学び」には、イエスさまが弟子たちのことを「それでも愛し抜くしるしとして、招き続けるしるしとして、パンを裂き杯を回した」と書いています。自分の感情や思いを第一としていたならばできないことだったでしょう。では、何のために、また誰の思いや計画を想いながら、これほど丁寧に弟子たちとパンや杯を分かち合われたのでしょうか。

- イエスさまは最後の晩餐の席で、パンや杯という目に見え、手に触れることのできるものを使って大切なことを弟子たちに教えられました。その時の言葉が今も残され、主の晩餐式で語り伝えられ続けています。

16節でイエスさまは「神の国で過越が成し遂げられるまで」と意味深なことを言われました。これは、イエスさまが「神の国は必ずやって来ます。そしてその時にはまた、わたしたちは一緒にパンや杯を分けあっていただきます」という将来と希望を表す言葉です。エレミヤ書 29章 11節のみ言葉を思い出します。読んでみましょう。

52課

3月26日



# 最後の晩餐

聖書

ルカによる福音書22章14～23節

暗唱  
聖句

苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。ルカ 22：15

## 聖書から…

祭司長や律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考え（51課）、機会をねらい、根回しを進めていました。危険は、もう目前まで迫っていたのです。しかし、イエスさまは、そのことを承知の上で「二階の広間」（22：12）で、弟子たちといっしょに食事の席に着かれたというのです。

イエスさまは、最後の晩餐の席で、弟子たちに言いました。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた」（22：15）と。イエスさまの願いは、最後の最後まで、一緒に食卓を囲むことでした。私は、このイエスさまの姿に、死に様ではなくて、生き様を見ます。迫り来る危険をただ一人受け止め、だれ一人寄せ付けなくて、危険に向かっていくというのではなく、命のある限り「最後の最後まで一緒に生きたい。一緒にごはんを食べたい」と願い、パンを裂き、杯を分かち、関わって生きたいと切望される姿に、私は凄味を感じるのです。

イエスさまの生き様が詰まった最後の晩餐は、その後、教会の根っことなりました。十字架の出来事の後、エルサレムの「家の上の部屋」（使徒 1：13～2章）、つまり二階の広間に留まって祈っていた弟子たちは、おそらく食事の度にイエスさまとの最後の晩餐を思い起こして、そこに込められたイエスさまの生き様を味わいなおしたことでしょう。そこに、ペンテコステの出来

事は起こったのです。

## 活動①

### 「これだけはやっておきたい！」

2022年度は今週で最後ですね。新年度を迎えて進級・進学する前に、これだけはやっておきたい！ と思っていることはありませんか。たとえば、ケンカしたままの〇〇ちゃんとの仲直り、転校した友だちにお便りを出すなど。みんなで分かち合ってみましょう。また、イエスさまが最後の食事を弟子たちと一緒にしたいと願われた時の気持ちを想像してみましょう。

## 活動②

### ワークシート

### 「イエスさまの願い」

●準備●ワークシート、色鉛筆

①過越のパンと杯に色を塗りましょう。過越祭の家の入口のしるしも忘れずに塗りましょう（「一束のヒソブを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい」出エジプト記 12：22）。

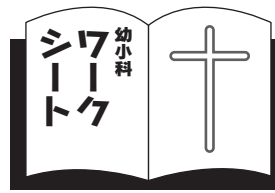
②ことばの迷路にもチャレンジしてみましょう。ヒントは、暗唱聖句のみことばです。

③イエスさまは、主の晩餐に私たちをも招いておられます。みんなで一緒に主の晩餐に与ることができる日を私たちも切に願いながら、今日の暗唱聖句をみんなで読みましょう。

※こたえ



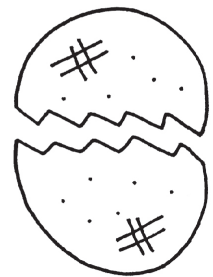
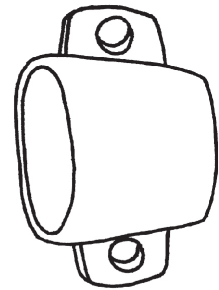
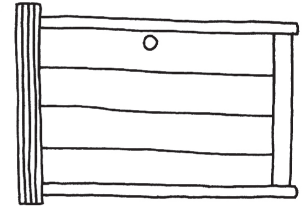




↓ スター

く	う	ま	え	に	ね	る	に
る	を	る	け	あ	な	た	な
し	み	を	う	け	と	が	る
か	は	え	ま	て	め	た	か
な	む	を	り	の	い	と	と
ら	い	て	た	い	す	こ	も
ず	い	い	に	の	で	こ	に
ち	の	き	せ	み	お	の	こ
が	け	た	い	こ	ぎ	す	の
じ	く	し <sup>よ</sup>	の	し	ま	つ	り
を	ど	う	ぞ	の	お	す	で
し	た	い	と	お	た	だ	け
は	し	た	わ	も	っ	で	で
せ	ね	が	っ	て	い	き	な
つ	に	こ	う	た	の	い	

↓ コール



52課

3月26日

## イエスは



左掌に右中指で釘の跡を指す



右掌に左中指で釘の跡を指す



左掌の上に  
立てた右親指をのせる

## このように



「諸々(色々)…」①右手の  
親指を立てた人差指を



②ひねりながら右へ移動



①



②



「すへて」  
両掌下向き指先前方に伸ばす



下に向かつて  
円を描くように動かす

## 話して



「話す」(説明)  
左掌上を右手小指側の手先で



小刻みにたたくように  
2回繰り返す



「後」  
掌を前に向け前に押し出す

## から、

### 先に立って進み、



「先立つ」  
指先を上に向けた左手の前に



人差指を立てた右手を出す



「場所」…5指を軽く曲げた  
手を下向きに置く



### エルサレムに



指文字「エ」…掌前向き  
全指を折り曲げる



指文字「ル」…掌前向きで  
親指・人差指・中指を伸ばす



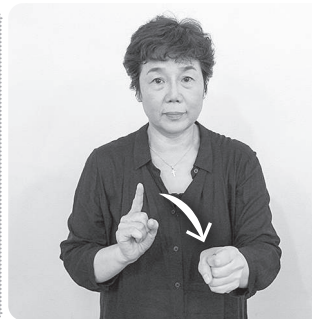
指文字「サ」…掌前向き  
4指を握り親指を折り重ねる



指文字「レ」…掌前向き  
親指横向き・人差指上向き



指文字「ム」…人差指を  
左向き、親指を上向き



「向かう」(目指す)  
左手を丸めて作った輪に



### 上って行かれた。



右人差指を当てる



立てた右人差指(「主」先頭に  
指先上向き左手(弟子たち)を



伴って進んで行く様子





# 暗唱聖句 カード

## 新共同訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- <http://www.bapren.com/>



イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。

ルカ 2 : 52

41課 1月8日



イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。

ルカ 4 : 4

42課 1月15日



イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。

ルカ 5 : 20

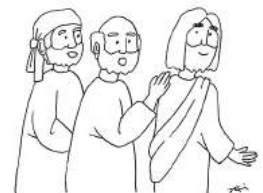
43課 1月22日



安息日に律法で許されているの  
は、…命を救うことが、滅ぼすことか。

ルカ 6 : 9

44課 1月29日



貧しい人は福音を告げ知らされて  
いる。わたしにつまづかない  
人は幸いである。

ルカ 7 : 22 ~ 23

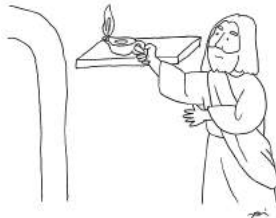
45課 2月5日



わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

イザヤ 56 : 7

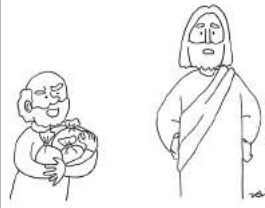
46課 2月12日



だから、どう聞くべきかに注意  
しなさい。

ルカ 8 : 18

47課 2月19日



神のさまざまな恵みの善い管理  
者として、その賜物を生かして  
互いに仕えなさい。

1ペトロ 4 : 10

48課 2月26日



一人の罪人が悔い改めれば、  
神の天使たちの間に喜びがあ  
る。

ルカ 15 : 10

49課 3月5日



神は、昼も夜も呼び求めている  
…彼らをいつまでもほうってお  
かれることがあろうか。

ルカ 18 : 7

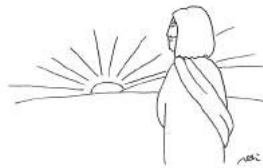
50課 3月12日



イエスはこのように話してから、  
先に立って進み、エルサレムに  
上って行かれた。

ルカ 19 : 28

51課 3月19日



家を建てる者の捨てた石、これ  
が隅の親石となった。

ルカ 20 : 17

52課 3月26日



苦しみを受ける前に、あなたが  
たと共にこの過越の食事をした  
いと、わたしは切に願っていた。

ルカ 22 : 15

# 暗唱聖句 カード

## 口語訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- <http://www.bapren.com/>

40課 1月1日



イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。 ルカ 2 : 52

41課 1月8日



イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」。ルカ 4 : 4

42課 1月15日



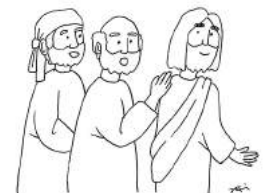
イエスは彼らの信仰を見て、「人よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。 ルカ 5 : 20

43課 1月22日



安息日に…命を救うのと殺すのと、どちらがよいか。 ルカ 6 : 9

44課 1月29日



貧しい人々は福音を聞かされてい。わたしにつまずかない者はさいわいである。 ルカ 7 : 22 ~ 23

45課 2月5日



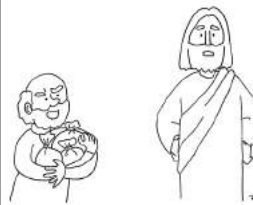
わたしの家はすべての民の祈の家となえられるからである。 イザヤ 56 : 7

46課 2月12日



だから、どう聞くかに注意するがよい。 ルカ 8 : 18

47課 2月19日



神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互のために役立つべきである。 1ペトロ 4 : 10

48課 2月26日



罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使いたちの前でよろこびがあるであろう。 ルカ 15 : 10

49課 3月5日



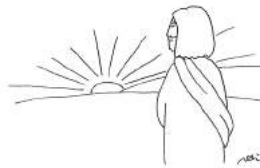
神は、日夜叫び求める選民のために…長い間 そのままにしておかれることがあろうか。 ルカ 18 : 7

50課 3月12日



イエスはこれらのことを言ったのち、先頭に立ち、エルサレムへ上って行かれた。 ルカ 19 : 28

51課 3月19日



家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。 ルカ 20 : 17

52課 3月26日



苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしよう、と切に望んでいた。 ルカ 22 : 15



# 神さまが豊かに、 豊かに…。

『聖書教育』のスタイルが2023年度から新しくなることを踏まえて、これまでの誌面を支えてくださった方々を紹介しています。今号は、英語版『聖書教育』の翻訳と英語校閲を担当して下さっている方々にスポットをあてました。

差し出した働きを、神さまが豊かに豊かに用いてくださいます。



翻訳  
肥後留里子

1995年

現在

神さまのみわざは、人間の言語という土の器には入りきれない大いなるわざですが、それを何とか言葉化し、さらにそれを他の言語へと写し取ろうという翻訳は、楽しいけれど終わりのない作業です。1995年より27年間、聖書教育の英訳をさせていただきました。みことばと格闘し、執筆して下さった先生方のメッセージを翻訳のためにじっくりと読ませていただきました。なんと感謝なことであったかとおらためて思っています。おぼつかない信仰の歩みの中で、幾度となく、翻訳

している言葉そのものから励ましや慰めを受けてきました。連盟事務局の皆さま、校閲者の皆さまに忍耐を持って支えていただいたことを感謝申し上げます。そして、これまで一緒に英訳を担って下さった、また、現在担っておられる仲間の皆さまに感謝申し上げます。

AIによる機械翻訳の精度も増し、『聖書教育』は2023年度からは多言語化への試みに変化することの予定です。この更なる飛躍を心から喜び、期待しています。



小林美果



角田秀明



山中真菜



山中実結



英語校閲  
Laura Foushee

2020年

現在

コーポラティブ・バプテスト・フェローシップのフィールド・パーソンnelとして、そして日本バプテスト連盟とのパートナーシップの奉仕の中で、2年間『聖書教育』の英語バージョンを整えるために有能な翻訳者とともに働かせていただきました。その働きを通して、文法のことだけではなく、私たち自身の心とキリスト教の聖なるみ言

葉とを繋げるために、言語がどれほど大切であるかをより深く理解することができました。さらに、日本語を学んでいる私にとっては、隣人に福音をより自然に伝えることができるように、信仰的な言葉を本来の日本語にする勉強にもなりました。この機会を与えてくださり、すべての言語の神に感謝いたします。

# 月刊 新『聖書教育』4月号 の予告

## 巻頭言

### イースターメッセージ

高橋秀二郎

## 記事

### 多様なわたしたちが共に

宮井 武憲

### 聖書の学び・共同学習

岡村 直子

### 毎日のみことば（ディボーション）

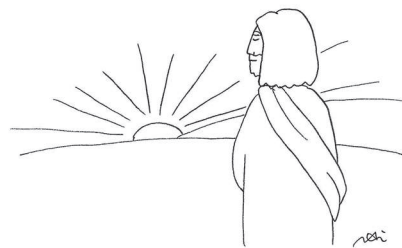
坂本 献

### ワークシート

川内 活也

### ワークシート（イラスト）

吉崎 愛



ご意見、ご感想をお待ちしております。

FAX ● 048-883-1092 Eメール ● seishokyouiku@bapren.jp（編集担当）

## 聖書教育

● 2022年11月20日発行・発売 ● 定価1,200円（税込）

発行人 中田 義直

発行 日本バプテスト連盟

〒336-0017 埼玉県さいたま市南区南浦和1-2-4

TEL : 048-883-1091 FAX : 048-883-1092

日本バプテスト連盟 HP <https://www.bapren.jp/>

聖書教育 HP <https://www.bapren.com/>

ご注文は連盟販売管理室まで hanbai-kanri@bapren.jp

郵便振替口座 00150-9-192579

印刷 ニューライフミニストリーズ（新生宣教団）

● 内容についての編集責任は日本バプテスト連盟にあります。

● ワーク・教材以外の複製はご遠慮ください。

● 聖書は日本聖書協会新共同訳を使用しています。

©2022 日本バプテスト連盟

● 乱丁落丁はお取り替えいたします。日本バプテスト連盟販売管理室までご連絡ください。

● 表紙 三浦あや

● みんなで聴く聖書のおはなしカット 香月 藍

● レイアウト JC ユニット

● 幼小科ワークシート 吉崎 愛



表紙「見つけだすまで」

2023年4月号から  
月刊『聖書教育』が  
いよいよスタート!

赤ちゃんからおとなまで

# 聖書教育

2023～2025年度 総主題

今、共にキリストを証しするために—新たな『自立と協力』—

## プログラムの概要

2023年度からの月刊『聖書教育』は機構改革が進む中、これからの連盟検討委員会と新『聖書教育』準備委員会が協働しながら企画を進めています。日本バプテスト連盟の機構改革の理念に基づき、2023～2025年度の3年は総主題を「今、共にキリストを証しするために—新たな『自立と協力』—」としました。そして年毎に「今」「共に」「キリストを証しするために」と順を追ったプログラムとして学ぶ予定です。

新しい月刊『聖書教育』では、これまでの「聖書の学び」に加えて、日々のディボーションを掲載し、クラスの準備だけでなく、聖書から日々養われることも大切にします。一人で、また仲間と共に、毎日み言葉に触れて言葉を交わし合いたくなるようなメッセージをお届けいたします。月刊ですから、コンパクトで持ち運びに便利になります。ぜひ、携帯してご利用ください。



サイズ  
A4

表紙を含めて

16ページ(4週月)

または20ページ(5週月)

毎日開く『聖書教育』、対話が生まれる『聖書教育』

- 共同学習のために
- 一人ひとりの学びのために
- 子どもたちの活動のために
- 多様なわたしたちが共にキリストを証しするために

コンセプトは?

気になる  
内容は?

**巻頭言メッセージ** ▶ 総主題や年主題も心にとめながら、教会暦・バプテストの暦からのメッセージ。

**聖書の学び** ▶ いくつかの立場の解釈が含まれるような幅広い聖書研究。

**共同学習(大人クラス)** ▶ 「今、私たちは…」と大人クラスで共同学習を深めていくためのポイント。

**共同学習(子どもクラス)** ▶ 子どもたちとクラスで学びのテーマについて考え、話し合うためのポイント。

**毎日のみことば(ディボーション)** ▶ 「聖書の学び」を受けての黙想や、次週の準備となる聖書箇所から、6日間の聖書日課とショートメッセージ。

**ワークシート** ▶ 子どもたちの共同学習を助けるワークシート。イースターやクリスマスプログラムのためのアイデアも。

**多様性のページ(5週目がある月)** ▶ 教会学校の働きは、教会の中だけではありません。生の全領域で、主を証しすることは、様々な出会いと出来事を生み出します。そうした「今」の時代を生きる教会で共に分かち合いたいテーマに迫ります。

価格

年間予約購読 12冊 4,000円(税込)にて  
ご注文を承ります。  
年度途中からのご注文は、  
1冊385円(税込)となります。

お申し込みは  
連盟販売管理室まで

日本バプテスト連盟

〒336-0017  
埼玉県さいたま市南区南浦和1-2-4  
TEL: 048-883-1091 FAX: 048-883-1092  
✉ hanbai-kanri@bapren.jp